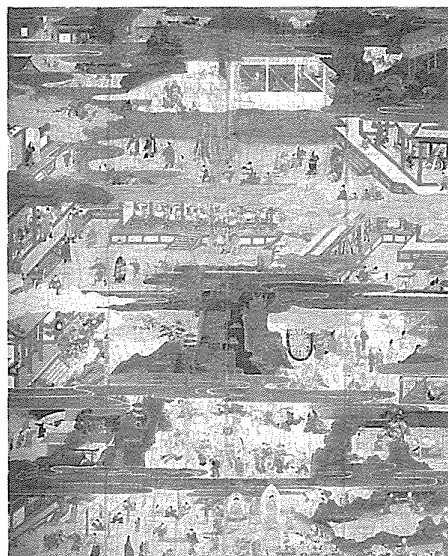


第十一章 古代・中世の文化財



温泉寺縁起（京都国立博物館蔵）

第一節 古代・中世の美術

第二節 古代・中世の建築

第三節 遺跡

第一節 古代・中世の美術

1 奈良・平安時代の美術

平安時代
以前 六甲山麓が明石海峡から大阪湾へと続くなだらかな海浜丘陵地帯に位置する神戸は、穏やかな瀬戸内海気候と豊かな山海の恵みによって、住みよい環境にあったため、太古より多くの人々が生活していた。住居跡や古墳が多く、しかもそこには豊かさや権力を示す様々な遺跡や出土遺品が発見されている。すでに旧石器時代には人跡が認められるが、縄文時代に入り、次第に縄文土器などの生活のための造作物が多くなる。やがて弥生時代になって稲作農耕が伝えられると、そこに日常生活を越えた社会を象徴する造形物が作られた。芸術的な人間の営みが芽生えてきた。

西撰の六甲山麓にはいわゆる銅鐸どうたつの出土がきわめて多く、しかも美術的に興味深い文様や絵画表現を伴ったものがある。銅鐸は畿内にその出土例が集中しているが、六甲山麓の銅鐸は中でも美術的に興味深い。既に『新修神戸市史 歴史編Ⅰ 自然・考古』に詳説されている。

特に昭和三十九年（一九六四）に発見された灘区桜ヶ丘出土の銅鐸一四個は、出土状況が明確で、しかも

個々の銅鐸に表されている文様や絵画がバラエティーに富んでおり、古代人の芸術を窺わせる貴重な発見であった。中でも一号鐸・二号鐸・四号鐸・五号鐸に絵画表現が見出される。しかも一号鐸と二号鐸とは銅鐸の身の周囲を巡るように、あたかも絵巻物を巻き付けたように構図される。また四号鐸と五号鐸とは袈裟^{けしあ}襴文^{たすきもん}に仕切られた区画の中にそれぞれ一場面ずつの絵画が表現される。ここで具象的で、しかも説話性のある絵画を描く場合の主な構図法である絵巻のような横に連続する流走式と、いわゆる漫画のような独立した一コマずつの場面を配列していくものが既に使い分けられている。

桜ヶ丘銅鐸には狩猟や農耕に関係する場面が多く、臼をつくところや弓矢で鹿を射るところ、また喧嘩と見られるところなど当時の生活を象徴していると考えられる場面がある。またそこには鹿・トンボ・亀・トカゲ・蟹・蛙・鶴などおそらく狩猟の対象や身近にいた禽獣昆虫の類が表現されたものとおもわれる。これらの絵画表現の内容について、農耕讃歌とするもの、また絵文字であるとするものなど、様々な説がある。当時の社会状況の中で意味のある場面であったのであろう。

やがて古墳時代になって多くの古墳が各河川の流域に沿って築造された。しかし古墳からは刀剣などの武器や装身具や鏡などの副葬品のほか土器や埴輪^{はろ}が出土しているが、美術的に他に比べて特徴的な遺品は少ない。

本格的な美術工芸品が現れるのはやはり仏教美術が日本にもたらされてからのことである。兵庫県でも播磨^{はりま}地方は早くから開け、中央との交流も盛んで、半島や大陸からの渡来人も定着していた。また西摂^{せいと}の尼崎・伊丹・芦屋なども中央に近く、早くから仏教文化の恵みに浴していた。これらの地域には白鳳時代の仏教寺

院跡が多く見出され、また文献にも法隆寺などとの密接な関係が窺われる。ことに播磨の一乗寺（加西市）や鶴林寺（加古川市）などには白鳳時代のしかも朝鮮半島の影響の強い金銅仏や、中央での制作になると思われる洗練された仏像が現存する。しかしながら現在の神戸市に当たる地域には古代の寺院跡は少なく、また飛鳥・白鳳時代の作品としては現存するものはない。

やがて奈良時代に入り、ようやく大龍寺（中央区再度山）に木像の菩薩立像（巻頭口絵12参照）が見出される。檜の一木造で、頭体台座も一木で彫出し、両腕・天衣も共木であるが、頭髮・面部・上半の肉身・条帛などは乾漆によって盛り上げられている。木彫に乾漆を併用する技法は木心乾漆像から木彫像への過渡期的な技法として奈良時代後期にしばしば認められる。この地域の木彫としては最古の作品である。奈良時代の盛期の古典的な厳しさはやや薄らいで、全体に動きの少ない、穏やかなまとまりを示しているが、すがすがしい表情と無駄のない装身具や着衣の表現はこの時代の様式をよく表している。大龍寺はもと神護景雲二年（七六八）和氣清麻呂の開創になると伝えるが、本像の由緒については確定できない。

平安時代 平安時代に密教が伝えられ、それに伴って密教美術が日本の仏教美術史を大きく様変わりさせた。の美術 神戸市内の平安時代初期の作例として

北區山田町下谷上の寿福寺の木造聖観音菩薩立像がある。奈良時代以来盛行した古密教、山林仏教の場での造像が想定される。また、平安時代中期になっていくつかの作品がある。



写真163 寿福寺の聖観音菩薩立像

第一節 古代・中世の美術

まず彫刻では薬仙寺（兵庫区今出在家町）の本尊薬師如来坐像がある。一木造で漆箔を施した像で、像底銘によればもと阿弥陀如来であつたものを慶長四年（一五九九）に薬師如来に直したと言う。全体に彫りは甘く、優美な表情であるが、奥行きや量感はやや豊かで平安時代前期様式の名残をとどめている。十世紀後半から十一世紀初頭頃の制作と考えられる。薬仙寺はもと天台宗であつた。なお珍しい仏画としてこの薬仙寺には朝鮮王朝時代の制作と考えられる絹本着色施餓鬼図（干蘭盆経變）が伝来している。これには明の万曆十七年（一五八九）の紀年銘があり、また施主や画家名も記されている。しかし薬仙寺への伝来経路は分からない。

垂水区名谷町の転法輪寺には平安時代前期の一木造像を思わせる阿弥陀如来坐像が伝わっている。寄木造で、面部には



写真164 薬仙寺の薬師如来坐像



写真165 薬仙寺の施餓鬼図

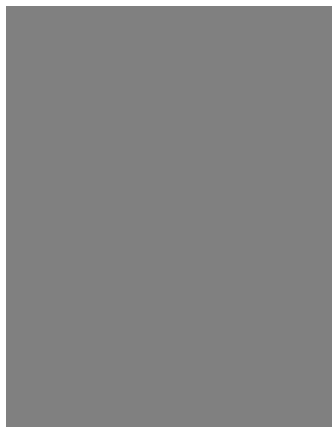


写真166 転法輪寺の阿弥陀如来坐像

重厚な量感があり、体軀はやや猫背でしかも厚みがあり、衣文えもんの彫りだしもシャープで、翻波式はんぱしき衣文が見出される。このように平安前期の密教像の面影を偲おもはせるが、全体にはやや穏やかさと丸みを帯びた表現から十一世紀頃の制作と考えられる。

この転法輪寺には平安後期から近世にいたる数多くの仏像が集められている。おそらく周辺の廃寺からの客仏や多くの塔頭たっちゅうが廃絶した時に集められたものである。中でも本尊阿弥陀如来坐像とほぼ同じ頃の四天王像四体が注目される。各々檜の一木造の素木像で、かなり風化しており、両手足などには補修のあとが多い。そのためやや姿勢やバランスに不自然さがあるものの、四体揃った一メートルほどの立像の四天王像としてこの地方の古作に属する。このほか、いかにも地方作と思われる素朴な造りの像が数体ある。天部形立像・十一面観音・仏立像の三体はいずれも像高一七〇センチメートルの等身大の一木割わりはぎ剝造で、漆箔こそ施されていないが、構造・形状・作風ともに平安時代後期の典型的な仏像である。

このほか転法輪寺には近世の比較的小さい仏像が数多く伝わっている。不動明王二体や阿弥陀如来像・帝釈天像・十一面観音像・弁財天像・二天像など。また絵画では絹本着色不動明王二童子図がある。図像は京都青蓮院しょうれんの不動明王二童子図に近似する。縦九〇・八センチメートル、横三七・五センチメートルの小幅で、絹目は荒く、描かれた彩色文様などからも室町時代



写真167 転法輪寺の絹本着色不動明王二童子図

と考えてよい。本図はもと須磨寺から移入されたと伝えられる。ほかに紙本着色の大幅の涅槃図がある。

須磨区の妙法寺には木造

毘沙門天立像や聖観音立像など平安時代後期の注目すべき仏像がある。ことに毘沙門天像は樟の一材からなる一木造で、二邪鬼を踏み、宝塔と三叉戟をとる。ずんぐりした体躯で、重量感があり、十一世紀末〜十二世紀初めの作と考えられる。一方聖観音は檜の一木造で平安末の簡素な姿で、装飾性を排した地方的な作風が色濃い仏像である。

なによりこの妙法寺で着目すべきは紺紙金字一切経の残欠である。妙法寺には数十巻伝わっているが、このうち仏名経第二には神護景雲二年（七六八）五月十三日の奥書を有するが、さらに巻末に「覚浄之」の朱書落款があり、書風や見返絵などから平安末鎌倉の頃の紺紙金泥経と見られ、いわゆる聖武天皇の菩提のために発願された称徳天皇勅願経をそのまま書写したものではないかと推定される。また麻紙墨書一切経要集経一巻があり、その書風は奈良時代のものに近似している。このように妙法寺に伝わる一切経残欠は様々な書風や形態



写真168 妙法寺の毘沙門天立像

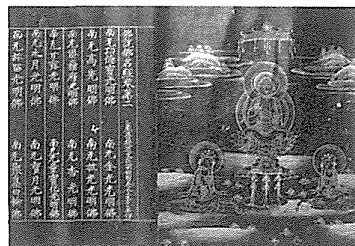
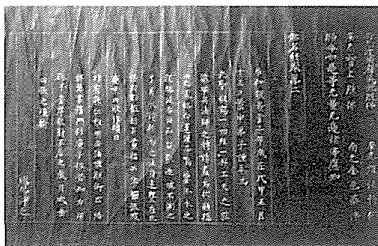


写真169 妙法寺の仏名経第二の見返絵と奥書

があり、もとより一つの一切経からの残存した端本ではなく、各種の写経がここに集積された結果であろう。このほか妙法寺には中国宋代の福州で版刻された東禪寺版経が三帖伝来している。応永二十一年（一四一四）に顕密坊へ寄進されたもので、ここにも大陸との深い交流の跡が窺われる。

北区山田町福地の無動寺にも転法輪寺と同様に数多くの仏像が伝えられている。その中には先述した地方的な作風を示す木彫群が多い。無動寺は六甲山の北部に当たり、有馬から三木へと通ずる山陽道の裏街道が通っていた山間の静かな所で、港神戸とは全く異なる文化圏、すなわち兵庫県の山間部に連なる場所にある。

本尊大日如来坐像をはじめ、釈迦如来坐像、さらに十一面観音立像や不動明王坐像など平安時代後期の一木彫成像が伝えられている。このうち大日と釈迦は阿弥陀如来坐像の三尊一対をなしているが、杉材の寄木造になる阿弥陀は後代の補作であり、当初から三尊一対であったかは定かで



写真170 無動寺の大日如来坐像



写真171 無動寺の釈迦如来坐像

ない。大日如来像は像高二七〇センチメートルの大きな像で、智拳印をとる坐像で、檜材で頭部部を一本で造り、両肩・膝前を別材で合わせる。体部に対して頭部がやや大きく、大きい像の割には量感のない柔和な表現である。平安時代後期の制作であろう。彩色は剥落し、宝冠・胸飾りなどは後補である。

釈迦如来像は同じ檜の一木造である。この像も彩色は剥落し、両手先や膝前は後補である。一方木像漆箔の阿弥陀如来像は、像高は釈迦像とほぼ同じで一〇九センチメートルである。虫喰いが著しく、印象を損ねているが、制作は鎌倉時代末期から室町時代にかけてであろう。当初の大日如来像に釈迦像が加わり、そのうちに阿弥陀像を交えて三尊としたのであろう。

むしろ注目されるのは十一面観音立像である。像高一四八センチメートルの檜の一木像で内刳^{うちく}がなく、天衣や衣紋には渦巻文が見られ、面部の表現はなかなか鋭く、またその彫りもシャープで平安時代前期の特徴を残している。ただし外側の天衣や両手先、さらに頭上の十一面などは後補であり、彩色も剥落している。



写真173 無動寺の十一面観音立像



写真172 無動寺の阿弥陀如来坐像

不動明王は他像と異なり都ぶりの作風を示す。これらの諸像は、当初から無動寺に伝来したのもあろうが、この地域の諸寺が廃寺になった時に客仏として集められたのではないかと考えられる。この三田から丹波や但馬へ通じる北六甲の一带は街道筋として早くから都の文化の伝播した場所であったのであろう。

この無動寺と同様な関係で平安時代の仏像が集まっているのが、北区長尾町宅原の多聞寺である。多聞寺そのものは明治二十八年（一八九五）に創建されたが、この地にかつて存在し焼失した長光寺、明治の廃仏毀釈によって廃寺となった神福寺などの寺院の仏像をここに収容したと言う。毘沙門天立像と吉祥天立像はもと長光寺に、またそのほかの諸仏も様々な所より移入されたものである。

中でもこの毘沙門天立像が優れており、吉祥天と並んで平安時代の仏像として注目される。毘沙門天像は像高一七三・八センチメートルの大きな像の一木造である。彩色は剥落し、また風化の跡も著しい。下に踏む邪鬼や戟や左手先などは後補であるが、体躯の量感は十分で、また彫りも力強い。平安時代後期に遡るものと考えられる。一方吉祥天像は像高九八・七センチメートルの一木造で彩色はなく、全体にずんぐりとして細かな彫り



写真174 多聞寺(北区)の
毘沙門天立像



写真175 多聞寺(北区)
の吉祥天立像

第一節 古代・中世の美術



写真176 多聞寺(垂水区)の阿弥陀如来坐像



写真177 多聞寺(垂水区)の日光(右)・月光(左)菩薩立像

は少ないが、衣文の一部に翻波式衣文が認められ、平安時代後期に属する制作としてよい。

このほか多聞寺には南北朝期頃と考えられる地藏菩薩像をはじめ、善尼子童子像・十二神将像など後代の仏像が数多く収められている。地藏菩薩像は元は岡村(現宅原の旧村の一つ)の尼寺から、また善尼子童子像は仁和寺から岡村に移って来たものが再びここに収容されたと言う。多聞寺にはこのほか近世に鉄眼禅師によって開版された黄檗版の大般若経がある。

一方神戸市の六甲山より南の海浜地域には長年の歴史の中で、戦乱や移動によって失われて、このようなまとまった文化財の集積は少ない。しかし、明石に隣接する垂水の丘陵地帯には天台真言の古刹が多く、いくつかの古文化財がその山間に点在する。織内撰津と山陽播磨とを結ぶ要路に当たっており、古来都の文化



写真178 十の能福寺の十一面観音立像

平安末期から鎌倉時代の中央作で、特に阿弥陀像が説法印を結ぶ点が注目される。また、西区伊川谷町前開にある太山寺も奈良時代の創建とされる天台宗の古刹ながら、現在は平安時代に遡るものは檜の一本造になる不動明王のみで、そのほかはおそらく歴史の激動の中で失われていったであろう。

神戸の市街区域にある長田・兵庫・中央・灘区などには、中央区葺合町の徳光院の持国天・増長天立像や灘区桜ヶ丘町の善光寺の不動明王二童子像、兵庫区北逆瀬川町の能福寺の十一面観音立像、中央区中島通の歓喜寺の十一面観音立像など、平安時代後期の仏像が存在する。しかし、それらはもとより神戸の地にあつたものではなく、近年に他所より流入した仏像が多い。この地区はまさに明治神戸の開港以来近代化が進み、また第二次大戦の空襲そのほか多くの激動の中に美術品がその姿を消したのであろう。

平安時代 平安時代の絵画でわずかに残るものとして、例えば太山寺の法華経見返絵や温泉寺（北区）の**黒漆厨子の板絵**などがある。いずれも平安時代末から鎌倉時代にかけての作品である。太山寺

の法華経は**結縁一品経**と呼ばれるもので、法華経二十八品の各一卷と開結の無量義経三巻・観普賢経の一巻とあわせて四巻を加えて、三十二巻とした。それぞれ一卷ずつを書写して奉納し、その功德の結縁を結ぶの

が強く影響したと考えられる。ここも歴史や文学にはしばしば登場するわりには残された美術工芸は必ずしも多くはないが、垂水区多聞台の多聞寺の阿弥陀如来坐像と日光・月光菩薩立像がある。多聞寺の諸像は



写真179 太山寺の法華經見返絵（陀羅尼品第二十六）

である。伝承によれば平氏一族の結縁寄進によるとされている。しかし三十二巻ある中で巻頭に見返絵を持つものはわずかに二巻のみである。当初は当然全てに見返絵が描かれていたものと推定される。見返絵をもつのは陀羅尼品第二十六と妙莊嚴王本事品第二十七である。前者には普賢十羅刹が、後者には五台山文殊が描かれている。

いずれも平安時代末期から鎌倉時代にかけて貴族たちの間で信仰され、また多くの絵画・彫刻の作例が流行したが、この太山寺のものを見ると、やや表現が形式的な傾向がある。見返絵を持つ経巻は平安時代後期にきわめて多く制作され流行したが、その中では流行全盛期をすぎた時期の制作と考えられる。同じ平氏一族の寄進した見返絵をもつ法華経としては、厳島神社（広島県廿日市）に伝わる有名な平家納経がある。

一方有馬の温泉寺に伝わる黒漆厨子は法華経を収めた小型の厨子で、その扉の内側や中の奥板に板絵が見出される。扉には文殊と普賢とが象と獅子に乗る姿に對置し、さらに四天王が二体ずつ配される。他方奥板には十羅刹女が描かれている。か

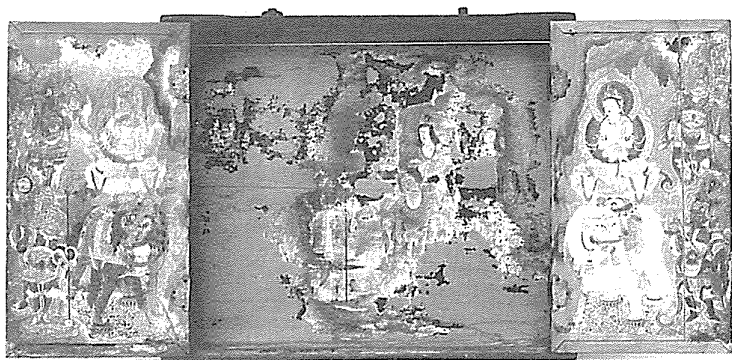


写真180 温泉寺の黒漆厨子

なり剥落が激しく全体の構図や図柄は確定できないが、法華経陀羅尼品に説かれた法華経を守護し、子供を守る十羅刹女である。普賢菩薩が向かって右扉にあり、普賢十羅刹女を構成している。

平安時代後期に貴族、とりわけ多くの女性たちの間で、子供と女人を守護する菩薩として、普賢十羅刹女が信仰され、多くの作品が作られた。しかも通例の絵仏師ではなく、貴族の女人たち自らがその制作に当たったことが知られている。そしてこの厨子は描かれた主題からみても、法華経を納入した厨子であることは間違いない。戦乱の続いた源平の時代、また多くの古戦場をひかえたこの有馬の地に繊細で優美なこじんまりした厨子の伝来することは興味深い。しかし温泉寺に納入されたのは、裏面の銘によると、室町時代の応永二十六年（一四一九）住持尊海によるものとされる。細かな描写で彩色も美しく、切金や切箔の技法が駆使されており、平安時代末期の様式を伝えている。

古代から中世にかけての神戸の美術を考える上で忘れてならないのは平清盛が拠点とし遷都を企てた福原である。平家一門はここを別荘地とし、大輪田泊を修築して宋との貿易港とした。治

承四年（一一八〇）六月にはここに事実上遷都した。都はわずか半年ばかりでまた京都に戻り、福原は平家都落ちの折、寿永二年（一一八三）に焼き払われてしまった。そして栄華を極めた平家の人々の夢の跡は、今では全く窺う余地もない。おそらくここには日宋貿易で蓄えた財力を傾けて作られた、平安時代末期の優美で、しかも耽美的な絢爛たる美術工芸品があったに違いない。

2 鎌倉・室町時代の美術

鎌倉の美術

やがて時代は源平の争乱期を経て、鎌倉に本拠を置く源頼朝の率いる武家政権が誕生した。美術の分野でも中国宋より新たな傾向の美術が次第に強く影響を与え、鎌倉時代の写実的で、理知的な作風が成立した。しかも水墨画などの新しい絵画技法も輸入され、禪宗などのこれまでにない仏教の宗派が加わった。また民衆のレベルでは浄土教の一層の発展や南都や華嚴と言った旧仏教の復興など、鎌倉時代は仏教美術にとっても革新的な時代であった。

平安時代末から鎌倉時代にかけて、畿内は源平の合戦などによって相当の被害を受けた。多くの社寺が焼失し、また荒廃した。しかし南都東大寺の復興に見るように、それはまた新しい創造のきっかけでもあった。都が混乱する中、多くの仏師や絵師は地方に下って仕事についた。そして平清盛の日宋貿易によってもたらされた中国宋代の新しい様式の美術・建築がその大きな刺激となった。すなわち宋代の理知的で写実を旨とする絵画・彫刻の様式、また壮大な骨組みによる大仏様や、繊細でしかも静かな空間を作り出す禪宗様な

どの建築様式は、平安時代を通じて培われてきた奈良時代以来の唐風様式の日本化、すなわち和風化の方向を大きく変更するものであった。よって鎌倉時代は古代の終りとして、また中世的芸術への転換期として美術史の上では位置付けることができる。

例えば播磨の浄土寺は東大寺の播磨別所とされ、東大寺の荘園があった所である。奈良の東大寺は治承四年（一一八〇）の平重衡の南都焼き討ちの後、俊乗房重源が勧進となってその復興が進められた。「南無阿弥陀仏作善集」によれば、そこで重源は宋人陳和卿の協力を得て、再建に取り組んだが、大仏殿などの用材を周防や伊賀・播磨の東大寺の荘園から確保して運ばせた。その時重源は各地の東大寺の荘園に道場を建てた。播磨小野の浄土寺はその一つである。神戸大学本「浄土寺縁起」によれば、建久五年（一一九四）より浄土寺浄土堂を建て、そこに宋風の強い影響が看取される阿弥陀三尊を造立した。建久八年、南都笠置の貞慶を導師として落慶供養を行った。この時阿弥陀三尊像の制作にあたったのが、鎌倉彫刻を代表する仏師「安阿弥陀仏」快慶であった。

このように播磨・摂津の地は、中央の混乱期にあつては、比較的近距离にあるため交流が多く、ことに荘園関係を通じて南都との密接な関わりがあった。神戸市域は山陽道の交通の要衝にあつて多くの文物や美術の往来があつたはずである。しかし現在ではほかの播磨の地域に比べ、意外にこの時期の美術作品は少ない。

太山寺の美術

宋からの新しい影響を強く受けた絵画作品として、太山寺のいくつかの作例がある。太山寺は西区伊川谷町前開にあり、寺伝では奈良時代の初め靈龜二年（七一六）藤原鎌足の子定恵の創建と伝え、天台宗に属する。弘安八年（一二八五）火災にあつているため、現在太山寺に伝わる仏像・絵画



写真181 太山寺の十一面観音像

は鎌倉時代以降のものが多く、なにより宋風を強く反映した作品が注目される。

絹本着色 十一面観音像や、絹本着色 釈迦三尊像・

十六羅漢図などはきわめて濃厚な宋風が顕著である。

中でも十一面観音像は独特の表現で見るものに強烈な

印象を与える。縦一五〇・九センチメートル、横一〇

三・二センチメートルのかなり大きな画面で三副の画

絹よりなる。岩の上に結跏趺坐した十一面観音は重苦

しい着衣を長く岩座に垂れさせ、右手は力なく与願印とし、左手は胸前に蓮華を挿した水瓶をとる。指の爪は鋭く伸び、また両肩から左右に延びる垂髪は異様に長く鋭角的である。顔は面長で、目は細いが、鋭く、肉身の色は黄色味を帯びた生々しい彩色で着衣の寒色の強い重厚な彩色とともに宋代仏画の様式に則っている。そして背後の頭光は輪郭線のない薄い外暈そとくまによってなされ、夢幻の虚空にいるような不思議な感覚はこれまでの仏画にはない、水墨画の技法に近づいた新しい様式である。

太山寺に伝わる十六羅漢図は鎌倉時代に入って新しく中国から伝えられた羅漢図の系譜に属する一例である。太山寺の羅漢図はしっかりした筆致と丁寧でめりはりのある彩色と背景にはやや水墨的な樹木や岩・水の描写とが特徴である。しかもこの太山寺本の源流は実は中国は浙江省の寧波ニンポの職業的な仏画師である金大受の十六羅漢にその源があることが判明した。現在東京国立博物館にある羅漢図十幅はその銘により南宋の

寧波の金大受の作品である。中国ではほとんど無名の職業的な画家と考えられるが、日本では室町時代の史料「君台観左右帳記」(『群書類従』)に記録されており、日本に多くの作品がもたらされていた。ことに寧波は日本からの

貿易船が着岸するところであった。平清盛の貿易船もこの寧波の港に入っている。その寧波で日本向けの仏画を制作していた職業的な画工集団としてはかには陸信忠らの陸派がある。金大受とはその様式はかなり傾向が異なり、陸信忠の十六羅漢図も日本には多くもたらされているものの、日本の鎌倉時代の羅漢図の手本図像とはなっていない。太山寺本に限らず多くの十六羅漢図の原本となったのがこの寧波の中でも金大受であった。

太山寺の釈迦三尊像は蓮台に坐す釈迦を中心に、向かって右に獅子に乗る文殊と左に象に乗る普賢を配して三尊としたものである。文殊は如意をまた普賢は蓮華を執る。しっかりとした作風はいかにも鎌倉時代の伝統的な仏画のスタイルを踏襲している。しかしそこにも新しい宋風の影響が看取される。釈



写真182 太山寺の十六羅漢図(第六尊者)



写真183 太山寺の釈迦三尊像

迦の着衣のやや襷の多い衣の重苦しさや、文殊・普賢の着衣の裾の煩雑な垂れ方、また三尊の面部のクールな表情などに理知的で寒色を主体とする宋代仏画への傾斜を読み取ることができる。

このほか太山寺には金剛經十六善神像があり、同じ傾向の仏画である。また楊柳觀音像がある。これは

高麗仏画の楊柳觀音の転写本と見られ、室町初期の作品であろう。大きな岩座に二重円の光背を背負い、やや斜めの姿勢で半跏に座り、肌が透けて見える独特の衣は高麗の楊柳觀音に特有の表現である。足元には善財童子が礼拝している。華嚴經入法界品に説かれた善財童子が補陀落山の觀音を訪ねる場面を表したところと解釈される。さらに宋風の普賢菩薩や高麗の紺紙金字經大方広華嚴經第四十二など多くの新来の宋風文物が蓄積されていた。

太山寺には以上のような新しい中国ないし朝鮮半島からの影響を受けた仏画のほか、天台密教の本尊としての仏画も数多く伝わっている。両界曼荼羅二幅と小幅の両界曼荼羅二幅、愛染曼荼羅、法華曼荼羅、不動二童子像、不動四童子像、不動明王像など、鎌倉時代から室町時代にかけての作品である。

中でも両界曼荼羅（大幅本）は鎌倉時代後期の本格的な両界曼荼羅としてしつかりした作例である。縦二〇三・六センチメートル、横一八四・八センチメートルの通例の大きさを持ち、胎蔵は天台系で、中台八葉院を中心に、また金剛界は九会の曼荼羅である。一方小幅本は金剛界が通例の空海が請来したとされる金剛

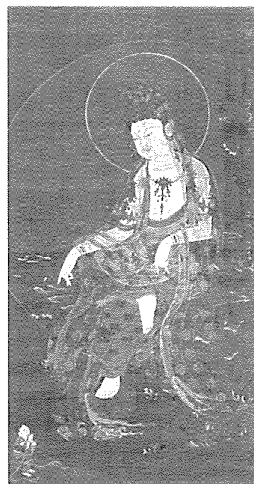


写真184 太山寺の楊柳觀音像

界曼荼羅と異なり、成身会じょうしんかいのみの金剛界八十一尊からなる構図で、これは真言系ではなく、天台系の金剛界曼荼羅とされている。また胎藏の方も通例の胎藏曼荼羅とは若干の相違があつて、この両界曼荼羅は天台系の曼荼羅で、ことに円仁や円珍将来の図像に通ずるものと考えられる。

法華曼荼羅や愛染曼荼羅はいわゆる別尊曼荼羅で、法華経法や愛染法の修法に用いられる本尊である。法華曼荼羅は中心に釈迦・多宝の二仏が並座する多宝塔を置くもので、法華経の見宝塔品による多宝塔の出現を表している。増益・息災を祈禱する際の修法である。

また愛染曼荼羅は敬愛・調伏を祈禱する際の修法の本尊で、中心である愛染明王は愛欲・貪染を治め、煩惱即菩提を象徴した尊で、一面六臂の激しい忿怒ふんぬの姿である。四明王や十二天を周圍に配した曼荼羅である。太山寺にはこのほか多くの仏画や祖師像などがある。

鎌倉時代末から南北朝期のものとして、不動明王像や羅漢図一幅、涅槃図、阿弥陀三尊来迎図などがある。さらに下るものとして南北朝期から室町時代にかけての諸尊集會図しよしうかいずや跋摩三藏像ばつまさんぞう、仏涅槃図、また室町時代の山王諸神図や吉野曼荼羅、役行者像えんのぎやうじやとして江戸時

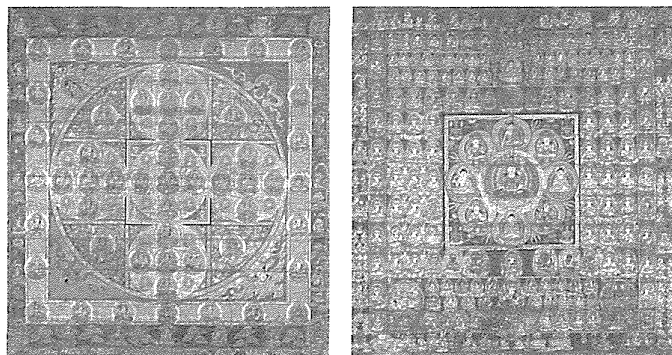


写真185 太山寺の両界曼荼羅 金剛界（左）胎藏（右）

代と思われる十二天像や水墨の羅漢図などが伝わっている。なおこの水墨羅漢像は「三条大光明寺」の銘があり、明らかに他所から移入されたものである。また伝周文作の六曲一双の楼閣山水図屏風や金銅五鈎鈴や宝珠鈴、さらに龍泉窯の青磁華瓶、皿など様々な美術品が集積しており、この太山寺の隆盛していた往時を窺わせる。

さて、この太山寺に伝わる仏像としては鎌倉時代初期とされる阿弥陀如来坐像や樟の一本の四天王立像四体のほか、鎌倉時代の鎮守社神像（伝三所権現像）三体に、狛犬一对、そして南北朝期頃の聖徳太子孝養像、室町時代の普賢騎象像や釈迦涅槃像などがある。また享保十五年（一七三〇）の銘をもつ三重塔の四天王や天台大師像（明和四年（一七六七）銘）や伝教大師像、そして当寺の開基とされる定恵の坐像などの江戸時代の木像がある。經典としては平安末から鎌倉初頭の一切経、南北朝期の大般若経などがある。

太山寺周辺地域の古代・中世美術としては、如意寺阿弥陀堂の阿弥陀如来坐像、同寺仁王門の塑



写真186 太山寺の四天王像 広目天（左）持国天（右）

像仁王像、性海寺の絹本着色如意輪観音画像などがある。

福祥寺（須磨 源平の合戦の地に程近い福祥寺）の美術 （須磨寺、以下須磨寺と表記）には

本堂の本尊（秘仏）として平安時代末の聖観音坐像がある。未開敷蓮華をとり、高い髻もとどりを天冠台の上に結ぶ。寄木造で、そのおおらかな表現は平安時代末のものと思われる。

また高さ四五・九センチメートルの檀像風の十一面観音立像がある。赤味を帯びた檜と思われる材による寄木造で、素木のまま使い、いわゆる檀色像である。玉眼を入れ、右手は垂下し、左手は水瓶を取って、手足を浮かせてやや腰を屈めて踏割蓮台に立つ。手先などには後補の部分があるが、損傷や欠損は少ない。しかし平安時代初期の檀像とは大きく趣を異にする。すなわちやや煩雑で艶めかしい波型の衣文えもんの処理や鋭い彫法による目鼻と衣文の表現など、むしろ鎌倉以降の宋風の彫刻に通ずるものである。本像がやや繊細に過ぎる面のあるところより、南北朝期頃の作品と見なされている。



写真187 須磨寺の十一面観音立像



写真188 須磨寺の不動明王立像

さらに同じ南北朝期頃の作品で南都仏師康俊作の不動明王立像がある。九〇センチメートルばかりの小像であるが、足柄に「法印康俊作応安二年」云々の銘がある。南都の慶派の末裔である康俊の作品である。

『当山歴代』によればこの不動明王に先立つ貞治四年（一三六五）に本堂の立柱が行われ、応安元年（一三六八）には本堂内の宮殿及び仏壇が造られた。同年式部法橋長賢が願主となつて不動明王が造立され、翌二年に出来上がっている。したがって像の銘はこの『当山歴代』の記述に合致する。また願主長賢は須磨寺に伝わる鰐口をも寄進しており、須磨寺と深い関係のあった人物である。鰐口は直径四八センチメートルで、その銘には「福祥寺金口願主式部法橋長賢 貞治五年丙午三月十二日」とある。こうした事実を見ると南北朝は須磨寺にとっては争乱の後の再建の槌音の響く中興の時代であつたように考えられる。

一方この不動明王を制作した康俊を初めとする南都の慶派も、畿内の争乱を避けて地方での造像活動に手広く活躍していたことが分かる。康俊の作品は奈良を中心に山陽道から九州にも広がっている。檜材の寄木造で、肉身の色は黒化して、玉眼を入れ、南北朝期らしい金泥の厚い盛り上げ彩色によつて唐草や団花文を施す。プロポーションは頭体ともずんぐりしてかなり弛緩し、衣文の処理は鈍くなっている。不動明王のほかに、やや下つた南北朝期の木彫として毘沙門天像がある。同じく檜の寄木、玉眼を入れ、後補の部分が多く、また下半身の衣の処理は荒々しい。不動明王よりは若干下がった時期の制作であろう。

須磨寺にはさらに時代の下がったものとして絹本着色普賢十羅刹女図が伝わっている。普賢十羅刹女は法華經に説かれた説話をもとにしており、女人の信仰を守り、女人往生を助ける普賢菩薩と子供を守護する十羅刹女とが合わさつて一つの構図にまとめたもので、ともに女人の救済に白雲に乗つて来迎する。平安

時代以来多くの女性たちの信仰を集め、また女性たちの手によって支えられてきた。図柄は六牙の白象に乗る普賢菩薩を中心に、その両側に十二単じふにひとへを着た十羅刹女じふにせつにょがいる。いわゆる和装の十羅刹女である。また脇侍として二菩薩があり、毘沙門天と持国天も後ろに守護している。この須磨寺の構図は現在奈良国立博物館にある鎌倉時代の普賢十羅刹女図と全く一致する。このほか十羅刹女が唐装の作例もあり、平安時代末から鎌倉時代にかけてのいくつかのバリエーションが見出される。本図もその一例で、やや形式化が著しく、いかにも

も写し崩れが看取されるものの、保存状態は良好で色鮮やかな当初の色彩をとどめている。源平の合戦の背後には多くの女性たちの嘆きと悲しみの歴史があったことと思われ、この普賢十羅刹女図の伝来については不明であるが、その故地に女人往生のための仏画が伝わっているのも因縁を感じさせる。

有馬の美術

北区有馬町の善福寺には聖徳太子の南無仏太子像がある。像高六八・五センチメートル

の合掌する寄木造玉眼嵌人像である。胎内に仏師湛幸の墨書銘がある。同じ湛幸は元応二年（一三二〇）、京都仏光寺の太子像の作者でもある。また、温泉寺には、



写真190 温泉寺の波夷羅大將像



写真189 善福寺の南無仏太子像

平安時代に遡る木造毘沙門天立像があり、やや時代が下がるが、室町時代の木造波夷羅大將立像がある。像高一〇二・五センチメートルのやや小振りの像で、薬師如来の眷属としての十二神将の一体であろう。

さて六甲山を越えた有馬の地は古くより温泉地として知られた所であった。天平年間（七二

九〜四九）行基が再興したと伝えられる。中世には様々な貴顕の来訪があり、またその温泉の効能についての評判が様々な説話となつて広まった。近世では豊臣秀吉の来訪など、長い歴史の中にあつた有馬にしては意外に古い美術が伝わっていない。

先に述べた平安時代末の温泉寺の黒漆厨子のほかは、湯泉神社には鎌倉時代末期の熊野曼荼羅図があり、また鎌倉時代後期の温泉寺縁起が寺外（京都国立博物館蔵）に流出して伝存している。

熊野曼荼羅はいわゆる本地垂迹説に基づく曼荼羅で、高野山西南院本とともに熊野本迹曼荼羅の数少ない一本である。熊野の三所権現に若宮を加えた四所に対応する本地仏である阿弥陀・薬師・千手観音・十一面観音を最上段に並べ、その下に四体の男女俗体の神を描いてそれぞれに対応させている。次段には五所権現に应じた聖観音・如意輪・地藏・龍樹を置く。第三段目には釈迦・十王子を中心に愛染・大威徳を描き、勧請十五所・阿須賀・神倉などに対応する。密教曼荼羅のように各尊を配列した上半部とは異なり、下半部



写真191 湯泉神社の熊野曼荼羅図

は自然景の中に摂社・末社や眷属神を配置している。弥勒を中心に文殊普賢・毘沙門天・不動などがある。むしろこのような自然景の中に各諸尊を配置するのが熊野曼荼羅の大きな特色で、この湯泉神社本も鎌倉時代後期の制作と考えられ、その傾向を保っている。

温泉寺縁起は掛幅で、当初温泉寺において参詣の湯治の人々に絵解されたものといわれる。行基が山中の病人（葉師如來）を自ら介抱し温泉寺の草創となる説話、山の女体権現が出現する奇跡の説話や、清荒神清澄寺の僧慈心坊尊恵の閻魔王宮を巡って蘇生する説話などが描かれている。これらの説話は古く『古今著聞集』などの説話集にも載っており、広く知られた説話であった。構図は一幅の大きな画面を素檜霞すやしかすみによって横長に仕切って、そこに細かく各場面が配される。描写はやや硬く鎌倉時代末期の制作と考えられる。その後室町時代末期にこの寺が退転した時に寺外に流れ、やがて江戸時代初めに三井寺勸学院（大津市）に入り、その後宇治平等院最勝院（宇治市）に伝わった。

神戸の地理的な環境は古文化財の保存と伝承にとって必ずしも良好ではなく、このような数奇な運命をたどる文化財が多いので注意を要する。

そのほかに、鎌倉時代の仏像として、灘区桜ヶ丘町の善光寺の不動明王二童子像や、長田区東尻池町の宝満寺の大日如来坐像などがある。善光寺の不動二童子像は不動が平安時代末、二童子像が鎌倉時代の補作と



写真192 宝満寺の大日如来坐像

されるが、明治の初めに比叡山北谷の宝乗院から伝えられた仏像という。また宝満寺の大日如来坐像は檜の寄木造で、漆箔玉眼である。さらに胎内の銘によって永仁四年（一二九六）大勸進咩（うんじん）日（ひ）らによって後宇多天皇のために寄進されたものと判明する。また胎内には金剛界の大日如来像を胎内仏として納入し、さらに舍利塔や般若理趣經の写経などを込めている。また、兵庫区北逆瀬川町の能福寺には太山寺から伝来した阿弥陀三尊像が安置されている。院派系の作風を示し、こちらも鎌倉時代に遡る作例である。

鎌倉末期
以後

南北朝時代から室町時代にかけて戦乱と政治的な混乱が続いたが、この神戸一帯は播磨に勢力を持つ赤松氏と畿内勢力との激しい争いの渦中にあった。そんな激動の中を守り通してきたものも多い。中でも兵庫区松原通の真光寺に伝わる『遊行縁起』は貴重である。時宗の開祖一遍は正応二年（一二八九）八月二十三日兵庫の観音堂で生涯を閉じた。その時荼毘に付した所に

真光寺がある。開祖一遍と弟子の他阿上人の伝記を表した『遊行上人縁起絵』は十四世紀初め宗俊が編纂したもので、全十巻の中、前四巻が一遍の、後六巻が二祖他阿上人の伝記である。一遍・他阿へと続く時宗の法系を強調している。原本はすでになく、その転写の系譜にも三種の系統が認められている。この真光寺本『遊行縁起』はその一つの代表的な作例である。聖戒の編纂した有名な『一遍聖絵』（歎喜光寺本）のような写実的で厳密な場面と伝記との構成の方法ではなく、この真光寺本は明るく、簡略な場面構成をとり、近世



写真193 真光寺の『遊行縁起』

絵画への傾斜さえ感じられる。一つ一つの場面では転写本特有のやや形式的な描写もあり、総じて稚拙ながらも、こだわりのない様式である。布教活動に数多く必要として、たくさん転写して流布したのであろう。奥書によれば、元亨三年（一二三三）三井寺の僧行頭が詞書を書いたことがわかる。

また、この時期に新たに広まった禅宗美術にも優れた作品がある。須磨区禅昌寺町の禅昌寺に伝わる月庵宗光禅師頂相には永徳四年（一二三四）の自賛があり、この時期を代表する作品である。一方、

平安時代以来の法灯を伝える顯密寺院も変わらず数多くの仏画などを制作し続け、石峯寺の絹本着色釈迦三尊画像、切利天上寺の絹本着色弥勒菩薩曼荼羅、丹生神社の紙本着色丹生山明要寺参詣曼荼羅図など注目すべき作品が残っている。

また、工芸として須磨寺に延文庚子（延文五年（一二三六〇））銘の銅製鍍金釣燈籠や貞治五年（一二三六）銘の鰐口、長祿四年（一二四六〇）銘の旧原野村安養寺の銅鐘が伝来している。石峯寺に正和四年（一二三二）の鰐口、妙法寺に延文二年（一二三七）の釣燈籠、長田神社の康正三年（一二四五）修理銘棟札の黒漆金銅装神輿などが残存している。

仏像では、北区の無動寺の阿弥陀如来坐像や多聞寺の地藏菩薩立像のほか、須磨区の妙法寺の吉祥天・善貳童子像などがある。無動寺の阿弥陀如来像はやや宋風の認められる像で、杉の寄木造で、素地仕上げと



写真194 石峯寺の鰐口

なっている。妙法寺の二像も杉材の寄木造である。通例仏像の材として最も適し、しかも不足のない檜を用いないで、あえて彫刻しにくい、廉価な杉を使用するところに材質の低下や技法・作風の地方化はいなめない。

石造美術

ただこの時代には石造遺物に注目されるものがある。御影石で有名な花崗岩の産出する六甲山系を後背にもつ神戸には、鎌倉時代頃より次第に優秀な石工技術の蓄積があり、石材・技術の両面から条件が整っていった。硬度が強く彫刻には困難があるものの、逆に耐久度に優れ、末法の意識とともに、作善としてまた造塔供養として石塔や石仏が造像されるようになった。しかも本格的な堂塔内に安置される仏像とは異なり、石仏や石塔は一般の庶民や多くの人の結縁を得て造作されたことがわかる。ことに御影石屋の石工による本格的な活動は、奈良東大寺の復興に携わった宋の石工伊行末を始祖とする伊派からの石造技術の交流の結果、技術的な進歩によるところが大きいとされる。

石造遺物には石塔と石仏があり、石塔にも十三重塔などの層塔と五輪塔や宝篋印塔ほうきょういんとうがあり、石仏にもいわゆる石仏と磨崖仏がある。さらに石造物には板碑いたひや卒塔婆・名号碑のほか、石燈籠などがある。美術工芸的なものから、建造物にいたるまで石の堅牢さが供養者の期待を担ったのであろう。法華経などに基づいた造塔供養や動かざる記念物として石造品には不動の信仰の証として多くの人が結縁し、また鎌倉時代に南都で律宗を興した西大寺叡尊えいそんの弘安八年（一二八五）兵庫への布教による影響も指摘されている。これらの作例のうち、最も早い紀年銘のあるものは、兵庫区切戸町にある平清盛の追善供養のために建てられたという伝承をもつ清盛塚十三重塔である。大正十二年（一九二三）に市電路線敷設のために現在の位置に移された

が、相輪は後補で、高さが八・七メートルあり、同年に建てられた京都宇治川の浮島塔や般若寺の塔と並ぶ十三重の層塔である。年記は基礎東面に「弘安九／二月 日」と陰刻されており、このほか平清盛に関することは一切碑文にない。

やがて鎌倉時代に流行した層塔は減少し、南北朝時代以降には五輪塔や宝篋印塔が盛んになった。五輪塔では北区山田町西下の最法寺塔の基壇に文永十二年（一二七五）の紀年銘があつて最も古いとされる。本堂裏の薬師堂跡とされる場所にある五輪塔で、頂上の空輪は欠失し、現在の高さは八七センチメートルである。しかし現在では地輪や基礎に梵字が確認されるものの、紀年銘は読み取れない。むしろ銘記はないが、清盛塚の近く兵庫区松原通にある、一遍上人示寂の地とされる真光寺の一遍上人廟の一遍上人五輪塔は高さ一九五メートルの堂々とした塔で、火輪・水輪の重量感からも一遍没後に程近い頃の建立と推定される。

さらに宝篋印塔では垂水区西垂水にある遊女塚宝篋印塔が、建武四年（一一三三）の紀年銘を持つ。

現在は西垂水共同墓地内にあって、もとより当初の位置ではない。高さ三・四メートルの大きな宝篋印塔で、相輪部分は後補ではないかと思われる。基礎の四面に銘文が陰刻され、「建武四年」は明確に読み取れるが、勧進僧「土忠禅師」と石工の名があるとされるものの、現在では判然としない。またこ



写真195 遊女塚宝篋印塔（垂水区）

の宝篋印塔を遊女塚とした由来は銘文からは窺われず、全く伝説の域を出ない。

宝篋印塔とは、もと中国五代の呉越王銭弘淑が顕徳二年（九五五）に、インドのアショーク王の行った八万四千塔供養に倣って八万四千の金銅塔を造顕し、しかもわが国にもそのうちの五百基が伝来したとされ、それがきっかけで日本でも平安時代末には大いに造塔供養が行われた。方形の塔で、屋根の四隅が立ち上がる独特の形である。このほか垂水区福田にある暦応四年（一二四一）銘の宝篋印塔や同じ垂水区名谷町にある観応二年（一二三一）と推定される辛卯銘の宝篋印塔があり、この二基はいずれも土忠禪師勧進によるものとされる。いずれも小型の塔である。この南北朝初期にこの一帯で勧進僧の活躍によって一般庶民を結集した造塔活動が盛んに行われたことが知られる。

堅牢で見た目もきれいな良質の花崗岩の産出する六甲山系をかかえ、また鎌倉時代からの石工の技法の進歩にもかかわらず、記念碑的な造塔や石碑はあっても、意外に少ないのが石仏・磨崖仏である。在銘の石仏・磨崖仏としては、兵庫区石井町の靈山寺境内に安置されている文安三年（一四四六）銘のある地藏石仏や西区押部谷町木津の文正二年（二四六七）銘のある木津磨崖仏など、ようやく室町時代になってからの作例がわずかに見出される。靈山寺



写真196 木津磨崖仏（西区）

の地蔵石仏は総高五六センチメートルの丸彫像で、御影石ではなく、やや黄色味を帯びた竜山石であり、またその銘文も必ずしも判然としない。木津の磨崖仏は高さ約八メートルの断崖の上端部に幅約二三〇センチメートル、縦約六〇センチメートルの彫り込んだ岩に定印の阿弥陀坐像を中心に、六地蔵を配したもので、左端に「石大工^{民前心}□□」「文正三天」の銘がある。

また、北区有馬町の温泉寺境内と参道不動坂には天文^{てんぶん}二十二年（一五五三）の銘を持つ磨崖仏が二基ある。ともに自然石に、線刻に近い半浮彫の阿弥陀や不動・地蔵を表すほか、六字名号を陰刻する。両者の銘は、「百万遍四十八度供養為自他也」や「施主為善心禅門逆修也」「施主阿弥陀堂麟明／万部経結願日作之」などの文言があり、天文年間（一五三三～五五）にはかなり一般庶民の造塔供養への参加と有馬への往来で賑わっていたことが知られる。

このほか紀年銘のないものとして、かつて灘区桜ヶ丘町の大日松にあった石仏がある。総高一三六センチメートルの花崗岩の自然石に、像高四五センチメートルの定印の阿弥陀坐像を、かなり荒削りに半浮彫したものである。阪神・淡路大震災で周辺が大きな被害をうけた影響で、高徳町の北向地蔵の脇に移動している。以上のように、近世の地蔵尊などを除けば意外に石仏・磨崖仏は少ないといつてよい。むしろ御影石の石工の技術は石塔などの記念碑的な建造物の造作に向かったのであろう。室町時代から近世にかけては宝篋印

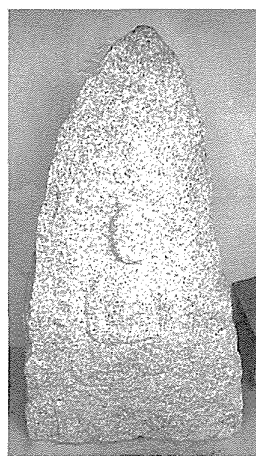


写真197 旧大日松の石仏
(灘区)

塔・五輪塔や板碑・名号碑などが多数造立され、特に北区に極めて多くその作例が現存している。神戸の海岸地区よりも、六甲山を越えた北区や西区の山間地域に多くの石造遺物が現存していることは特記しておくべきであろう。

3 阪神・淡路大震災と文化財

震災と文 平成七年（一九九五）の阪神・淡路大震災に際して、神戸市内の数多くの諸社寺も被災し、所蔵される文化財が損傷を受けるなどの被害が報告された。

震災で特に大きな被害を受けた垂水区や長田区の寺院や遺跡を中心に回り、震災による被害及びその復興状況の確認調査を行った。調査を実施したのは、宝満寺（長田区）、多聞寺（垂水区）、能福寺（兵庫区）及び、石造物の遊女塚、西名宝篋印塔（以上垂水区）、須磨寺（須磨区）の十三重塔である。

兵庫区の能福寺では、毘盧舍那殿に安置される十一面観音菩薩立像（りゅうぞう）がガラスケース内で傾いていたものの、大きな被害はなかったようである。

長田区の宝満寺では、国の重要文化財に指定された大日如来坐像が傾倒し、宝髻部（ほうけい）が落下し、矧（は）ぎ目が緩むなどの被害を受けた。本像は、震災の翌年に美術院により修理が行われている。なお、この修理状況については、神戸山手女子短期大学発行の修理報告書に詳しい（神戸山手女子短期大学編『金剛山宝満寺大日如来像修理報告書 阪神・淡路大震災に伴う緊急修理』）。

神戸市内の石造物は、倒壊や相輪部が脱落するなど、甚大な被害を受けたものも少なくない。しかし、現在ではそのほとんどが修復され、震災前の姿に戻っている。

震災によって神戸の街は大きな被害を受け、文化財も例外ではなかった。しかしそれぞれの文化財が、それらを守ってきた人々によって迅速に修復がなされたことにより、現在も以前と変わらぬ姿を見ることができるのである。市民生活に甚大な被害をもたらした震災の中で、文化財被害が最小限に抑えられ、今日も神戸の街に残っていることは誠に喜ばしい限りである。

第二節 古代・中世の建築

市内には十二世紀から十六世紀の貴重な古建築等が数多く残っている。西区では如意寺に十二世紀後半（文化庁は鎌倉前期としている）と推定できる阿弥陀堂を始め、至徳二年（一三八五）の三重塔と享徳二年（一四五三）の文殊堂（いずれも重文）と山門がある。太山寺は鎌倉時代の弘安八年（一二八五）建立の本堂（国宝）と十六世紀中頃の仁王門（重文）、さらに塔頭の安養院に十七世紀初頭の庭園（名勝）があり、神社では十六世紀の宗賢神社本殿（県文）がある。北区では石峯寺に十五世紀後半の薬師堂と少し下る頃の三重塔（共に重文）があり、南僧尾の観音堂（県文）は十五世紀後半の村人が維持した仏堂である。神社では応永十五年（二四〇八）の縦厚板目板葺の若王子神社本殿（重文）、神社の塔として県下で最古の文正元年（一四六六）建立の六条八幡神社三重塔（重文）、永正八年（一五一一）建立の豊歳神社本殿（重文）、また十五世紀初め頃と推定される、わが国最古の民家建築である箱木家住宅（重文）がある。旧市街地では須磨区の福祥寺（須磨寺）の本堂の後ろに応安元年（一三六八）の三重仏壇と宮殿（重文）があり、中央区の徳光院には文明十年（一四七八）の多宝塔（重文）が垂水区の明王寺から移されている。これらを本文では寺院・神社・住宅の順で記載した。

如意寺（西區櫛谷町谷口）
はせだに

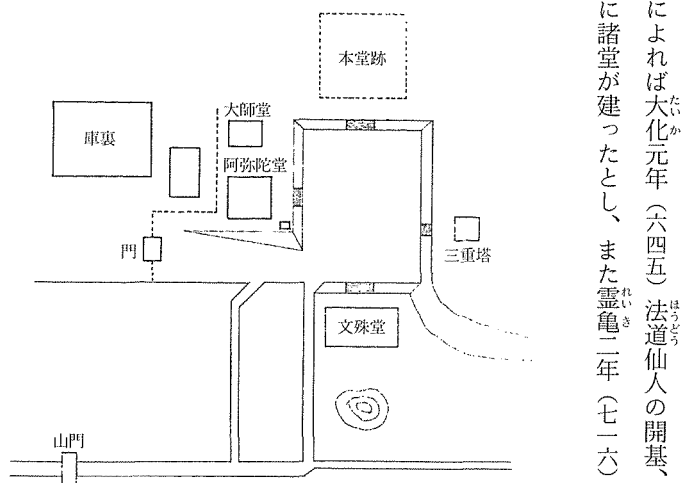


図89 如意寺の伽藍配置図
 (『重要文化財如意寺阿弥陀堂・文殊堂・三重塔修理報告書』より転載)

山号は比金山。天台宗の古刹で、『播陽明石之保比金山如意寺旧記（以下旧記）』（『神戸市文献史料』第二巻）によれば大化元年（六四五）法道仙人の開基、同五年に孝徳天皇の勅願所になり、白雉年中（六五〇～五四）に諸堂が建ったとし、また霊龜二年（七二六）に行基が建立とあるが定かでない。仁寿元年（八五二）円仁が

文殊堂を建て、伽藍を整備ともあるが不詳である。

次いで正暦年間（九九〇～九五）に願西が復興し、中興開山と呼ばれている。「如意寺文書」の貞応三年（一二三四）の延暦寺政所下文案に「願西聖人建立」とあるので、実際にはこの時が創建であろう。

伽藍は文化元年（二八〇四）の『播州名所巡覧図絵』に、本堂のほか山門、鐘楼、三重塔、坊舎二四所、文殊堂、常行堂、三昧堂、護摩堂、観音堂がみえ大伽藍とあるが、現在は本堂跡と西の阿弥陀堂（常行堂）、東の三重塔、正面の文殊堂と山門および庫裏等だけである。

しかし本寺の伽藍は天台宗の古い伽藍配置を残している。文殊堂・常行堂・法華堂は中国の天台宗の

智顗^{ちぎ}が五九四年に講じた『摩訶止観』で行儀とした四種三昧のうちの三つの修法を受けたものである。わが国では最澄が比叡山での修行僧に対し十二年籠山等を決めた「山家学生式」でこれを定めた。すなわち常坐三昧は文殊師利所説般若經により九十日を一期として昼夜坐しての修法で文殊堂がその修行堂である。常行三昧は般若三昧經により九十日を一期として昼夜休まず阿弥陀のまわりをまわり続ける修法で常行堂で行う。法華三昧は法華經により二十一日を一期として周回と坐法を繰り返して行うもので法華堂で行う。非行非坐三昧は随意三昧ともいい前記の三法以外の修法で、時と方法や場所期間を定めない修法で、随意意三昧堂で行う。比叡山では常行三昧と法華三昧とが主に修法され、常行堂と法華堂の二堂が並び立つことが多かった。現在では西塔に文祿四年（一五九五）再建の常行堂と法華堂が廊で繋がれた担い堂形式で建っている。この二堂は天台宗の広がりとともに山下^{さんげ}でも建てられるようになった。当時の二堂がともにあるのは加古川市の鶴林寺で、平安時代後期の常行堂と、天永三年（一一二二）の太子堂（法華堂）が本堂の前の西東に建っている。この鶴林寺の二堂は本尊の背後に來迎壁^{らいごうへき}があり正面に礼堂が付いているので、堂の性格は純粹な修行堂から礼拝目的の堂に変わる過程である。

十一世紀に入ると、人々は仏法衰退の末法の世の到来を現実のもの



写真198 如意寺全景

と感じたようで、『扶桑略記』の永承七年（一〇五二）一月二十六日の記事は「今年始めて末法に入る」とある。当時はそれを裏付けるかのような天変地異や飢饉、内裏や寺院等の火災が続いて起きた。かかる世情に人々は極楽浄土の教主である阿弥陀の来迎を期待して浄土信仰が隆盛を見る。その例として藤原頼通が道長から譲られた宇治の別業を末法到来の年に寺に変え、翌年の天喜元年（一〇五三）に平等院阿弥陀堂が完成した。堂は極楽浄土をこの世に再現した建築で、東向きに左右の翼廊と尾廊を構え、中堂に安置した本尊が阿弥陀を西方浄土にいる姿として、池の東の礼拝堂から拝む構想である。この時期に阿弥陀堂の建築が全国的に広まる。

浄土信仰の隆盛によって常行三昧堂は阿弥陀礼拝の堂に性格を変える。鶴林寺常行堂は正堂の前の礼堂が結界されずに正堂と一室であるが、これは三昧堂から礼拝堂への過渡期の建築だからである。礼拝だけを目的とした堂では常行三昧を修することがなくなり、それと対の法華堂も性格を変える。鶴林寺の太子堂は法華堂で釈迦を本尊とし、前面に礼堂を付け格子で結界した礼拝堂である。本尊の釈迦の後の来迎壁には阿弥陀の九品来迎図と帰来迎が描かれている。釈迦の正しい教えの法華経を信じれば九品の往生が可能であると教示する図である。なお背面は釈迦の涅槃図である。やがてこの法華堂も建てられなくなり、かわりに三重塔が建てられる。法華堂から変わる年代が明らかな最古の塔は加西市の一乗寺の三重塔で、承安二年（一一七二）である。

如意寺の建物では、十二世紀後半の平安時代末（重要文化財指定の際の年代比定では鎌倉時代前期）の阿弥陀堂（常行堂）と、室町時代前期の三重塔、室町時代中期の文殊堂の三棟と、少し離れた西側の山門がある。

これらの建築は創建当初の建築のままではないが、文殊堂は本堂の正面に建てられており、これは比叡山東塔の文殊堂（現状は楼門形式）の存在にならったもので、他の天台宗の遺構にはない配置である。阿弥陀堂の下層には前身建物があったし、三重塔の下層にも現三重塔とは違う遺構が存在していたらしい。おそらく当初の伽藍は西に常行三昧堂、東の三重塔に重なって法華三昧堂が建ち、南に文殊三昧堂が建っていたと思われる。この配置は山下の天台宗では早い時期の遺構といえ、先述した願西による十世紀末の創建と考えられる。これまで当寺の配置は本堂と常行堂だけの法界寺型とされてきたが、常行堂・法華堂・文殊堂の三堂の配置で、如意寺型と呼ぶべきもので、古代の天台伽藍を考える上で特に貴重である。

阿弥陀堂（常行堂）〔重要文化財〕

方三間各辺七・九メートル（二六尺三寸四分）の一間四面堂で、軸部は大面取方柱。組物は平三斗、中備に本かえり墓股（ただし修理で補加）、軒は二軒ふたのきしげ繁垂木。修理前は方形造であったが、解体修理で桁葎状銅板葺入母屋造に改められた。比叡山西塔の方五間の正規の常行堂と比べると小規模だが、三間堂では鶴林寺の常行堂の正面より少し大きめで、普通の規模の常行三昧堂である。建立年代は不詳であるが、現建物の下層に焼土層が存在しているので、前身建物があったことが確認できる。十二世紀以降の建築は多くの堂が礼堂を付けているが、現建物は礼堂を持たない堂であり、それは前身建物に從ったものである。野地脩左は「平二年（一一五二）を寺の創建として、堂の建立はこれより下る頃としているが（天台伽藍をめぐる若干の問題（下））、それ以前から建物が存在していたので、創建年代はさらにさかのぼるだろう。平面では室内の柱の背面の柱通りを庇の柱通りより後退させている。本尊の前を広くとるためである。しかし仏壇に來迎壁のな

この平面からは現建物の建立年代は野地説の十二世紀後半としてよい。また当初の方柱の面比が五・三分の一と大きく、平三斗の卷斗まきとの高さが鎌倉時代のものより高いことも傍証となる。正面は三間とも半部戸はんぶとで開放できる。両側面の正面側の第一間は弊軸を回して小脇板を立てて板戸を外開きに鈎る。中央間は半部戸で第三間は漆喰壁である。背面の中央間は小脇柱を立て板戸外開にし、両脇間は漆喰壁である。外回りは切り目縁を回している。以上のようにこの堂は、身舎に本尊の阿弥陀如来像を置き、その四天柱の周囲を不眠



写真199 如意寺阿弥陀堂



写真200 如意寺阿弥陀堂（内部）

い四方正面の仏壇でどこからでも本尊を拝めるようになってい。身舎もやと庇の段差がない床であること、庇の天井は折上小組格天井ごうてんじょうで、身舎の天井は一段高く構えるが同じ構成にしていることから、当時流行の阿弥陀礼拝の堂でなく、本来の常行三昧堂の構成である。

塔としての建立は今の塔が最初のものである。明確ではないが下層に遺構があり、三重塔が建つ前にこの位置に小規模な堂が建っていたとすれば法華堂ということになるだろう。

初重は桁行梁間とも三・八二メートル（二二尺六寸二分）の普通の規模の和様の三重塔である。外観は下重より上重が各柱間毎に一支（垂木二本の中心間隔）ずつ計三支遞減している。すなわち初重が二六支で二重が二三支、三重が二〇支ときれいな規矩の寸法を用いている。この各重の遞減の大きさに加えて、隅柱の高さ

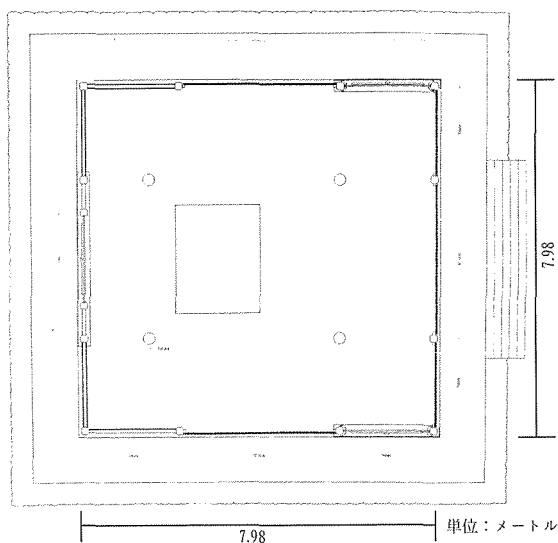


図90 如意寺阿弥陀堂の平面図（文化庁提供、一部修正）

不休で九十日間周回する常行三昧を修行するための常行堂本来の形を残した遺構として他に例はなく極めて貴重である。なお江戸時代には常行三昧堂という古称が使われていた。

三重塔（重要文化財）

五智如来を本尊とした四方回縁の本瓦葺三重塔である。組物は三手先、軒は二軒繁垂木。相輪の龍車は修理の際に鋳加したのであろう。陰刻された銘で至徳二年（一三八五）の建立年代が分かるが、もう一つ元和五年（一六一九）の修理銘もある。建立銘を残して再鋳したのは当時の修理のあり方を知る上で得難い資料である。下部の発掘では三重

しい軒反りをつくりだしている。軸部では初重の柱間装置は定法通りで、中央間が弊軸を回して板戸両開き、脇間は腰長押こしなげしと内法長押うちのりなげしの間に小脇板付きの縦の盲連子である。二重三重は中央間は弊軸で板戸両開き、脇間は額縁で縦板壁。室内は四天柱ではなく後ろ二本の来迎柱として来迎壁をたて、前に唐様わらひての仏壇を構える。高欄は正面の隅に擬宝珠柱ぎぼしで中央に蕨手わろひて。腰にはぼ左右対称の唐草付きの羽目板。天井はすべて折上小組格天井。心柱は天井の上から立つ。この時代では塔の初重は仏堂と同じように仏像を安置する目的のものである。上層の組物の隅の大斗に瘤を造っているのもめずらしい。規模は大きくはないが建立年代が明らかで、外観は正規の和様に統一された美しい姿の三重塔で、市内で最も古い塔である。

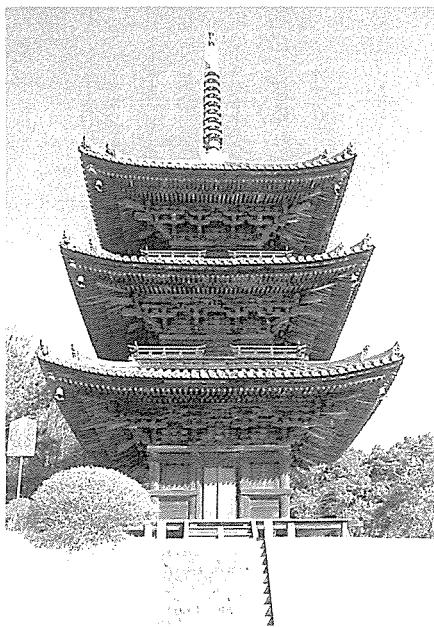


写真201 如意寺三重塔



写真202 如意寺三重塔（部分）

を中央の柱より大きくのばしており、軒天井と軒支輪を構える正規の三手先の組物による深い軒の出とともに美



写真203 如意寺文殊堂

文殊堂〔重要文化財〕

伽藍への登り道が西妻を通るが伽藍のほぼ中央の軸線上に建っている。桁行五間、一二・七六メートル（四二尺一寸）。梁間四間、九・七二メートル（三二尺八分）の三間四面の懸崖造の堂である。柱はすべて円柱、ただし身舎には梁間中央には柱を立てない。組物は出三斗で中備は間斗束、軒は二軒繁垂木、屋根は入母屋造本瓦葺。建立年代は組物の巻斗の墨書に「癸酉二月」とあり、様式から享徳二年（一四五三）の再建

と考えられる。堂内は結界のない一室で、東妻の壁の中央の柱を中心として左右に振り分けの位置に仏壇を構える。仏壇からすると堂は西正面になるが、西妻は中央の柱間二間が横羽目板張であるので出入口を正面とすれば北正面になる。室内を結界しないのは食堂としての機能を持たせたためであろう。室外は四方回縁で隅に擬宝珠を立てた高欄を回す。北面中央間を開け高欄は両脇に擬宝珠柱を立てて止める。

柱間は北面南面はすべて格子戸引違。西妻は両脇間が板張の格子戸引違で、中央二間は板張、東面はすべて横羽目板張。室内の床は梁間方向の板張。仏壇は江戸時代中期の補加で、高欄を回し中央に入母屋軒唐破風付きの唐様の宮殿を乗せる。天井は丸桁と繫梁上に梁間方向に棹を通した棹縁天井である。文殊堂として指定されて

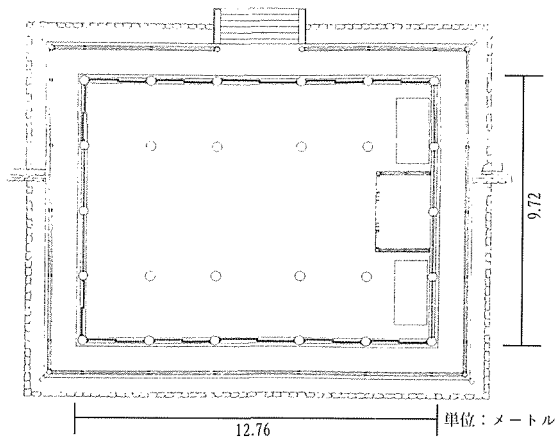


図91 如意寺文殊堂の平面図（文化庁提供、一部修正）

だが、今は三間一戸の八脚門に改められている。
代の作である。

太山寺（西区伊川谷町前開）

山号は三身山。天和三年（一六八三）書写の天延元年（九七三）付『太山寺縁起』（『県史』四「寺社縁起類」

いる建築は京都府の海住山寺（木津川市）と鳥取県の三仏寺（三朝町）にあるが、規模ではこの堂はそれらより遙かに大きい。和様の装飾の少ない簡素な建築で、おそらく創建時の常坐三昧堂の名残をとどめたものであろう。その意味でもきわめて貴重な建築である。

以上のように如意寺には平安時代末の阿弥陀堂（常行堂）と室町時代前期の三重塔、同中期の文殊堂が残っており、この伽藍配置は如意寺型というべきもので、十世紀末の天台宗の山下の寺院のあり方を考える上できわめて貴重である。また各建築の建てられた時代の特長を比較できることも得難い存在である。なお山門は『旧記』の延宝四年（一六七〇）の記事に楼門とあり、十七世紀後半は楼門であった軸部は中世の楼門の古材である。なお金剛力士像は鎌倉時

第二節 古代・中世の建築

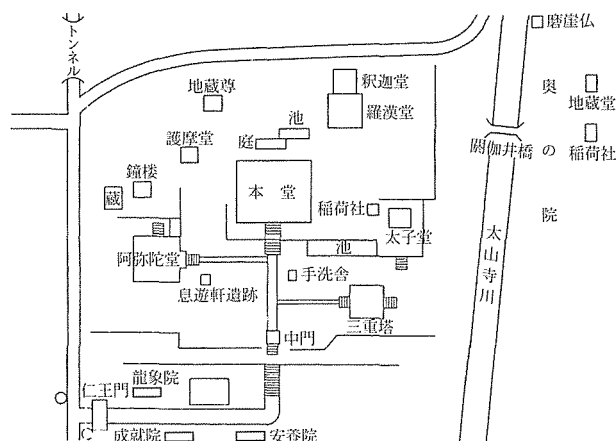


図92 太山寺の伽藍配置図（「太山寺リーフレット」所載の図に加筆）

〔播磨国〕 二九 は藤原鎌足のかまたりの子の定恵の創建とし、宇治が建立を命じたともある。また元正天皇の霊龜二年（七一六）の建立ともする。元正天皇の勅願寺説はその後中世文書にも散見するが確証はない。

とし、宇合^{うがひ}が建立を命じたともある。また元正天皇の靈龜二年（一二三七）かそれより少し以前に建てられているとし、寺の創建もそれとほぼ同じ頃として、鶴林寺太子堂の天永三年（一二二二）より後としている。その根拠は常行堂と法華堂が並列した鶴林寺式ではないからだという。当寺の創建時の伽藍は本堂と常行堂の二堂であったと推定したからである（「天台伽藍をめぐる若干の問題（下）」）。しかしほかに釈迦を本尊とした堂の存在が記録から想定できる。すなわち承元^{じやうげん}三年（一二〇九）八月の太山寺住僧琳秀等勸進状^{うしんじやう}写（『県史』二「太山寺文書」一二）によれば、前年の八月二十七日夜に焼失した建物は、本堂・釈迦堂（皆金色丈六）・阿弥陀堂（石仏半丈六）・鐘楼・食堂（文殊像）・宝殿・拝殿とある。堂名の下書き込みでは釈迦堂には丈六像があり、阿弥陀堂にはその半分の規模の石の半丈六像があったことが分かる。この丈六の釈迦の本尊を安置できる堂はかなりの規模のものと想定してよい。その後弘安八年（一二八五）の火災で本堂とこの釈

迦堂は再び焼失したが、阿弥陀堂は焼失を免れた。現在の阿弥陀堂の本尊は丈六の坐像である。この像は承元火災後の再興の時に石像の半丈六像は焼けて安置できなくなったので、木造で丈六像に造替したものと考えられる。承元二年に焼けた釈迦堂の規模は丈六像を安置していたから、当然今の阿弥陀堂と同規模程度の堂であつたはずである。そして釈迦を本尊とする堂は当時の天台宗の伽藍では法華堂であつた可能性が強い。また焼失の食堂は文殊堂でもあつたのであろう。

釈迦堂・阿弥陀堂等の呼称は、この勸進状の頃はすでに法華三昧堂・常行三昧堂などの本来の修行堂の機能が失われていたから、本尊の名で堂名が記載されていても問題がない。現在の三重塔周辺には三間四面堂が建てられる広さがある。この位置に釈迦を本尊とした法華堂があつたとすれば、食堂を含めて三棟の三昧堂の発展した堂が存在したことになり、当寺の創建時期は、本堂と阿弥陀堂の二堂から構成されたことを前提で導き出された野地説の保延三年を下限とする年代より古いとしても矛盾がない。如意寺と同じ伽藍配置があつた可能性が考えられるから、十一世紀にはすでに創建されていたとしてもよいのではないかと思う。その意味でも三重塔周辺の発掘を是非行う必要がある。その結果を含めて創建時期の検証を改めて行うことが必要である。

境内は大きく三段に造成されており、現状は最上段の中央の南寄りに国宝の本堂が南面して建つ。その東には鎮守社や太子堂、東北に羅漢堂と釈迦堂、西に鐘楼、西北に護摩堂等が建ち、中段のやや北寄りに東面して阿弥陀堂、中段東側ほぼ中央に三重塔が建っている。下の段は塔頭^{たっちゆう}等の建つ場所で、南の中程に名勝の庭を持つ安養院がある。境内の南西の端の県道沿いに重要文化財の仁王門がある。

これらの建築で最も注目すべきは本堂である。元は五間四面の正面に礼堂が付いた堂であったが、二度目の火災後、現在の棟下で内外陣に区画した堂に改められた。この変化は当時の寺院の維持を考えることで理解できる。鎌倉時代には在地の地頭・地頭代や公文等が寺を維持するために大きな力になってくる。現に「太山寺文書」にもこれらの寄進の記事が多く見られる。この動きに対応する寺院のあり方は、本堂を地域へ開放するということであった。そこでこれまでの正堂の前に礼堂を付けた堂から、堂の中央で前後に間仕切り正面側を外陣として常時開放する構成に改めた。これにより在地の百姓層も自由な参詣が可能になった。一方内陣は中央に仏を安置せず背面近くに仏壇を置く。当堂では仏壇の中央に春日厨子を納めて本尊を安置している。この頃から仏壇に宮殿や厨子を構えて本尊を納めて秘仏とし、日常は本尊を直接拝むことができないが、縁日等の特別な日に開帳し礼拝できるようにする。その特別な結縁の幸運が一層寺への奉仕を人々に促すことになる。太山寺の本堂はこのような中世の本堂の最も古い遺構である。なおこの形式の仏堂一般に密教系仏堂と呼ぶが、天台宗は顕密兼教ではあるが、内外陣の区画は密教の教義に由来するものではないので、ここでは中世仏堂と呼ぶことにする。

本堂〔国宝〕

境内最上段の南面に基壇上に亀腹をつけて建つ。弘安八年（二二八五）二月十九日に五間四面（礼堂付き）の前身建物が他の堂とともに焼失（堂舎・鐘楼再造立勸進状『県史』二「太山寺文書」八）、その後程なく再建されたのが現在の本堂である。再建時は旧来のものと異なり、中央で内外陣を区画した当時の最先端の中世仏堂として竣工を見た。正面七間、桁行二〇・八二メートル（六八尺七寸）、側面六間、梁間一七・七六メー

トル（五八尺六寸）の入母屋造檜皮葺風銅板葺の大規模な堂である。軸部は総円柱、前述のように棟下の中
 央の柱通りで内外陣の区画をする。内陣は入側を脇陣と後陣につくる。床はすべて同高の板敷き。外陣内陣
 とも入側柱が立つが、外陣はすべて独立柱である。内陣は仏壇の前通り三間にも柱を立て仏壇を構える。仏
 壇は正面の腰板に横連子をはめて一段高く床板を張る。内外陣境はすべて一間毎に柱が立つ。柱間装置は正
 面の七間すべてと両側面前より第二間を半部を釣込み、両側面の前第一間は弊軸をまわして板戸両開きとす



写真204 太山寺本堂

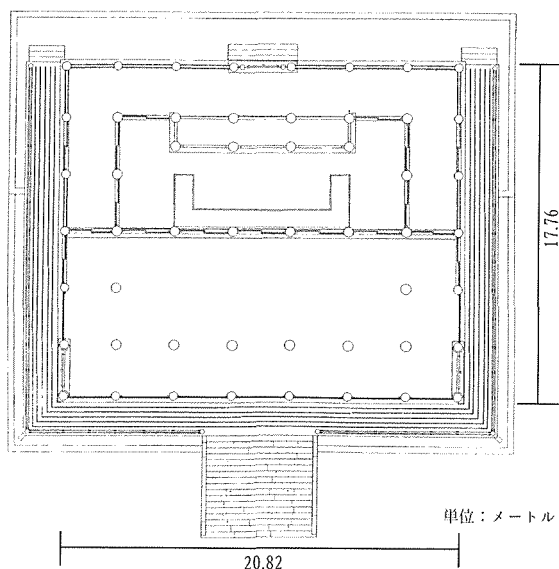


図93 太山寺本堂の平面図（文化庁提供、一部修正）

壇後陣境は土壁。室内の入側柱には側柱との間に繫虹梁つなぎこうりょうをかけ、天井は化粧屋根裏。外陣は入側柱に二手ふたて先組物に支輪で折上組入天井。内陣の仏壇前の四本の柱と内外陣境の柱に大虹梁をかけて組入天井。軒回りの組物は出三斗、中備に間斗束。軒は二軒繁垂木である。

本堂は内外陣が整った中世仏堂の典型であるが、外観が美しい軒反りを持っていることも特長である。この反りは中央の柱から隅柱へかけて柱の高さを次第に大きくしてつくられるのだが、水平にかけられた内法長押と丸桁の間隔が順次大きくなることで確認ができる。正面の部戸もそれを強調している。細部の様式は

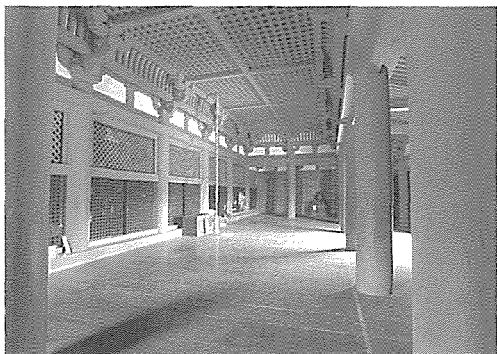


写真205 太山寺本堂（外陣）



写真206 太山寺本堂（内陣）

る。側面前第二間は格子戸引違、第五間は板戸引違、第四・第六間と背面両側各三間はいずれも土壁。背面中央間は小脇柱で板戸両開き、身屋の内外陣境は格子戸引違、上部は菱欄間はめ込み。外陣と内陣脇陣境は盲格子戸引違、上部は縦連子たてれんじはめ込み。内陣脇陣境は格子戸引違、上部は菱欄間はめ込み。内陣後陣境は格子戸引違で上部は土壁。仏

ほとんどが和様だが、肘木の輪郭が正面中央間から東が先端を垂直に落とした和様であるのに対して、西半分が上部から曲面に作った唐様としている。他に例のない手法であるが、おそらく東西でこの部分を異にすることで、鬼瓦等で見える阿吽^{あうん}の意味を持たせたものであろう。注目すべき意匠である。

一間春日厨子

仏壇の中央には春日厨子が安置されている。側面の壁板に弘安元年（二七八）十一月八日施入の墨書がある。前記の弘安八年の被災より前の年紀であるから、火災の際に持ち出されたものか、別の場所にあったものが置かれたのかは定かではないが、前身建物^{せんしんぶつ}は堂の中央に仏壇があったと考えられるから、持ち出された可能性も否定できない。いずれにせよ鎌倉時代を代表するすばらしい一間春日厨子である。

正面一間側面一間。柱は大面取方柱で扉の下部に三区の格狭間^{こうさま}を入れ、側面も二区の格狭間を入れる。正面は小脇壁で小脇柱は大面取方柱に弊軸を作りだし、双折板戸^{ふせつばんこ}を開き、内法長押の上には下部と同じ区画で横貫連子をはめる。組物は舟肘木。屋根は板葺、隅木を葺手状に上向きに作り出している。この種の厨子としては規模も大きく、格狭間や連子の造りも丁寧で、建築の時期も施入の年紀から明らかで貴重である。

仁王門（重要文化財）

境内の西南端の県道沿いに西面して建っている。元は楼門であったが今は三間一戸の入母屋造本瓦葺八脚門に改められている。桁行三間、九・二九メートル（三〇尺六寸六分）。梁間二間、五・三〇メートル（二七尺五寸二分）。正面両脇間に金剛力士像を安置している。背面北脇間に楼門であった時の三手先の軒回りを復元して置いてある。柱はすべて円柱、妻壁は土壁、脇間の前後境は羽目板。正面両脇間は金剛柵と上部に菱



写真207 太山寺仁王門

る。楼門を改めた簡素な三間一戸の八脚門であるが、室町時代の細部を伝える遺構である。

安養院庭園（名勝）

仁王門から東に通る石畳を本堂に向かって約二〇〇メートル足らず行くと、道の南側にならんで西に成就院と東に安養院がある。名勝に指定されている庭は敷地の北東部で、草葺の塔頭の建物の書院の北側の約二三五平方メートルを占めている。県下で最初に指定された国指定の庭園である。庭園は作庭当時の姿をその

格子。中央間は正面および親柱間は虹梁状飛貫に蓐股を置く。組物は出三斗である。側回りには中備に間斗束。正面の金剛力士像の間の天井は棹縁天井、他は鏡天井。軒は一軒繁垂木である。楼門として建てられた時期は推定で室町時代中期と考えられている。蓐股や木鼻等の形もその時期で妥当である。現在地は当初からではなく、後で移されたものと考えられており、その時期について『重要文化財太山寺仁王門修理工事報告書』は『播州名所巡覧図絵』の「天正の頃、林崎の人、重五右衛門（中略）二王門の柱をいだきあげて、柱礎の上に片木を以てさしはさめり」という記述をもって、天正（二五七三〜九二）の頃に移転し、元禄（一六八八〜一七〇四）の頃に現在の八脚門に改めたと推定している（仁王像の詣の内部の年紀が元禄二年）。なお『図絵』の太山寺の絵には今と同じ姿が描かれてい

ままにとどめていることはないので時代の判定は難しいが、作風から桃山時代と推定されている。亀島が江戸時代末に手が入れられている以外は、基本的には当初の構成がよく残っているとされている。中央北西寄りにある大きな円錐形の蓬莱石とその西の立石の巧妙なバランスと、書院側から仏手石型手水鉢から東北につながる谷の洞窟と橋その他の複雑な構成の面白さなど、細かなところに配慮が行き届いている（西桂『兵庫の庭園』）。

石峯寺（北区淡河町神影）

山号は岩嶺山。真言宗の古刹で、寺蔵の『微考録』（『県史』四「神社縁起類」（播磨国）二四）によれば白雉二年（六五一）法道仙人が孝徳天皇の勅願により金堂を建て地蔵を安置し、行基が聖武天皇の勅願により天平十九年（七四七）に薬師像を安置したとあるが不詳である。その後弘仁十四年（八二三）に三重塔建立とあるがこれも不詳である。

石峯寺の創建年代は不詳であるが、「石峯寺文書（以下寺文書）」の承久四年（一二三二）の領家下文写（『県史』二「石峯寺文書」一）に石峯寺が地蔵菩薩の霊地とされ、建長元年（一二四九）の預所兼地頭代平某奉免状写（同上二）に本尊地蔵菩薩寄進田の記載がある。この頃に金堂を中心とした寺観が整ったようで、



写真208 安養院庭園

薬師堂の背廊に安置の閻魔像が文永二年（一二六五）造顕であることから推察できる。この像は現在金堂内に安置されている閻魔像の前身である。また三重塔の下層と薬師堂の下層に焼土層が確認されているので、薬師堂の創建は少なくとも十三世紀中頃である。なお『重要文化財石峯寺薬師堂修理工事報告書（以下『報告書』）には現薬師堂の下層に二重の焼けた層が報告されている。最下層は瓦の混入がないので瓦葺でない堂が存在したこと、その上層に室町初期の瓦が含まれているので、最初の薬師堂の焼失後に、瓦葺で二期目の薬師堂が再建されたとしている。『寺文書』には嘉元元年（一三〇三）に「田畠荒野」寄進（同上五）、正和四年（一二三五）金堂鰐口鑄造（銘）、文保元年（一二二七）「石峯寺修理料田」寄進（同上六）等が続くから、寺内の整備が一段と進んだ。続いて延文五年（一二六〇）の大般若経納箱新造、同年閻魔王像造顕、康安二

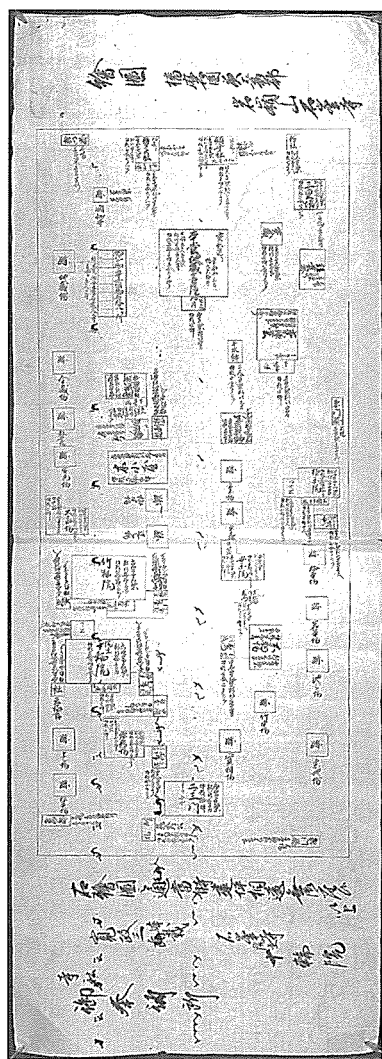


写真209 寛政三年（1791）の石峯寺
絵図（竹林寺蔵）

年（一二三六）板碑造立と続くが、永和元年（一二三五）地藏菩薩造願、同三年「石峯寺西金堂常行三昧衆僧膳米料足田」寄進（同上二六）と並ぶ。これらを考慮すると薬師堂が焼けた時に金堂も同時に焼失したので、金堂再建時に本尊の地藏も造願されたのであろう。なお常行三昧を行う西金堂がどの位置なのかは不詳だが、薬師堂に相對する西側が考えられる。なお三重塔がいつから存在したのか不明であるが、焼土層は一層のようだから、前身建物があったことは確かである。常行堂が存在したと、多宝塔でなく三重塔であるのは天台宗の伽藍と類似している。

少なくとも二度の火災があったが、そのうちの一度は嘉吉の乱による全山焼失という大事件であった。文安三年（一四四六）の山名教豊の安堵状（同上二〇）に、堂舎再興のことが見える。戦火の証は薬師堂と三重塔の直下の焼土層がそれであろう。金堂についてはおそらく直後に再建が始まったと思われるが、康正三年（一四五七）の地藏の造願が完成時期であろう。薬師堂は、『報告書』では教豊の安堵状を根拠に文安三年の再興としている。金堂より早い再建は考えにくいので、十五世紀後半としておきたい。三重塔は境内出土の瓦銘の明応五年（一四九六）の頃の再興である。三重塔や薬師堂に関する修理等の記録は多いが、金堂に関する記録は寛永五年（一六二八）に本尊の修理があった程度で詳しい資料は少ない。

薬師堂（重要文化財）

桁行五間、一二・九一メートル（四二尺六寸二分）。梁間五間、一二・五五メートル（四八尺一分）。内外障区画の西正面の中世仏堂である。軸部は総円柱、組物は出三斗、中備は間斗束。軒は一軒で疎垂木で中央の卷斗の上だけ吹き寄せ繁垂木。屋根は入母屋造本瓦葺。建立年代は嘉吉の乱以降で十五世紀後半と推定され

中央三間は小脇壁を嵌めた小脇柱で棧唐戸さんからどを釣る。両脇間は腰を真壁として上部に縦連子窓。両側面は同じ構成で正面より第一間と第五間が真壁、第二、第三間は腰真壁上部縦連子窓、第四間はほぼ中央に方立柱で前方が板戸片引きで後方は真壁、背面は中央間南よりに潜戸で他は真壁。内外陣境は中敷居を設けて格子戸引違。中央三間は内法上に菱欄間。内陣の厨子の正面は供物棚上に腰長押を置き小脇壁方立で棧唐戸さんからど両開き。側回り柱の組物上部と入側柱の頭貫位置かしめに下から挿し肘木と巻斗で支えて虹梁を架ける。外陣身舎の中央



写真210 石峯寺薬師堂

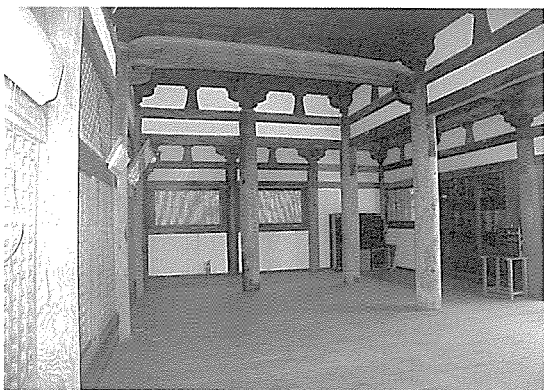


写真211 石峯寺薬師堂（外陣）

る。平面は正面より第三間の柱通りで内外陣を区画する。内陣は背面より第二間すなわち入側柱通りの中の三間の中央を厨子として後方に張りだし、その両脇は真壁で結界して後陣と分ける。三間の前に供物棚付き。両側面とは結界しない。内陣中央間畳敷き、他はすべて拭板敷き。正面だけ切目縁を付ける。側回りは正面

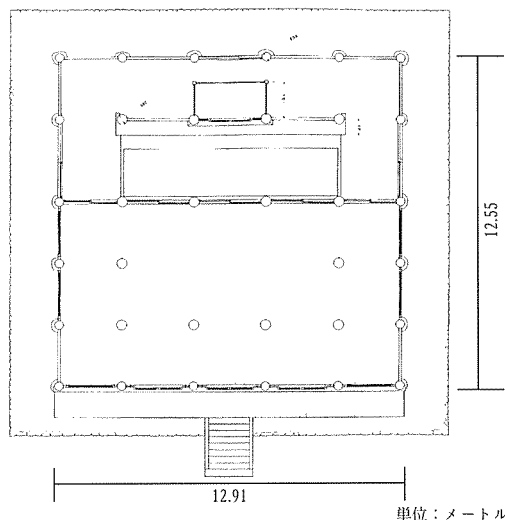


図94 石峯寺薬師堂の平面図（文化庁提供、一部修正）

の二本の柱間に入側柱と同じ架構位置で天竺二（大仏）様の大虹梁を架け中備に板臺股。内陣は同じ位置に虹梁を架ける。天井は入側は化粧屋根裏、身舎は桁方向の棹縁天井である。

和様を基本とした装飾が少ない簡素な仏堂であるが、細部の手法でまず目につくのは身舎の天竺様の大虹梁である。断面は上部と下部は水平であるが、側面は橢円状の曲面が顕著である。天竺様の虹梁の使用はこの時代としては珍しい。また柱間に立つ間斗束はいわゆる撥束はちぶで下部が大きく開いている。この種の束としては早い例である。大虹梁上の板臺股と隅柱の木鼻は素直な輪郭で線方の形もよい。なお太山寺本堂では中央棟下で区画されていたが、この薬師堂は外陣が内陣より広い。より多くの参詣人を受け入れるためである。

三重塔（重要文化財）

大日如来が本尊で、四方回縁の三間三重檜皮葺形銅板葺の三重塔である。組物は三手先、軒は二軒繁垂木、建立年代は十五世紀末頃である。床下の地中の焼土層中に銅滓どうさい数個と金箔片が確認されているから、嘉吉の乱で焼けたことは確かである。前身の塔は心柱がないから『微考録』記載の古代の三重塔ではない。真言宗

三十年（一九五五）に解体修理されたものである。初重は桁行梁間とも五・一一五メートル（二六尺八寸八分）の和様の三重塔である。各重の支割は下重より四支ずつ遞減させている。すなわち初重三二支、二重一八支、三重二四支で安定感のある美しい塔である。様式的には扉構えが棧唐戸であること、組物の肘木の木口の曲線が唐様であること、仏壇が唐様であることを除けば和様でまとめられている。初重の柱間装置は中央が弊軸を回して棧唐戸を釣り、両脇間は腰長押上と内法長押間に縦貫連子。組物は格天井軒支輪を付けた三手先。組物間は間斗束。室内は板張りで、四天柱内の天井は折上小組格天井、周囲の間は鏡天井。来迎柱間横嵌板。



写真212 石峯寺三重塔

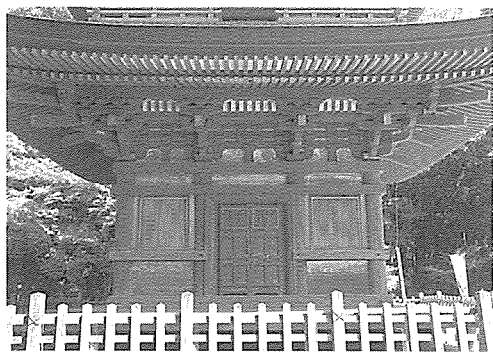


写真213 石峯寺三重塔（初重）

では根本塔としての多宝塔を建てるのが原則だが、天台宗に多い三重塔である。屋根が檜皮葺のため天正十六年（一五八八）をはじめ多くの修理があった。なお現況は昭和

その前に格狭間彫刻入りの唐様の仏壇（須彌壇）を構える。高欄は隅は方形の逆蓮柱、斗束は握蓮、正面は蔽手。二重三重は中央間が弊軸を回して板扉両開き、脇間は縦板張り。縁は腰組付き切目縁、刎高欄、腰組は造出肘木で平三斗。組物は初重と同様に三手先、ただし軒天井は鏡天井である。和様を基調とした装飾のごく少ない清楚な三重塔である。

福祥寺（須磨区須磨寺町）

山号は上野山。真言宗須磨寺派の本山で須磨寺の名で親しまれている。寺伝では海中から出現の聖観音像を仁和二年（八八〇）会下山から移して寺を建てたとある。文献では明応七年（一四九八）の沙門弘源勸進状（『県史』一「福祥寺文書」九）に、光孝天皇の勅願で仁和二年間鏡上人の草創とある。書き継ぎ記録『当山歴代』（以下『歴代』）では、聖観音像は源頼光以来の撰津源氏相伝で、嘉応二年（一二七〇）源頼政が当寺に安置したとある。その後寿永三年（一一八四）に一ノ谷の合戦があった。『歴代』では平家の軍勢が一ノ谷に城郭を構えて在陣し、生田森から当寺まで陣屋をつくり、軍勢が充満して乱妨し寺庫を破り物等を持ち出したとある。この時に奪われた寺の縁起等が大和国多武峯にあったという伝聞が書かれているが、寺自体の炎上等はなかったようである。延文五年（一一三六〇）三月二十七日に火災があり、『歴代』では本尊や毘沙門像と大般若経は取り出したが、金堂・釈迦堂・鐘楼・鎮守、法会具足等は焼亡したとある。本堂の復興は貞治四年（一一三六五）に正面五間側面六間で立柱とある。これだと三間四面の正堂に桁行五間梁間二間の礼堂付きになる。応安元年（一一三八八）に現宮殿ができ、同三年に現存の応安二年胎内銘の不動像が新造された。



写真214 福祥寺本堂

同四年には六年に及ぶ本堂の大工事が完成を見た。この本堂の工事に併せた仏壇と宮殿が完成した。宮殿の願主は長賢で貞治五年在銘の大鰐口の寄進者でもある。

以後簡略に『歴代』に従って寺の推移をみると、応永十二年（一四〇五）に火災後なかった本尊の蓮華坐が造られ、同十三年鐘樓が建てられた。再び寺は同三十四年の將軍足利義持による赤松満祐追討の騒ぎで災難にあう。満祐追討の細川方の軍勢が寺に着き、「藍妨無比」で多くの建物も破壊され、残りは僅かに本堂と総（仁王）門ばかりとある。主な仏像等は寺僧が抱えて山の中へ逃げて助かったが、このとき平敦盛ゆかりの青葉（小枝）の笛をはじめ寺宝の多くが失われた。ただし笛は不思議な縁で正長元年（一四二八）十月に返ってきたので、堂内に仮屋を

造って祝いの行道をしたとある。寺はこの後少しずつ整えられた。永享十二年（一四四〇）には総門改造の勧進があり、嘉吉二年（一四四二）正月に新始めを行い、二月末にはほぼ完成して仁王を門に戻している。このうち『歴代』には脱欠があるが、文明十九年（一四八七）四月に三重塔の立柱があり、延徳三年（一四九一）に完成している。永正三年（一五〇六）に本堂の内陣の天井を張り、同十六年に護摩堂を造作、大永三年（一五二三）総門の修理、享禄二年（一五二九）に宮殿の彩色を行っている。天正五年（一五七七）十二月に織田信長の配下滝川一益勢によって西宮より一ノ谷まで放火され、仁王（総）門が焼けた。同十一年秀吉

による検地の際には寺領が安堵され、同十五年本堂の屋根替え、同十六年には仁王像を京都で三貫文で買い、諸国からの参拝者による笛見料によって仁王門が建った。

このように戦乱等で焼かれたりして困難に遭遇してきたが、何とか寺は維持できていた。ところが文禄五年（一五九六・十月に慶長と改元）閏七月十二日の夜半に直下型の大地震が起き、本堂はじめ被害を受け、三重塔の相輪が蓮池まで飛んだ。当夜は東国からの巡礼が一五〇人ほど本堂で通夜していたが、「頭足手打たれ皆形和に成り、其の内二人は微塵に成り候」と多くの死傷者を出した悲惨な様子が描かれている。続けて本堂内では仏像は倒れたが、宮殿は傾いただけで崩壊を免れたとある。しかし被害が大きかったので護摩堂の屋敷に五間四面の仮堂を建てて正月の修正会しゅうしやうえを行った。「二王門悉く坊中も残らずくづれ、里方同意牛馬人民多く死す」「兵庫も一間残（らず）くづれ、その内より火出し、則ち家にて火送り候。人死す数は知れず候」と、この地震での須磨寺から兵庫あたりの被害のすさまじさを生々しく伝えている。『歴代』によると、ただちに復興にとりかかり、同年中には古材木で仮堂を造ったとの説明がある。慶長七年（一六〇二）には豊臣秀頼から再興の奉加が寄せられ、同八年仁王大門と鐘樓の建立があった。

江戸時代に入ると、元和九年（一六二三）に本堂の雨漏り修理を願い出たが許可されず大破に至ったが、寛永五年（一六二八）に修理ができた。万治二年（一六五九）大洪水で西の谷から土砂が入り、一二坊すべてが被害を受けた。埋没四坊のうち三坊が屋敷替えとなった。天和元年（一六八一）仁王門の造営があった。元文五年（一七四〇）裏山が崩壊したが本堂と護摩堂の被害はなかった。この時期は洪水の災害記録が続く。寛延三年（一七五〇）四月に大雨で裏山が崩れ本堂の半分以上と宮殿が被害を被った。その復興は『歴代』

に詳しい記述がある。七月に大坂の奉行所で普請願いが許可されたが、それより早く瓦は五月から現在の姫路市の山田の土で明石の瓦屋が寺で焼き始めた。材木は八月に大坂でとのえ、残りは境内の松をことごとく切って用意し（屋根等の材か）、必要に応じて木材等の買い付けを行い、宝暦二年（二七五二）十月二十四日に本堂の棟札を打ち、宮殿に棟札を入れて本堂の工事が完成している。翌二十五日に本堂修復の大般若転読に続けて、多井畑の三名からそれぞれ銀一五〇匁寄付があったとの記事で『歴代』は終わっている。この後の江戸時代後期の須磨寺の状況は『播州名所巡覧図絵』に図版とともに解説があり、「街道より二丁ばかり登りて、二王門に至る。古義真言宗。本尊聖観音。護摩堂、鎮守堂、馬盂額二王門にあり、十王堂」などに見える。現在は市街地化し雰囲気は異なっているが、境内の建ち並びの状況はこの『図絵』と大きな変化はない。

宮殿と仏壇（重要文化財）

三間宮殿は、桁行三間、四・四〇メートル（二四尺五寸三分）。梁間一間、一・四六メートル（四尺八寸四分）。軸部は円柱（背面の取付柱は半円柱）で、下部に切目長押、扉上部に内法長押（ともに半長押付き）を付け、柱の天端に頭貫（後補の木鼻付）で台輪。組物は唐様三手先詰組、軒は二軒繁垂木、寄棟造板葺正面軒唐破風（後補）付き。扉は正面三間縦幣軸に小脇板、両折両開き板扉を釣る。側面は横板張り。

三重仏壇は、一重の桁行格狭間一一間、五・八三メートル（一九尺二寸七分）。梁間格狭間四間、二・五三メートル（八尺三寸六分）。一重は床に地覆、繰型付きの框、唐戸面付きの束、框組、束間は繰型付きの格狭間。二重は上下横框、唐戸面付きの束、框組、束間横板、上面板張り、宝珠柱高欄正面蔵手仕舞。三重は

まに残された。唐破風などはそのときのものである。後補の部分はあがるが、県下の宮殿では最大級でかつ下部の三重仏壇という構成は誠に珍しい。宮殿は室町時代前期（南北朝期）の見事な唐様の詰組の存在が特徴である。特に卷斗は高さ七寸でそのうち斗^と削^ぎは二寸というきれいな寸法に造られている。組物の花肘木や木鼻はこの時代の標準的意匠を示している。扉は今回の修理で補加された。脇の板壁も同じく補加である。仏壇は他にほとんど例を見ない通常の仏壇の上に二重に仏壇が重なった三重仏壇である。一重は通常の和様の格狭間のもので、その上の二重目は装飾のないものが一重より大きめに造られており、束の位置は一重と無

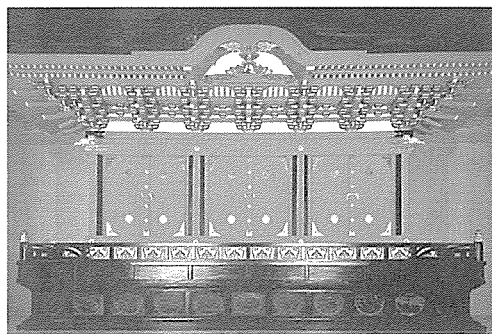


写真215 福祥寺本堂宮殿と仏壇
 (『重要文化財福祥寺本堂内宮殿及仏壇保存修理工事報告書』より転載)



写真216 福祥寺本堂仏壇詳細
 (『重要文化財福祥寺本堂内宮殿及仏壇保存修理工事報告書』より転載)

上下横框、唐戸面の束、束間
 蝙蝠狭間^{こうもりさま}ただし側面は絵様を欠く。

応安元年（一三六八）の建築であるが、度重なる補修等で改変を受けたものを、昭和四十五年（一九七〇）から四十六年にかけて解体修理して復原し、本堂の後ろに新築した鉄骨造の収納庫に納めたものである。しか

関係に置かれている。なお和様の擬宝珠高欄と蔵手は修理前にもあったが、現在のものは建立年代相当に復元されている。三重は見事な蝙蝠狭間を持った入念な仕上げのものである。この三重の束の位置は二重の束の位置の一つおきに一致させている。三重仏壇の意味はよくわからないが、上部の宮殿は仏を安置した浄土で、その下の現世などの三界なのだろうか。幾たびかの改変を経ているが、要所は当初材が残っており、三重仏壇というきわめて珍しい仏壇であり、かつ年代が明らかで大いに注目されるべき遺構である。

徳光院（中央区葺合町布引山）

明治三十九年（一九〇六）に川崎正藏により菩提寺として創建された臨済宗天竜寺派の寺院である。ここは古くは滝勝寺のあった場所で、布引滝道に当たっている。境内は禪林特有の静寂さを保っている。創建は新しいが仏像に平安時代中期頃の持国天・増長天立像（県指定文化財）がある。また垂水区の明王寺から移された室町時代の多宝塔のほか、江戸時代前期の鐘楼が三木市の伽耶院から移築されている。

多宝塔（重要文化財）

もと垂水区名谷町の明王寺にあったのを明治三十三年に川崎正藏が買い取り、加納町の自宅に移築していた。正藏は特に気に入っていたのであろう、明治三十九年の徳光院創設時には移されず、昭和十三年（一九三八）になって移された。明王寺での建立は墨書により文明五年（一四七三）から同十年である。本尊は薬師如来だが元は五智如来か大日如来であろう。徳光院に移築のため解体して運ばれていた最中の昭和十三年七月五日の阪神大水害で土砂に流され、一部の部材を失い後補されているが、全体としては保存は良好である。

小規模な四方回縁の本瓦葺の和様の三間多宝塔である。初重は桁行梁間とも一・九四メートル（三九尺四寸）、上層の直径は六・二メートル（二〇尺四寸六分）。白漆喰塗りのコンクリート製の亀腹上に自然石の礎石を置いて建っている。軸部は円柱、四方回縁切目縁、切目長押半長押、腰長押、内法長押、台輪。中央間柱に直接弊軸を付け、小脇板で板戸を釣る。両脇間は腰横羽目板で腰長押上に小脇板で縦連子窓。組物は初重は出組で木鼻付き、支輪付き、中備はない。地隅木の下に繰方つき側面絵様を付けた持送りの実肘木^{さねじき}。軒は二軒繁垂木。上重は総円柱、切目長押、内法長押、台輪。柱間は扉位置は弊軸付き板戸、他は連子窓。組物は四手先^{よてさき}、尾垂^{おたる}。



写真217 徳光院多宝塔

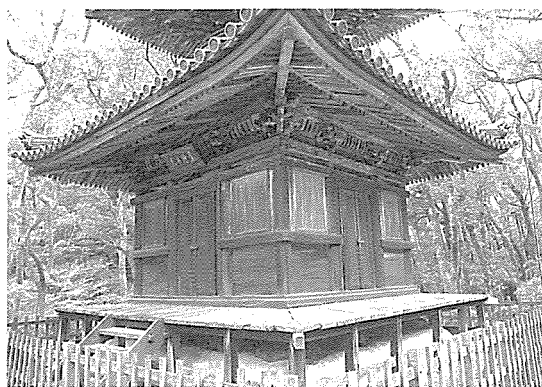


写真218 徳光院多宝塔（部分）

木上に木鼻、隅は尾垂木二重で地隅木下は繰方付き持送りの実肘木。軒は二軒繁垂木。上層の縁腰は出三斗の垂麻組。柱間は初重の中央間一四支、両脇間一一支。上重の直径が初重の一边の約半分と小さく安定感がある。屋根は本瓦葺。室内は四天柱でなく、来迎柱を立て西面は三間とも須彌壇に造るが、川崎邸にあった時は折衷様の古式のものであったとされている。水害時に流された結果、床、天井とともに現状に改められたものであろう。扉も板戸になっているが、川崎邸での写真では栈唐戸が釣られていた。しかしこれらの後補以外は保存は良い。二度の移築と部材を水害で失うという数奇な経緯を経ながら、全体として当初の美しい姿をよく今に伝えている。県下の最古の多宝塔として貴重である。

南僧尾観音堂（北区淡河町南僧尾）

今は廃寺であるが承和七年（八四〇）創設と伝える恒例山新善寺の旧本堂である。散村である南僧尾集落の中央部の小高い丘状の台地の北側で、西側が谷筋になった台地の端部である。堂のすぐ東に十六世紀末から十七世紀初頭の地藏堂と、その南に覆屋に入った江戸時代中期の鎮守社の八幡神社と中世の大きな五輪塔等がある。また堂の西端の縁の上に江戸時代中期の一間社が置かれている。

観音堂の建立年代は不詳だが、仏壇の中から発見された「おとう板書」が下田勉の研究で明らかにされ「新善寺の『おとう板書』」、観音堂の年代の推定が可能になった。板書は一部が削られ上書されて古い部分が少し失われているが、延徳元年（一四八九）から天正十二年（一五八四）まで途中三年が欠ける以外は連続していて、百年近い間村人が順番で堂守を勤めた記録である。これ自体中世の村方の信仰や仏堂維持のあり方



写真219 南僧尾観音堂

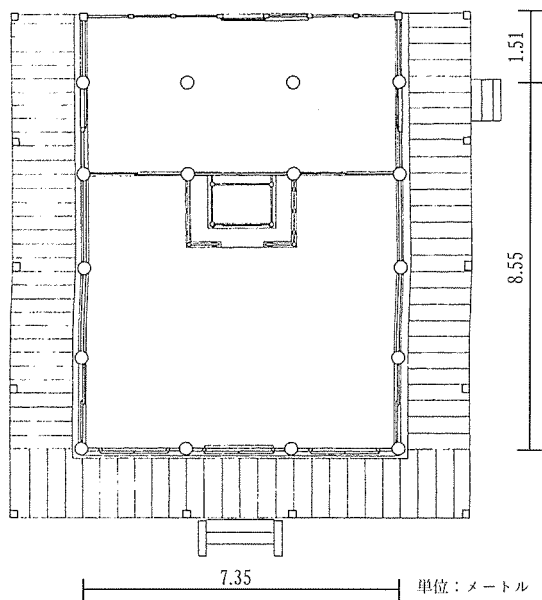


図95 南僧尾観音堂の平面図
 (『神戸の茅葺民家・寺社・民家集落』より転載、一部修正)

を知る貴重な資料であるが、この板書と建築の様式から堂の建立が延徳元年直前と推定できることになった。
観音堂〔県指定重要文化財〕

桁行三間、七・三五メートル（二四尺二寸七分）。梁間四間、八・五五メートル（二八尺一寸六分）。背面の底一・五一メートル（五尺）を室内に取り込む。正面側面の底は切目縁である。茅葺入母屋の三間堂としてはやや規模が大きい。軸部は太い柱で隅だけに舟肘木を組む。切目長押、内法長押を回し、正面三間は新し

い棧唐戸を釣る。両側面は正面第一間は板戸引違、第四間前側潜戸、正面から第三間の仏壇の柱通りで縦板貼りで間仕切り、その背面は庇を取り込んで後陣とし、背面中央の西を片引戸を立て、他は横羽目板としてゐる。室内は板敷きで柱がなく、背面中央に仏壇と宮殿を置く。天井は棹天井。仏壇は唐様で格狭間は無目の鏡板、高欄は擬宝珠高欄で中央は蕨手である。宮殿は円柱で切目長押、内法長押、台輪を回し、正面は小脇板を立てて上に弊軸様の上框を乗せる。扉は棧唐戸。組物は唐様の三手先で中備にも組物を置く詰組である。全体に装飾は少ないが隅木下の持送りの線形に特徴がある。軒回りは縁になっている庇の天井は疎垂木の化粧屋根裏風の仕上げで、桁先で垂木を切り、軒付け仕上げにし茅葺の垂木が架かる。

この規模の堂で室内の正面側三間分に柱がないのは珍しい。中世仏堂では側面四間だと中央で内外陣に区画するが、仏壇の前に村人が集うための広い空間を確保するため省略したのであろう。「おとう」で輪番で堂の維持がはかられたことと関係があるかもしれない。寺僧により寺が維持されたのでなく、村人が維持する堂であったから、日常的に奉仕する本尊が仕切られた内陣の奥に位置する必要がなかったであろう。仏壇の背面の柱通りに柱を立てることで、茅葺という軽い屋根であったから構造的には大きな欠陥にはならなかったのである。なお天正八年の墨書で屋根を二尺下げたことが見えるが、これは屋根の改造だけのことである。

建立年代が十五世紀後半の建築で、村の構成員すべてが年番で「おとう」を勤めて維持した仏堂としての平面を持った堂で、当時の仏堂の通例とは異なった平面構成であるが、そのことが中世の信仰のあり方を知らううえで貴重な遺構である。近年長く放置されていたために傷んでおり、その修理が雑なのは惜しい。

地藏堂

観音堂のすぐ東に立つ正面一間、側面二間背面三間、屋根方形の南面した小さな堂で、軸部が大面取方柱の板敷の堂で、背面中央に構える一間厨子の覆屋状の建物である。正面側面とも二・九五メートル（九尺一寸）、背面の中央の二本の柱に平入りの一間の厨子を直接取り付けている。厨子の軸部は正面は円柱、背面は覆屋の大面取方柱を利用してゐる。厨子の正面に前棚を付け、切目長押、内法長押で小脇板を立てて板戸両開に作る。頭貫の鼻は木鼻。組物は隅だけだから出三斗になる。中備は正面側面とも板墓股。軒は二軒繁垂木、隅木入りであるので屋根は寄棟であろうか。木鼻、実肘木、墓股などに中世風の特徴が残っている。

十七世紀後期とする説もあるが、遅くとも十七世紀初頭を下ることはないと思われる。修理が多く、軒も棒垂木に改まっているのは惜しいが、一見の価値がある。

なお、江戸時代の鎮守社である一間社隅木入春日造の八幡神社本殿は十八世紀のものであるが丁寧な建築である。また観音堂の縁に置かれている一間社隅木入春日造の神社本殿は、十七世紀後半のほぼ完全な建築である。可能ならば室内で保存した方が良いと思われる。いずれも村方が自らの手で保存してきた貴重な遺構である。鎌倉期の大きな五輪塔とともにぜひ良い状態で保存していきたいものである。

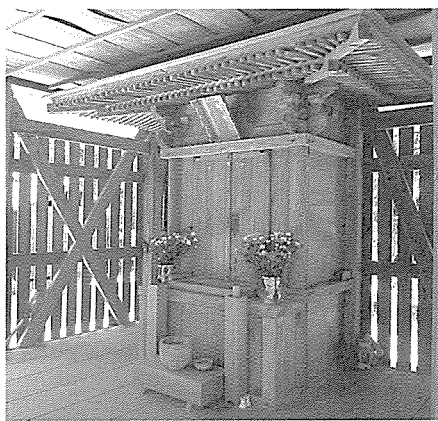


写真220 南僧尾地藏堂

若王子神社（北区山田町福地）

『兵庫県神社誌』（以下『神社誌』）によれば創立年月不詳とあり、宝暦八年（一七五八）頃に記された『若王子山福寺中興縁起』（以下『福寺縁起』）を載せている。福寺は現在の無動寺で、明治維新の際に地藏寺と併せて若王山地蔵院無動寺と改称した。『福寺縁起』の記載では聖徳太子が丈六の大日如来を造り寺を建て、八幡神社を鎮守社としたが時を経て荒廃したので、鎌倉幕府の執権北条時政（執権職は建仁三年〔元久二年（一一九三）〕に願ひ出て復興、若一王子を勧請したとある。後の永仁五年（一二九七）に沙弥正蓮や橋長綱等が現在の本殿の前身建物を建立し、応永十五年（一四〇八）に沙門宏恵・沙弥経岫・橋光綱等で再建したのが現在の本殿である。『重要文化財若王子神社本殿修理工事報告書』では屋根材の傷み方を考慮して約五〇～六〇年後に覆屋が建てられたと推定している。その後弘治二年（一五五六）に沙門恵弘等によって覆屋が建て替えられたようである。無動寺の本尊の大日如来座像（丈六）と脇侍の釈迦如来座像とともに平安時代の作とされているので、聖徳太子の創建説の真偽はともかく、古代に丈六仏を安置した堂を持つ寺院が存在したことは確かである。その時代は八幡神社が鎮守社であったとするが、山田の谷で八幡神社は中村にある六条八幡神社だけであり、位置的にも近いから鎮守社であった可能性はあるが、同神社の文書には福寺のことは記されていない。執権時政に願ひ出た説も確かめることはできないが、中世になって現在の若王子神社を鎮守社として勧請したことは、永仁五年の棟札でわかる。

現在の本殿は棟札で応永十五年の建築であることが確かめられる。前の本殿建立から百十一年後のことである。その状況は棟札の記述によって分かる。すなわち柱根が朽ち梁棟傾斜と傷みが進んだためである。応

永十五年二月五日に棟上、同十六日に大工平光弘、神主孫九郎太夫、願主沙弥聖岫等により作り始めたといえる。この時以後本殿は大きな改変を受けることなく保存されている。この後は『神社誌』記載では弘治二年の棟札の写がある。おそらく覆屋の修理であろう。その後は記録がないのでよくわからないが、『神社誌』によれば享保十六年（一七三二）に神社の境内と山林が福地村の庄屋伝兵衛ほか連名で、「大日堂并御社再建修造之御願」として寄付された。この時期に福寺の傷みが進んでいたようだが、このときも抜本的な工事ではなかったようである。実際の工事は宝暦二年に行われた。その前の寛延二年（一七四九）に領主に神社の境内と山林の除地の訴訟を行っている。工事前の状況は「堂舎朽敗、経像散失」とあり、大日如来像等と若王子社の玉殿（本殿）だけは残ったといい、また狐狸が交趾し「雉兔者往焉」とひどい荒廃ぶりであった。このように福寺はかなり荒れた様子であるが、当本殿はそれほどではなく壁板と浜床が修理された。この修理の時に福寺の寺観がようやく整ったようである。現在の無動寺の本堂はこのときの建築である。若王子神社の覆屋はその後文政元年（一八一八）に建て替えられた。なお現在の覆屋は昭和三十九年（一九六四）の本殿の半解体修理の際に改められたものである。

本殿（重要文化財）

覆屋に入った応永十五年の三間社流造縦厚板葺目板打の本殿である。桁行、三・四九メートル（二一尺三寸三分）。梁間、二・一一メートル（六尺九寸六分四厘）。向拝の出、一・二七メートル（四尺二寸）。身舎正面三間、向拝三間、側面身舎二間、向拝一間。身舎三方回縁。刎高欄脇障子止め。室内は桁行方向の柱通りで内外陣に区画し、内陣は間仕切らない。向拝は浜床、浜縁、木階七級、登高欄向拝柱止め。軸部は身舎は円

にした立繫格子戸引違。外陣側面は半長押上に弊軸を回し板扉を釣る。内外陣境は腰長押、内法長押間に小脇板で板扉を釣る。組物は身舎、向拝ともに和様の出三斗であるが、背面の中柱二本は柱の上に斗を置かず、に実肘木を柱に割り込んで丸桁を天載せしている。妻飾りは豕叔首^{いのこさす}で、上に大斗を置き肘木作り出しの棟木を置く。軒は身舎は一軒繁垂木、向拝は身舎の垂木を打ち越して二軒繁垂木にする。屋根は縦厚板二段葺で、板の合わせ部分に目板を載せる。棟押さえは一本から笠木を造出で、両端に鬼板。破風は通常の眉欠きの



写真221 若王子神社本殿（側面）



写真222 若王子神社本殿（正面）

柱、頭貫の鼻は肘木造りだし。扉構え以外は横羽目板。向拝は片面取方柱、桁行は頭貫で木口の鼻は肘木造りだし。身舎とのつながりは両端の柱は直な繫虹梁で出三斗から出し、身舎側は内法長押上に繋ぐ。内側の柱上は手挟^{たばさみ}で飾る。柱間装置は切目長押内法長押を回し、内陣回りは腰長押を打つ。正面は横棧^{よこざん}を吹き寄せ

反り付きであるが、屋根材が縦厚板で反りがつかないから隙間を幕板で塞いでいる。

わが国の神社本殿の様式では最も数の多いのが三間社流造であるが、建立年代が明らかな遺構では本殿が全国で三番目に古い建築である。平面では外陣側面に扉を持つ古式である。また当初の部材がよく残り、室町時代中期の初め頃の純和様の建築の様式を正確に今に伝える遺構である。さらに屋根が大和葺とも呼ばれる葺き方の縦厚板二段葺で、かつ当初材が今も使われている。わが国では良質な木材が産出するので屋根材にも多く使われてきた。しかし木材の性格上腐敗等によって残りにくく、現存する木造建築最古の遺構は八世紀の法隆寺金堂と五重塔の裳階であるが、残念ながら当初材はない。当本殿はそれに次ぐ古い遺構で、建築年代が明らかで、当初の葺板がそのまま残っている点できわめて貴重である。

六条八幡神社（北区山田町中）

中村八幡神社とも呼ばれる旧郷社で旧山田荘一三カ村の総鎮守社である。『兵庫県神社誌』では神功皇后のゆかりの社とし、また長徳元年（九九五）僧基燈が応神天皇を祈って若宮八幡宮と称したとある。さらにこの地は源為義の所領の山田荘で、保安四年（一二二三）に為義の左女牛八幡宮（京都市）を若宮八幡宮に合祀し、六条八幡宮と称したともある。源氏とのかかわりを示す確実な史料は、『吾妻鏡』の文治三年（一一八七）十月二十六日条の、山田荘は頼朝によって左女牛八幡宮に寄進されたとするものである。神社の維持は在地の有力家が担当し、鷺尾家、栗花落家などが頭屋役をつとめ、千年家の箱木家は下頭屋役をつとめた。何度か造営を重ねてきたが、現本殿は貞享五年（一六八八）の再建で、その記録を本殿床下の柱に詳しく

大日如来とある。その後大日像は盗難にあい、現在は阿弥陀三尊が宮殿の中の厨子に安置されている。厨子に比して小振りで収まりが悪い。この三尊は『神社誌』記載の銅板銘によると、御正体の光背等が破損して拝殿の上に置かれていたので、元文三年（一七三八）に新鑄したものとある。おそらく本殿に安置されたものである。『伝記』は宮司の記述なので、元文の新鑄の阿弥陀三尊が塔のためとあるが、宮殿の規模からすると塔の本尊が大日像で、明治の神仏分離の際に本殿の阿弥陀像を移し、大日像と併祭して廃仏を免れたものである。



写真223 六条八幡神社

墨書で残している。

三重塔は本殿の東北の位置にある一段高い台上に建っている。建立は『神社誌』に「神社三重塔婆記録」がある。すなわち文正元年（一四六六）三月二十九日に鷲尾綱貞・林長家道が世話人となり、大工藤原国次等で建立されたとある。また塔の初重の西南の壁に、明治四十四年（一九一）に宮司の鷲尾弥三左衛門によって書かれた『郷社八幡神社三重塔伝記（以下『伝記』）』が架けられている。この文の出所は不明であるが、おそらく社記類と心柱にあるといわれている墨書を参考に書かれたものであろう。これによると享徳二年（一四五三）に村人が三重塔建立の議を行い、同年十月十九日に起工、長祿元年（一四五七）十二月立柱、同二年二月上棟、文正元年三月二十九日に竣工した。祭神は阿弥陀三尊と

神社に塔があることは神仏習合の近世までは異質ではなかった。現に兵庫県では養父市やぶの名草神社に大永七年（一五二七）建立の出雲大社の三重塔（重要文化財）が移されている。寛文年間（一六六一〜七三）の出雲大社の遷宮の際に名草の妙見宮から材木を供出したことの見返りで、寛文五年に大社から贈られたものである。丹波市の柏原八幡神社かいばにも文化十年（一八一三）再建の三重塔（県指定重要文化財）がある。

三重塔（重要文化財）

文正元年竣工の三重塔である。本尊は阿弥陀三尊になっているが、本来は大日如来であった。四方回縁の三間三重檜皮葺の三重塔である。初重は桁行梁間とも三・八八メートル（一二尺九寸）。組物は三手先、軒は二軒繁垂木。各重の支割は下重より上層に上がるにしたがって六支ずつ通減させている。すなわち初重三二支、二重二六支、三重二〇支で、通減率が初重と二重で〇・八一、二重と三重が〇・七七とこの時代としてはきわめて大きく、安定感のある美しい塔である。二重三重の通減が大きいので、側柱をそれぞれの下重の通肘木とおしきの上に立てるといふ珍しい手法がとられている。様式的には肘木の木口がわずかであるが曲線に仕上げられているので、この部分は唐様で



写真224 六条八幡神社三重塔

施していて擬古的で中世風に見えるが、来迎壁に沿っていないこと、仕上げが台^{だい}鉋^{がな}の仕上げで、様式的には十七世紀初頭をくだらない頃と思われる。しかし丁寧な造りの唐様の優れたものである。天井は中央の仏壇の上は二重折上小組格天井。周囲の間も折上小組格天井。側柱の内法長押の上の欄間に縦の連子を入れた丁寧な細工が見られる。外周りでは二重三重の柱間も初重同様中央間が弊軸を回して板扉を開き、周囲の脇間は弊軸を回す。ただし三重の中央間の板扉は太鼓状に中央が張りだした珍しいものである。二重三重の回

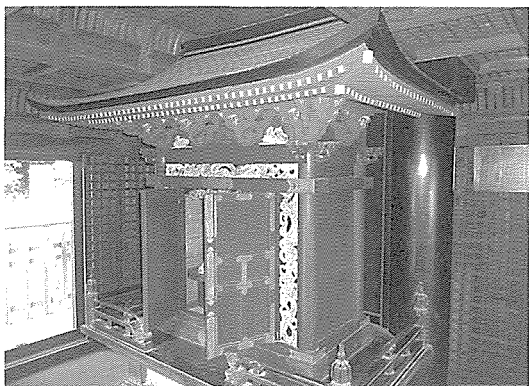


写真225 六条八幡神社三重塔（宮殿）

あるが、尾垂木などは和様で、外観全体としてはほぼ和様でまわっている。床下は龜腹である。初重の柱間装置は中央が弊軸を回して板戸を釣り、両脇間は腰長押上と内法長押間に縦貫連子の和様。組物は三重とも軒天井は格天井にした正規の軒支輪を付けた三手先である。中備は初重が三間とも間斗束。二重三重は柱間が狭いので両脇間は束を省略し、中央間のみ間斗束を立てる。初重の室内は板敷き、四天柱ではなく一回り太い来迎柱だけを立て漆塗り仕上げにしている。その位置も側柱より背面側にずらしている。来迎柱間は壁で横嵌板黒漆塗り。その前に格狭間彫刻入りの唐様の仏壇（須彌壇）を構える。高欄は逆蓮柱で斗束は握蓮、正面は蕨手である。その上に見事な宮殿を置いている。この宮殿はほぼ天井に届く規模である。様式的には小脇壁と欄間に彫刻を

縁は腰組付き切目縁、刎高欄を回す。腰組は二重で中柱上は平三斗、隅は連斗つれと。構造的にはいくつかの工夫が見られる。丁寧に造られた和様が基調の装飾の少ない清楚な三重塔である。

豊歳神社（北区大沢町市原）

『兵庫県神社誌』では有馬郡上津谷ありま（北区長尾町上津）の大歳神社の分霊で創立年月不詳とあり、祭神は大正十三年（一九二四）に決定したとある。『重要文化財豊歳神社本殿修理工事報告書』は大正十三年の「神社明細帳訂正方ノ義御願」の抄録をのせ、紀守国が大願主で永正八年（一五一一）に新たに社殿を造営し、伊勢の外宮の度会神主に請うて大歳大神に豊受大神を合祀して豊歳神社と改称したとある。祭神は内陣の右に豊受神、左に大歳神を祀っている。なお現在の社殿は棟札によると南都の大工宝田宗行等により永正八年十一月に上棟した。ただし棟札には神社名の記載はない。『神社誌』の上津谷の大歳神社の記述に永正年間、南都の大工を雇い社殿を修繕したとあるが、この本殿と同じ大工で修理をしたらしい。

本殿（重要文化財）

覆屋に入った永正八年建立の一間社隅木入春日造こけぞり柿葺の本殿である。桁行身舎、一・〇九メートル（三尺六寸）。梁間（正面）一・二二メートル（四尺五分）。向拝の出、一・〇九メートル（三尺六寸）。向拝（正面）一・二二メートル（四尺五分）。身舎三方回縁、宝珠柱高欄脇障子止め。室内は外陣を広くして内外陣に区画し、内陣は二分する。身舎の柱は円柱で、頭貫の端は木鼻、向拝柱は大面取方柱。正面は虹梁状頭貫で先端は造りだしの肘木。身舎とは海老虹梁えびこうりょうで繋ぐ。正面扉構えは中央は腰板付きの縦棧戸引分け、両脇は格子



写真226 豊歳神社本殿

戸嵌殺し。側面背面は横羽目板。床下も横羽目板。ただし背面は左側板戸片引き。内陣は腰長押上に弊軸を回し小脇板を立てて板戸両開き。向拝は浜縁、木階五級登高欄宝珠柱止め。正面は縁束間に羽目板。身舎組物は出組で正面は支輪付き。中備に本墓股。向拝は連三斗で頭貫の造りだし肘木を蔽手状の柏葉の根肘木で支え、内側は根肘木に巻斗で頭貫を支える。背面の妻飾は虹梁中央に大瓶束。軒は二軒繁垂木。向拝は身舎正面の柱上から隅木を出し、側面の垂木より二支狭めて身舎の飛檐垂木を打ち越して二軒繁垂木。

小振りであるが和様を基調にした見所の多い建築で、絵様などがよく保存されており、十六世紀初頭の標識建築といえる。向拝の蔽手状肘木は三田市の高売布神社本殿（永正十年（一五二二））の向拝に意匠は異なるが類例がある。身舎正面の引分戸の腰板に稚拙な感じがする狛犬を描いた図柄は面白い。右の阿形あぎょうの上部には太陽、左の吽形うんぎょうの上に満月が描かれている。日と月を対置させるのは三田市の小柿こがきの天満神社本殿（一五〇〇年頃）の木鼻、同じ頃の下相野大歳神社本殿の脇障子などに例がある。十六世紀の西撰の山間部の神社本殿でよく見られる意匠である。内陣の扉構は弊軸の曲面が大きなもので、扉が小振りなためそうだったのであろうが、古風で面白い。頭貫の木鼻は時代相応の形状である。身舎の墓股は四面あるが確実に当初材と思われるものは右側面のもので、肩がい

た時代相応である。図柄は松である。なお身舎正面のは寛文三年（一六六三）の取り替えて、時代による形の違いが窺える。向拝は江戸時代後期の後補の龍の丸彫臺股が残っている。組物等の極彩色や板壁の絵様は昭和六十二年（一九八七）完成の修復工事で復元されたものである。

宗賢神社（西区玉津町出合字辰間ヶ坪）

『兵庫県神社誌』では創立年月不詳で明治七年（一八七四）に村社となったとする。『明石記』では若王子権現古城跡とある。宗賢神社は三代顕宗天皇と兄の二代仁賢天皇を祀る神社である。『古事記』は山部連小楯が針問国志自牟の新室で意祁と袁祁を、『日本書紀』では山部連小楯が赤石郡縮見屯倉の新室で億計と弘計を、『播磨国風土記』では美褒郡志深里の石室で於奚と袁奚を見つけたとある。応神天皇に謀殺された忍齒王の二人の王子が難を避けて隠れていたのを、小楯により見つけ出されたのはほぼ共通である。二人は大和に帰り清寧天皇の後を継いで弟の袁祁が顕宗天皇になり、その後で兄意祁が仁賢天皇となった。『播磨国風土記』には加西市の玉丘古墳が王子の迎えを待って亡くなった根日女命の墳墓で、三木市の志染の稚児の石室が隠れた場所と伝えている。この二王子をまつる神社はほぼ旧明石郡に限られている。『神社誌』記載では旧村社である宗賢神社は七社で、祭神が同じ若宮神社を加えて八社である。そのうちで創立年代が明らかなのは平野町中津のものが正保三年（一六四六）で古く、明石市大久保町松陰の寛文二年（一六六二）、明石市魚住町清水が同十二年、同市同町長坂寺が延宝九年（一六八一）などで、いずれも十七世紀中期以降である。『神社誌』には記載がないが、西区押部谷町木津の顕宗仁賢神社は仁賢天皇の時代の創建と称して

いるが確証はない。これを除くと明石以西の宗賢神社は十七世紀以降の創設ということになる。

ところで本殿は一部に後補はあるが、様式的には室町時代後期と推定される建築で、宗賢神社の建築では最古の遺構である。背面は柱間が二間だから二神を祀る建築と見えるが、正面の柱間は一間である。しかも欄間の彫刻は三区に分かれている。その区画と位置がずれるが台輪上の両脇に龕束があり中央には斗綽の痕がある。当初は三区であった。内外陣境の内法長押の痕跡では、今の円柱より外側に柱の痕跡があり、中央間が広くとられており中央に扉のあったことがわかる。また後補だが内々陣部分は三区に分かれているから、二神を祀る相殿形式の内陣でなかったことは確かである。しかも内々陣の東の間に十一面観音が祀られている。十一面観音を本地とする神社は八坂、伏見稲荷、厳島等で、他の多くの神社の本地でもある。当社がいかなる垂迹説で本地とする神社は十一面観音としたのかわからない。当初から宗賢神社であったことも疑わしい。逆には十一面観音を本地とする祭神であることが確かだということになる。

本殿（県指定重要文化財）

室町時代後期建築で、覆屋に入った正面一間、側面背面二間、正面一間向拝付き入母屋造柿葺の本殿である。阪神・淡路大震災で傾いたので補強されている。桁行二・三三メートル（七尺六寸九分）。梁間二・三三メートル（七尺六寸九分）。向拝の出一・七六メートル（五尺八寸一分）。身舎三方回縁。刎高欄脇障子止め。室内は桁行き方向の柱通りで内外陣に区画する。内陣は間仕切らず、内々陣を三区とする。向拝は木階五級、浜縁、浜床。登り高欄は刎高欄で下部は擬宝珠柱止め。軸部は身舎は円柱、頭貫の鼻は木鼻造りだし。正面以外は横羽目板。切目長押、内法長押。ただし正面は内法長押を欠いて鴨居上にすかし彫の欄間をはめる。

竹の節の間に彫刻。向拝は大面取方柱、虹梁状頭貫の木口は繰方付きの木鼻。身舎側は巻斗にのり、向拝は桁と同高に納める。組物は身舎は和様の出組木鼻付き、隅木下の持送状の実肘木を手挟状に作る。軒天井は鏡天井。中備は正面は両脇に蓑束（羽目板の中央に斗繰りの切形があるが柱間装置は欠如）、側回りは間斗束、向拝は連三斗、中備に本蓑股。軒は二軒繁垂木、地隅木の木口は木鼻状に加工し飛檐隅木も一木で作り出す。またその飛檐隅木の木口は断面を太くする。向拝は身舎の地垂木を打越して二軒。室内天井は鏡天井。中世の入母屋造妻入の本殿は、摂津国に属する三田市貴志^{きし}の御霊神社本殿（重要



写真227 宗賢神社本殿

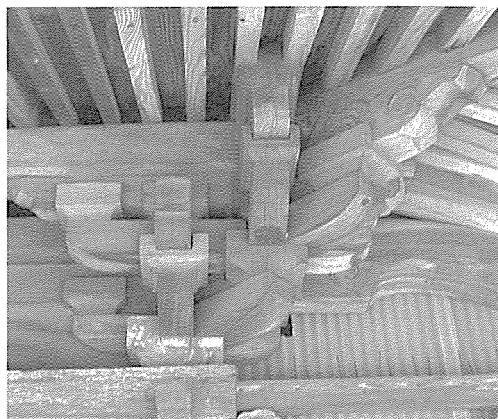


写真228 宗賢神社本殿（身舎の細部）

頭貫端は木鼻造りだし、上に台輪、正面扉構えは格子戸四枚引違（後補）。鴨居上は欄間。内外陣境区画は三区に分ち、円柱（後補）を立て、内法長押で止める。切目長押、腰長押、内法半長押で、中央は小脇板で板戸両開き、他は横羽目板。縁は^{くれえん}樽縁、高欄柱は垂木止め、

箱木家住宅（北区山田町衝原）

兵庫県には現在一棟の千年家が存在している。当家と姫路市安富町皆河の旧古井家住宅である。この千年家と称された民家は古くは県内各地にあった。同じ山田町上谷上では昭和三十七年（一九六二）に焼失した

有の面白い工夫が見られる。向拝の大面取方柱の面比が一六分の一とやや細いこと、間斗束の下部が少し広がっている事など、中世末期の神社様式を考える上でも重要である。優れた彫刻が多用されていることも特徴で、神戸市の播磨側の神社本殿の傑作といえる。

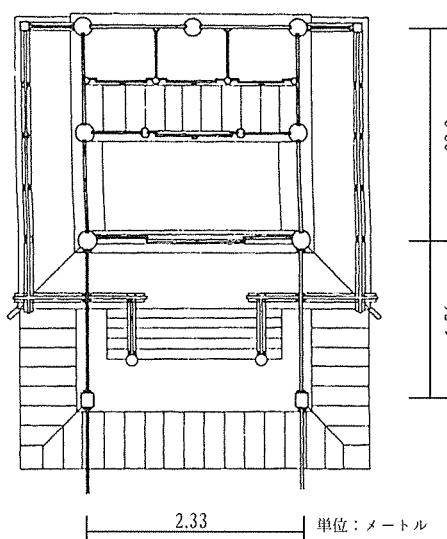


図96 宗賢神社本殿の平面図
（『神戸の茅葺民家・寺社・民家集落』より転載、一部修正）

文化財、文明二年（一四七〇）や同市の小柿の天満神社本殿（県指定重要文化財、十六世紀初頭）がある。平面は向拝を一間で、身舎正面を三間、側面背面二間に造るのは御霊神社本殿に近い。しかこの形式は播磨ではきわめて珍しい存在である。その意味で神社本殿の地域的分布を考える上で重要な遺構である。また一部に後補は見られるが保存は良好である。細部では身舎と向拝の頭貫の小口の木鼻や、組物の木鼻、隅木を支える実肘木、隅木等の意匠に優れた彫刻や特



写真229 箱木家住宅

阪田家がそうだし、淡路^{あわじ}や但馬^{たじま}でも千年家があつたが現存は二棟だけである。箱木家の『家譜』によると、千年家の名称は元禄三年（一六九〇）に亡くなった伊兵衛藤致の代に、当地を支配していた小堀仁右衛門より千年家の屋号を授かったとしている。また後述のように中世の遺構と考えられるが、一方では大同年間（八〇六―一〇）建設との伝承もある。『撰津名所図会（以下『撰津図会』）では千年家の項に、「衝原^{つぐはら}村箱木氏の家をいふ。近年まで梁文に大同二年の文字ありしが、今なし。此家の柱を見るに、古代の物にして、およそ千年以前の体なり」とある。同じ千年家と呼ばれている旧古井家

住宅では、『播州皆河邨千年屋之記』という安志藩の祐筆の丸山政熙^{ひろ}が天保七年（一八三六）に書いた記述に、天正九年（一五八一）に秀吉が姫路城を築いたときに「寿永の家は無災の千年家也」として材木を徴発したとある。寿永の家とは永き^{ことほ}を寿ぐ名称であるが、これが寿永年間（一一八二―一四）建設との伝承へとつながっている。もちろん天正九年に千年家と呼ばれていた資料はない。しかし千年家という名称はいずれの家でも自称ではなく、他者によって認証された形をとっている。

箱木家は山田川流域の地侍で衝原の開発者であろう。鷺尾家を筆頭として栗花落家・向井家などと同じ階層であった。これらの家々は六条八幡神社の宮座の頭屋役で、箱木家は下頭屋役であった。

第二節 古代・中世の建築

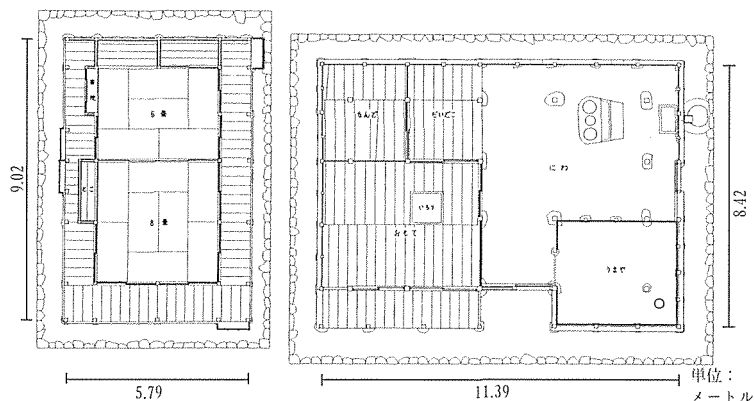


図97 箱木家住宅（主屋と離座敷）の平面図（文化庁提供、一部修正）

『摂津図会』の「千年旧屋」の図は見開きで、右頁の右上に「丹生山田鷺尾故屋栗花落氏」とあって、弁天社を併置した栗花落家がある。土塀を回し正面に四脚門と長屋を構え、矩折りに納屋状の建物が続き、奥に越屋根の主屋が見える。その下頁を渡った下部には「鷺尾」とあって、鷺尾家がより大きな敷地で正面西に濠らしきものが見え、門と長屋に矩折に建物を連続させ奥に離屋を付けた主屋がある。左頁の左上に「千年家」とあって正面に長屋門風の建物があり、鷺尾家と同じような矩折の付属屋と主屋が見える。この状況は同家の『家相図』ともあうし、昭和五十年十二月から実施した箱木千年家前庭の一次の発掘調査の結果とも合っている。ただし別頁の女性と子供が庭の古梅を眺めている「丹生山田千年屋」という図の説明には「大同の家は丹生山田箱木氏の旧屋也、柱など虫深く喰て実に千載をふる丹頂の鶴の棲也（中略）俗に千年屋」とあり、箱木家の図のはずであるが場所が判然としない。離座敷かもしれない。

『摂津図会』には箱木家の記述に続けて「また同谷東小部にも千年屋とてあり。これも古代の家なり。（中略）これより西、山

陰道の山中谷々の里には、古き家屋多し」とあり、当時から古民家が多い地域である。昭和五十年に実施した吞吐ダム水没地区文化財調査の山田川流域の民家調査でも、十八世紀にさかのぼる古民家が七棟も存在していたから、山田川流域は民家のよく残っている地域であることが確認できた。恐らく十九世紀以降に標準的間取りとなつた四間取りが、十七世紀後半にすでにこの地方では普及していたからで、この地域が豊かであつたからだと考えられる。衝原集落は旧山田村では最下流に位置しており、東の坂本の集落とは狭隘な谷で隔てられた地区である。現在は吞吐ダム建設で集落の一部の民家が東に移転し、元の姿はない。箱木家は現地のすぐ西で、北東に小丘を控えた場所で村のほぼ最東部に当たり、西側に広がる集落を見晴らせる安全な場所にあつた。この旧山田村は摂津国八部郡に属している。八部郡は民家の様式が西の播磨国と同じ平入民家の地域であるが、同じ摂津国でも有馬郡や菟原郡は妻入民家圏で、民家の分布圏としては異なる地域である。国境が民家形式を分けるのが普通だが、この地域は郡境が民家形式を分けている（平入民家は棟方向に対して直交した位置に出入口があるが、妻入民家は妻側に出入口を設ける）。国境でなく郡境が民家形式を分けている理由は今後検討すべき課題である。本住宅は昭和四十二年の重要文化財指定時は一棟で、部屋部分は正面背面ともに三室

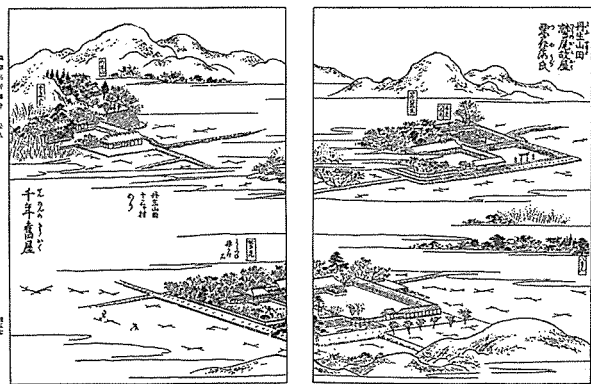


写真230 千年旧屋（『摂津名所図会』）

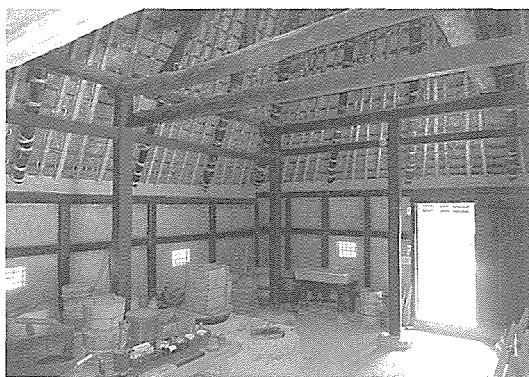


写真231 箱木家住宅（主屋内部）

の六間取りで、背面はヒロシキの土間側に三畳のツキダシが増設されたものであった。解体移築復元で現在は主屋と離座敷の二棟になっている。

主屋

平入前座敷の三間取で土間の正面側に厩を構える。桁行、一一・三九メートル（三七尺五寸九分）。梁間、八・四二メートル（二七尺八七寸）。上屋桁行四間、梁間三間、周囲半間下屋付き、入母屋造茅葺平入。平面は左住まいで正面に前座敷があり部屋の中央にいろりを切る。背面は二室に仕切られている。東半分は土間で、入り口東脇に厩、その北側に三連の竈がある。小屋組は梁間ほぼ中央の棟下に束踏つかぶみを通して、三本の束を立てて棟木を支え、三カ所で母屋を支えるがそれぞれに鳥居束を添えている。また柱上に乗る梁端から合掌を架けている。

中世の民家の特徴は床は板敷きで畳を敷きつめないこと、柱が桁方向に一間毎に立つこと、前後の部屋境でも同じように柱が立つこと、その柱間の寸法が不揃いであることなどがある。畳を敷く計画だと柱間の寸法が正確でなければ、いわゆる本間（関西間）で供給された畳を敷くことができない。しかし板敷きでは柱間が不揃いでも、一枚の板幅を調整すれば隙間なく床を張ることが出来る。土間

はなおさらのこと精度は要求されない。当家では西から東に行くに従って何故か柱間が大きくなっている。すなわち身舎の西から、一・八一メートル、二・三〇メートル（以上部屋部分）。土間で出入口に当たる柱間が二・四〇メートル、厩を含む東端間が二・八八メートルである。土間部分は作業空間であるから広くなってもよいのだが、西端間と約一メートルの差のある理由はわからない。社寺建築では規矩術で垂木間を基本に建てられるので柱間のばらつきはない。村方の普請は在地の人々の造作だから規矩の制約がないからと考えられる。なお住まい部分は前座敷であることも特徴である。また当家は前座敷の梁間が大きく、背面の部屋の梁間が小さいから、前座敷の土間境に一間毎に柱が立っており、これも特徴の一つである。

ただし現状の復元には若干の疑義がある。まず背面が二室に間仕切られているが、間仕切りが無く一室であった可能性が考えられることである。むしろ前後二室であった方が自然である。また厩の入り口の位置がおかしい。牛馬が人と同じ大戸をくぐることが不自然なのだが、大戸をくぐって直角に曲がって厩に入る設定である。これでは牛馬が厩に出入できない。このことは復元時に当主の故箱木勇も指摘していた。『つくはら 千年家とその周辺』記載の発掘の図と写真には今の厩の入口の根拠はない。厩の入口は正面側の小石の重なりの部分で、これは敷居下の小石敷である。部屋部分でも西北隅の北壁上部の桁が西妻の繫梁と重ならず下部にずれている。壁の位置を後ろにずらしたからである。ただし土間の東北隅は桁と梁は重なっている、このことも再検討が必要である。

この主屋の建立年代は十五世紀の初めと推定されている。ところが最近柱の放射性炭素年代測定によって、十三世紀末から十四世紀初期、鎌倉時代末期という研究報告が出された。ただこれらの柱が現主屋で初めて

用いられたかどうかは分からない。民家の場合は古材の使い回しはよくあることなので、なお慎重に検討しなければならない。いずれにせよわが国最古の民家として、民家史上最も重要な遺構である。

離座敷

桁行四間、梁間二間、四方半間の下屋を回す。入母屋造茅葺。南八畳、北六畳二間続きで、北以外三方回縁。桁行、九・〇二メートル（二九尺七寸八分）。梁間、五・七九メートル（一九尺一寸二分）。建立年代は不詳で、前掲書では離座敷として四代目で、十八世紀初め頃とある。当時の大百姓の家構としては離座敷を構えるのは普通である。当家ではこのほかにいくつかの付属屋を持ち、長屋門も構えていたことは、『摂津図会』でも描かれている。



写真232 箱木家住宅離座敷

第三節 遺 跡

1 六甲山南麓の遺跡

この節では、市内で発見された古代から中世にかけての主な遺跡を紹介する。

六甲山地南麓は、大阪湾沿岸の東西に長く広がる平地地域であり、東灘・灘・中央・兵庫・長田・須磨の各区を含む。市内で最も早く市街地化の進んだ地域であり、律令期以降、山陽道・西国街道などの陸上交通路、また敏馬崎や大輪田泊、兵庫津といった海上交通の要衝として繁栄して来たと伝えられている。

古代、この地域は旧摂津国における菟原郡および八都郡であり、東灘区住吉から御影付近、長田区周辺がそれぞれ郡衙推定地となっているが、未だ確証を得るにはいたっていない。その他、官衙関連では、山陽道の芦屋駅家と考えられる深江北町遺跡、須磨駅家と考えられる大田町遺跡が挙げられるほか、銅鏡や銅製帯金具が出土している上沢遺跡が注目される。

平安時代末期には平清盛ら平氏一門が、兵庫区上祇園町付近に別荘を築き、治承四年（一一八〇）には福原遷都が計画されており、祇園遺跡では庭園遺構が、楠・荒田町遺跡では大規模な溝が見つかるなど、当時の平氏の隆盛を偲ばせる遺構、遺物も周辺の遺跡から発見されつつある。

深江北町遺跡（東灘区深江北町）

深江北町遺跡は神戸市域の東端、芦屋市との市境付近に広がる遺跡で、標高約三メートルの砂堆上に立地する。平成十二年（二〇〇〇）度に実施した第九次調査は民間共同住宅建設に伴うもので、調査地区の西半部では奈良時代前半～後半の掘立柱建物・溝・土坑などの多数の遺構が確認され、東半部は全域が流路となっている。出土遺物には木簡のほか木製品多数（皿・下駄・斎串・人形・用途不明品など）とともに墨書土器を含む須恵器・土師器・緑釉陶器・灰釉陶器・越州窯系青磁などのほか、芦屋廃寺遺跡と同範の軒瓦を含む瓦や馬歯などがある。

木簡には「承和」（八三四～四八）銘で、『新撰姓氏録』にみえる「芦屋棕人」との関連が想起される「棕人」の芦屋郷内での米の受け渡しを物語る支給伝票木簡のほか、呪符木簡、荷札木簡などがある。また、墨書土器が約四〇点出土し、「驛」七点のほか、「大垣」「東」などもある。

「驛」の墨書土器がまとまって確認できたことは、深江北町遺跡が古代山陽道の「葦屋駅家」に関連する官衙関連の遺跡として評価でき、確認できた掘立柱建物は駅家に関連した遺構の一部と考えられる。

一部と考えられる。

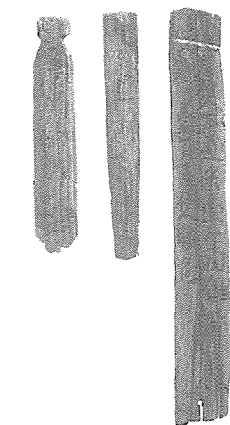


写真233 木簡（右が支給伝票木簡）

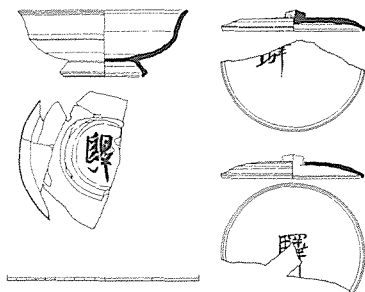


図98 墨書土器『驛』

郡家遺跡（東灘区御影町御影・同郡家、御影中町）

郡家遺跡は、石屋川の扇状地に広がる遺跡である。昭和五十四年（一九七九）春、宅地造成に伴う緊急発掘調査において発見された。「郡家」という地名は古代郡衙の故地を示すと考えられ、小字として周辺に残る「大蔵」「室内」など郡衙関連の地名も注目されてきた。郡家大蔵地区で実施された発掘調査では、南北八メートル、東西五・五メートル以上のほぼ棟方向を真北に採る掘立柱建物一棟が発見された。掘立柱建物の柱掘形は○・八～一メートルを超えるものもあり、奈良時代の須恵器環・土師器などが伴出し、奈良時代の公的な施設であると推定され、当地が菟原郡衙の一部に当る可能性もでてきた。

以後、郡家大蔵地区では、第二次調査ではば棟方向を北に採る掘立柱建物一棟が発見されている。この掘立柱建物の時期は出土遺物から平安時代前半と考えられている。このほか、下山田地区では、大蔵地区第二次調査と同様に平安時代前半の掘立柱建物が三棟検出されている。これらの掘立柱建物は、コまたは口の字状に整然と建物配置されていた。このように計画性を持った大型掘形を持つ建物群は、遺物包含層内から灰釉陶器や緑釉陶器が出土していることから、平安時代の郡衙の一部である可能性がある。



写真234 郡家遺跡下山田地区掘立柱建物群

住吉宮町遺跡（東灘区住吉宮町）

住吉宮町遺跡は、住吉川と石屋川によって形成された扇状地末端付近に立地する弥生時代中期から室町時代にいたる複合遺跡である。住吉東古墳や坊ヶ塚古墳を含む古墳時代中期～後期の古墳群が著名だが、古代・中世の様相も近年徐々に明らかになりつつある。平成八年（一九九六）の調査では文禄五年（一五九六）の伏見地震により井戸枠の上半分が崩れた奈良時代の井戸が検出され、中から「橘東家」「免」の墨書のある土師器坏が出土している。付近から土馬、瓦、円面硯などが出土しており、菟原郡衙に関連するものと考えられる。平安時代では広範囲に掘立柱建物が検出されている。第一次調査では、九世紀～十世紀初の掘立柱建物に伴う地鎮遺構が、二カ所建物の東南隅付近で発見された。ひとつは、七個の小壺を一系列に並べ二枚の土師皿で蓋をしたもので、密教における七宝を意識したものとも考えられる。もうひとつは、須恵器の小瓶を土師器坏で蓋をし、傍らに土師器一枚を重ねて伏せ置いている。中世以降では、遺物は出土するものの建物などは明確ではない。生産に関わるものとして室町時代の採石跡が見つかっている。

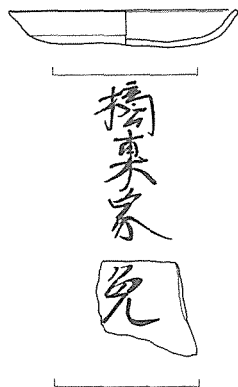


図99 井戸出土墨書土器



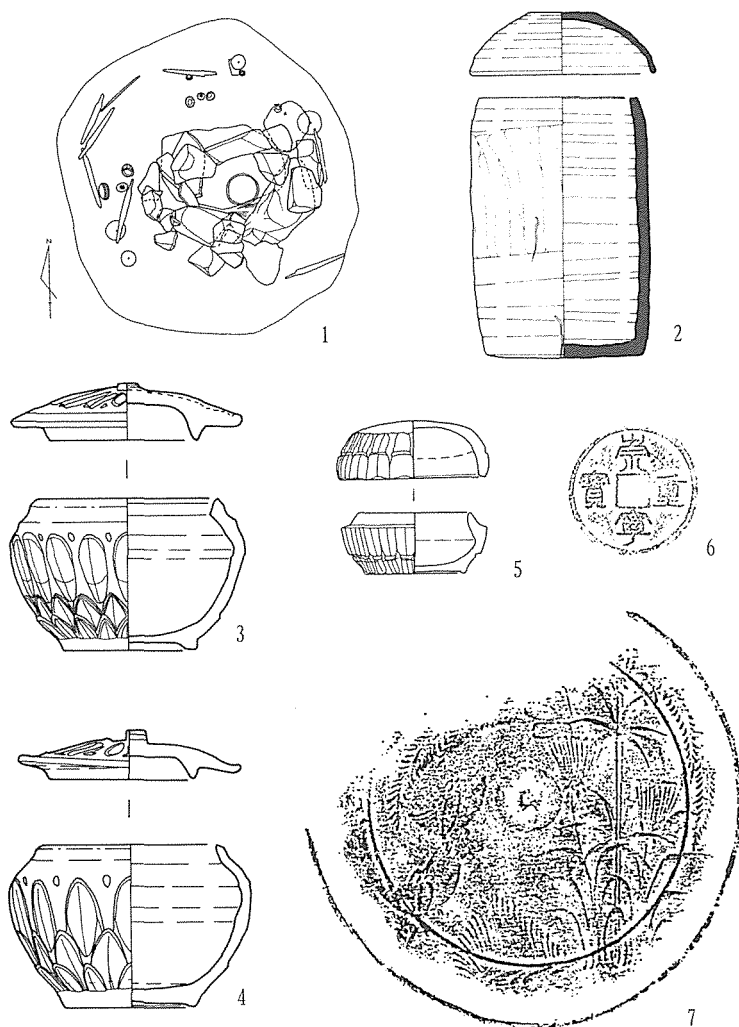
写真235 地滑りで移動した井戸

滝ノ奥遺跡（灘区高羽）

遺跡は灘区高羽^{たかは}字滝ノ奥にあり、国宝桜ヶ丘銅鐸・銅戈^{どうかく}出土地の南約三〇〇メートルに位置する。平安時代の経塚・掘立柱建物、鎌倉時代の礎石建物、室町時代の火葬墓などが検出され、三彩系陶器片・緑釉陶器・灰釉花瓶・黒色土器や軒丸瓦などが出土している。経塚は調査区北端で見つかった二間×三間の掘立柱建物の西側に位置する。本来一辺約三・八メートルの方形または台形の盛土を持つと考えられるが、上部は削平を受け明確ではない。経筒埋納用の石室は、一・一×一・四メートルの土坑中央やや東寄りに、花崗岩^{れき}礫^{れき}により構築された内法長約二〇×三〇センチメートルのものである。経筒は東播系須恵器で、蓋は同系捏鉢^{ねはち}を転用している。経筒内からは経巻の出土はなかったが、金銅製独鈷^{どくこ}杵^こ一が残存していた。石室内から和鏡八、石室掘形から和鏡五・青白磁^{せうはくじ}合子三・同壺形合子二・白磁壺形合子一・鉄製^{てつせい}刀子八・ガラス製数珠玉三が出土している。経塚の築造時期はこれから見て、平安時代末（十二世紀中頃）と推定される。

石室出土の和鏡は、経筒と石室の間の間隙に立てて埋納されており、その内訳は草花双鳥文鏡、草花蝶鳥文鏡、山吹双鳥文鏡、網代蝶鴛鴦文鏡、網代蝶鳥文鏡、草花文方鏡である。掘形出土のものは蝶双鳳文鏡、草花双鳥文鏡、松喰鶴文鏡、草葉双鳥文鏡と蝶鳥文方鏡である。石室内出土の和鏡のうち山吹双鳥文鏡には「女清原^女氏^氏」の、網代蝶鳥文鏡には「平野女^王遺^遺」の針書があり、経塚内出土の和鏡の内三面には和紙が付着し、紙に包んで埋納されたことが分かる。その他、経塚横のピットからは青白磁合子片三個体分と松喰鶴文鏡、経塚周辺から瑞花双鳥文八稜鏡が出土した。また、石室を覆っていたと考えられる栗石内から北宋^{そうほう}の崇寧^{そうねい}重宝^{じゅうほう}当十^{とうじゅう}銭（一一〇三年初鑄）一と鍍金鳳凰形飾金具一が検出されている。

第三節 遺 跡



1: 経塚平面図 S=1:40 2: 経筒実測図 S=1:8 3~5: 青白磁合子 S=1:2
 6: 崇寧重宝 S=1:2 7: 草葉双鳥文鏡 S=1:2

図100 経塚平面図ほか

日暮遺跡（中央区日暮通ほか）

日暮遺跡は、古代～中世当時の海岸線に近い扇状地末端から低位段丘上に立地する。これまでの調査で、弥生時代後期末から古墳時代、奈良時代から平安時代の集落跡が発見されており、時代によって集落の位置が変遷していることが判ってきた。

奈良・平安時代前半の集落跡は、遺跡の東半部で確認されており、束柱を持たない二間×三間から三間×四間程度の掘立柱建物が、数棟ずつのまとまりを持ちながら集落を構成しているようである。

遺跡の推定範囲ほぼ中央の第一次調査地点では、平安時代後半から末期の掘立柱建物が重複して発見された。一定の範囲内で建物が建て替えられていることから、屋敷地としての区画が設定されていた様子が判る。また、皇朝十二銭や甕を用いた地鎮遺構が調査区内で六カ所、確認されており、建物建築に際して地鎮めのまじないが、さかんに行われたことを物語る。

これまでの調査で、漁網に用いる各種の土錘や飯蛸壺などの漁撈具ぎょうぐが多く出土し、海と何らかの関わりを持った人々が居住していたと推定される。

また、この遺跡では、灰釉・緑釉陶器の出土量が多く、中国産の越州窯青磁が発見されることなどから、安価ではなかったこれらの品物を入手し得た人々が、居住した集落跡であることが窺える。



写真236 日暮遺跡第1次調査地点遠景

下山手北遺跡（中央区下山手通）

宇治川左岸、南の平野部を見晴らす丘陵末端に位置する。平成七年（一九九五）に第一次調査が、平成十七年にその南で第二次調査が行われた。当地は西に宇治川が流れ、旧村名に宇治野村の名が残り、撰津国の宇治郷に属したと推測できる。宇治川右岸は平安時代末期に平家一門が別業を構えた福原荘で、さらにその西、湊川右岸海浜沿いが輪田荘。第一次調査では、平安時代初期の邸宅が確認された。屋敷地は半町四方とみられ、主屋の南側に南北棟を左右に配し、これが渡殿でつながれる。主屋柱穴から嘉祥元年（八四八）初鑄の長年大宝五九枚が出土している。敷地の南では園池、また門跡と推定される柱穴などが検出された。第二次調査では飛鳥時代前半の邸宅の一部が確認された。掘立柱建物六棟のうち一棟は総柱建物で後の郡倉クラスに匹敵する。さらに文献史料から平安時代末期にもここ宇治の地に貴族の居宅が存在したことを確認できる。それは平清盛の盟友であった藤原邦綱亭で、吉田経房の日記『吉記』から「宇治河亭」また「宇治新亭」と呼ばれていたことが知られる。その名から、宇治川にほど近い位置にあったと推定できる。

この邦綱の居宅には、還都が決まり福原から平安京にもどる際、安徳天皇の行幸があった。これらにより当地には少なくとも七・九・十二世紀に豪族・貴族クラスの邸宅が営まれていたことが確認できる。



図101 下山手北遺跡遺構平面図

祇園遺跡・神戸大学医学部附属医院構内遺跡（兵庫区楠町、兵庫区荒田町・上祇園町ほか）

祇園遺跡ならびに神戸大学医学部附属医院構内遺跡（現楠・荒田町遺跡、以下楠・荒田町遺跡として記述）は、兵庫区上祇園町から荒田町、中央区楠町の範囲にあり、近年福原に関連する遺跡として注目を浴びている。

祇園遺跡では、庭園遺構が検出され、この庭園遺構は、築造当初は、南に堤を築き、そのやや北に離れた位置に浮島を持つもので、その次の段階では、西側に石垣を築き、全体を大小の石で敷きつめた状態へと変化し、浮島を埋没させた状態となっている。南側の落とし口付近では、多量の土師器が出土している。その次の段階では、南側の堤に洲浜を設け、全体は土で埋没し、浅い状態へと変化している。この遺跡から出土している瓦や土師器が京都産の可能性が高く、時期としては存続の時間幅が十二世紀後半に限定でき、玳瑁（たひも）天目小碗が出土するなど、時期ならびに遺構の性格などから福原における平家関連の遺構と推定できる。

楠・荒田町遺跡では、東西方向三九メートルにわたって並行してはしるU字型とV字型の溝（二本）とその北側では櫓跡と推定できる特異な掘立柱建物跡が確認された。しかしながら、その後の詳細な検討によって、櫓とされた建物は後の時代のものであり、溝も同時並存ではなく時期をたがえてのものとの結論に至っている。ただ、溝から多量に出土した遺物から、溝自体は十二世紀後半を中心とした時期と特定される。二重ではないにしても、溝は、大規模なものであり、建物を囲むような防御的な様相を示すことから、武家の邸宅関連の施設ならびに邸宅を囲む壕または区画する施設としての色彩が強く、時期もあいまって平家関連の遺構の可能性が指摘されている。

このような祇園遺跡や楠・荒田町遺跡の調査成果から、この周辺が福原の中心地と考えられる。

兵庫津遺跡（兵庫区七宮町・本町ほか）

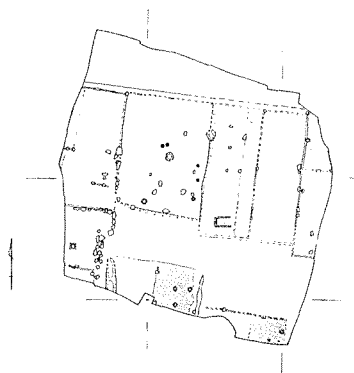
兵庫区中之島を中心として南北二キロメートル、東西一キロメートルに広がる、古代から近世にいたる遺跡である。兵庫津は『行基年譜』に大輪田船息^{おほわのふなせ}として初見するが、奈良・平安時代の遺構・遺物に関する情報は乏しい。九・十世紀の緑釉陶器片が御崎本町で、八世紀後半から十世紀代の須恵器、土師器、緑釉陶器と東西に走る二条の溝が芦原通で、平安前期の井戸が北逆瀬川町で、平安時代の遺物が本町で検出されているのみで遺物も少量に留まるが、芦原通での調査は小規模ながら大輪田泊関連の遺構として注目される。

十三・十四世紀にかけての遺構も七宮町などで検出されているが、土坑、ピットのみで町屋の具体相を把握するまでには至っていない。しかし、十五世紀後半・十六世紀になると七宮町や浜崎通で蔵建物の基礎と思われる石組み遺構などが見つかっており、断片的ながら町屋の配置を復元する手がかりとなっている。

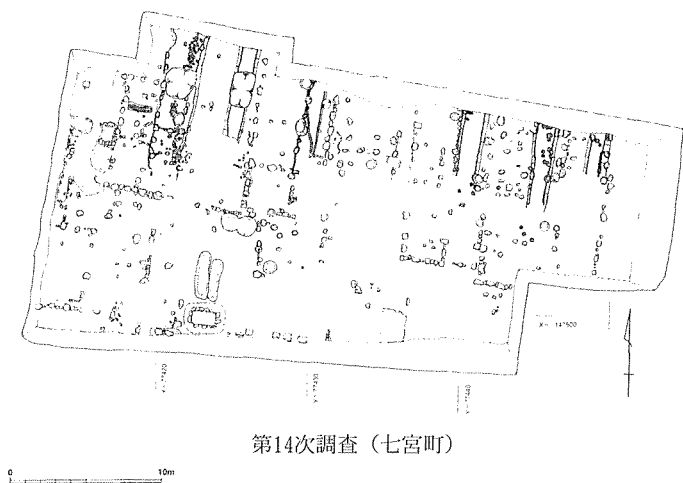
数棟の町屋の配置を知ることができるようになるのは十七世紀前後からで、七宮町の二、三の調査地で幕末頃まで連続する遺構面が見つかっており、それらは基本的には元禄^{げんろく}九年（二六九六）の「摂州八部郡福原庄兵庫津絵図」の街路などから推定される町屋の配置と一致している。また七宮町及びそれに隣接する本町での調査では炉壇が検出されており、茶室を持つ町屋があったことが推定できる。ただ、堺や京都などで見られる蔵と考えられる塙^{せんれ}列建物については現在のところ確認されていない。江戸期の鍛冶遺構も鍛冶屋町二丁目で確認され、元禄以来の地名と遺構が一致したことは注意される。北逆瀬川町では中世末から近世初頭の護岸に伴う俵積み遺構や、十七世紀半ば以降の鍛冶炉や墓地在発掘されている。近世の墓地はこのほか神明町、三川口町などで確認されているが、中世以前の墓については明確ではない。



第24次調査（七宮町）



第20次調査（七宮町）



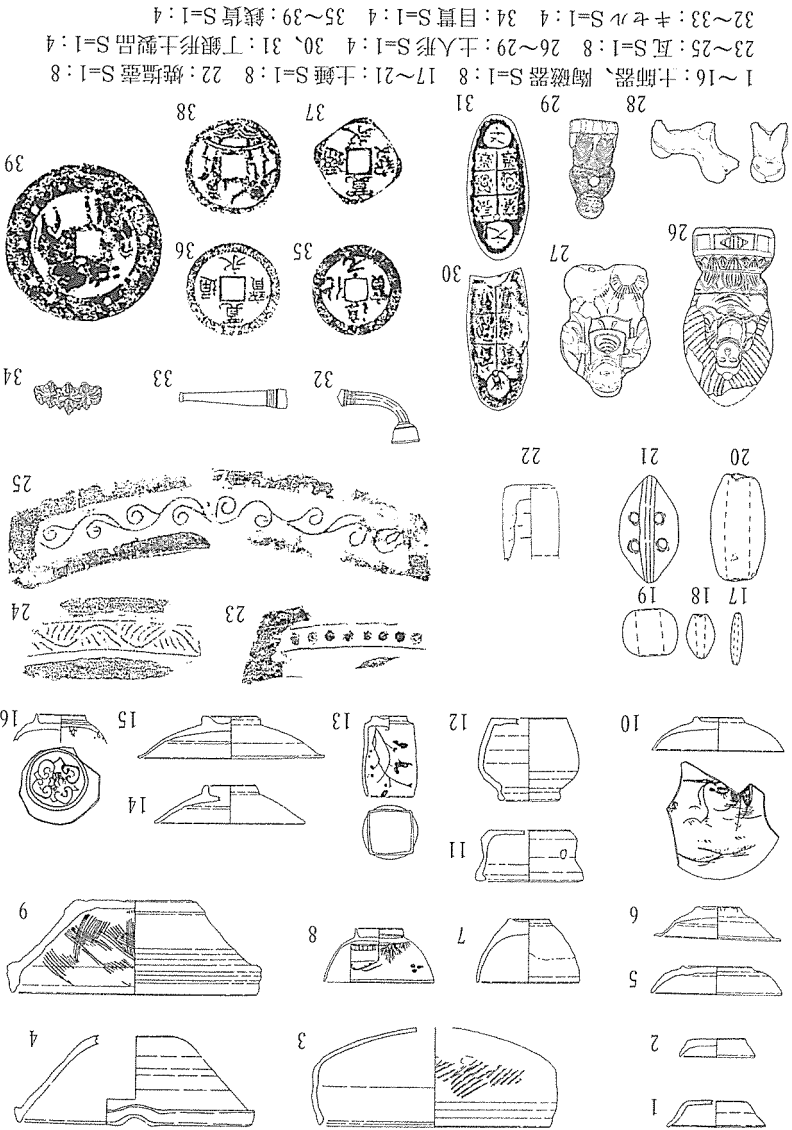
第14次調査（七宮町）

図102 兵庫津遺構平面図

町屋関係以外では、須佐野通での調査で、真光寺北東隅の濠が元禄の兵庫津絵図と合致する位置で検出されている。天正九年（一五八一）、池田恒興が花熊城の材を利用して築いたとされる兵庫城の遺構も、切戸町の調査で江戸期の陣屋、勤番所時代の北西隅付近の石垣が、中之島での調査では同期の東西方向の堀跡が見つかっている。この兵庫城築城と共に町の外周に都賀堤が巡らされるが、町中を貫通する西国街道の西の出入口である柳原惣門の遺構が西柳原町で調査されている。

遺物では国産陶磁器、輸入陶磁器、須恵器、土師器、土製品、石製品、石塔類、「従是東尼崎領」と刻まれる標柱、木製品、漆器、ガラス製品、瓦類、金属器、骨角製品のほか、動物の骨・歯、貝類、植物の種子、鉄滓、鞆羽口、炉壁、炭化材、土壁など多種多様なものが発掘されている。陶器には備前、丹波、常滑、瀬戸・美濃、京、信楽、明石、堺、唐津や萩などのみならず安南（ベトナム）の「焼締長胴壺」、磁器も肥前のほか、中国製の青・白磁、青花、朝鮮半島製の白磁皿など多岐に渡っている。土製品には土錘や焼塩壺など生活用品のほか、神仏を含む土人形、犬・猿・馬などの動物形・灯籠・太鼓橋・鳥居・城・家屋などの器物形、泥面子・芥子面や丁銀形土製品など遊戯・信仰関係のものもある。瓦も門口町、御崎本町、西柳原町、七宮町、西宮内町や西仲町などで中世の軒丸瓦、軒平瓦や鬼瓦が出土し、その中には播磨を中心に分布するいわゆる「波状文軒平瓦」の初期のものや、花熊城と同文の軒平瓦も含まれる。銭貨では宋・明銭を中心とする渡来銭、無文銭、慶長通宝、寛永通宝、宝永通宝、文久永宝、絵銭のほか寛永銭に真鍮を張り合わせた性格不明の銭貨や、天保通宝の鑄放し銭なども出土している。動物の骨・歯、貝類には、イノシシ、イヌ、ニホンジカ、サメ類、フグ、マダイ、アカガイ、アサリ、アワビ、サザエ、ハマグリ、マガキ、バイなどがある。

図103 兵庫津遺跡出土遺物



上沢遺跡（兵庫区上沢通・松本通、長田区五番町・六番町・七番町）

平成元年（一九八九）に都市計画道路房王寺線築造に伴う調査で存在が確認された遺跡で、その後の山手幹線拡幅による調査によって上沢遺跡の性格が明らかになりつつある。当遺跡は縄文から鎌倉の各時代の遺構や遺物が多数発見され、各時代の集落の中心を移しながら営まれた複合大遺跡である。

近接地には奈良・平安時代の屋瓦が出土した室内遺跡が存在し、「房王寺」「堂ノ前」「塔ノ本」「室内内」などの字名が残っていることから、上沢遺跡周辺には寺院跡、あるいは雄伴郡衙を想定する考えもある。近年の調査でも、奈良・平安時代の掘立柱建物などの遺構や遺物が多く発見され、当該期の地域史を考える上で重要性が増している。

古代の主な遺構は、八〜九世紀頃の掘立柱建物が十数棟、半截した丸太材の内面を刳り抜いた板材を三枚合わせて井戸枠とした井戸や、井籠組の井戸などが確認されている。特筆すべき出土遺物では、銅製帯金具が二点、井籠組井戸枠の井戸から銅鉢が出土している。この銅鉢は法隆寺や正倉院の伝世品に類例があるもので、貴重な発見である。また、遺構には伴わないが、重圈文軒丸瓦じゅうけんもんの瓦当が一点出土し、軒平瓦片も多く出土している。こうした遺物も、周辺に当時の寺院または官衙が存在したことの傍証となりうるものである。

中世になってからも、上沢遺跡では多くの掘立柱建物や井戸が引き続き確認されている。

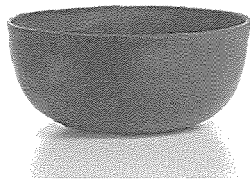


写真237 銅鉢

御蔵遺跡（長田区御蔵通・菅原通）

御蔵遺跡は荻藻川^{かろ}左岸微高地上に位置する。これまでの調査成果から、河川の微高地上に、南北方向に細長く遺構が分布していることが明らかになっている。掘立柱建物の配置は、側柱建物群と倉庫と想定される総柱建物群から構成されていることが判る。現在のところ、規模の大きな建物や礎石建の建物は発見されていない。建物の時期は概ね奈良時代後半～平安時代前半（八世紀後半～九世紀）と考えられる。

また、建物群の西側は低湿地となっており、幅約四〇～五〇メートルの遺構空白域が存在する。その西側にある別の微高地上では、飛鳥時代末～奈良時代初頭の掘立柱建物が発見されているが、この周辺の調査例が少ないため、詳細は判らない。

御蔵遺跡の性格は、出土遺物からも類推することができる。

（一）役人の居住・滞在を窺わせる五点の帯金具が出土していること。これらの帯金具は郡領層や任用国司クラスの地方官、または地方に居住する有位者が帯びていた可能性が高い。

（二）鍛冶・鋳銅関係の遺物の出土。当遺跡には一般集落にあまりみられない小鍛冶・鋳銅の作業場・工房が設けられていたことが推測される。

（三）「大殿」と墨書された曲物桶^{まげもの}の出土。前記の建物群の間で発見された井戸（九世紀代）からは、「大殿」と墨書された曲物桶が出土した。「大殿」とは宅の中心的な建築物、建物群の中心に存在した殿舎と考えられ、豪族（郡領クラス）の公私にわたる日常的な生活空間あるいは建物が存在した可能性が指摘される。

(四) 複数の硯、転用硯の出土。御蔵遺跡ではこれまでの調査で硯、転用硯が複数出土している。これは、

この遺跡に生活する人々が日常的に筆記することが必要であったことを示し、文書・木簡などの作成が行われたことを示唆する。

(五) 鉄製鈎・鍵の出土。これらは穀物・物品を収納する倉庫の鍵と考えられ、倉庫遺構と考えられる総柱の建物群を確認していることから、倉庫群で多量の物資を収納・保管する機能を有していたと考えられる。

(六) 越州窯系青磁、三彩陶器、銅鏡、土馬の出土。これらの遺物は、一般の集落遺跡よりもむしろ官衙・寺院遺跡で出土する傾向にある。限定された階層、施設で使用される物品である。

以上、掘立柱建物群と出土遺物の点から、御蔵遺跡は官衙遺跡（郡衙遺跡）、または地方豪族の居宅の可能性が高いと考えられる。

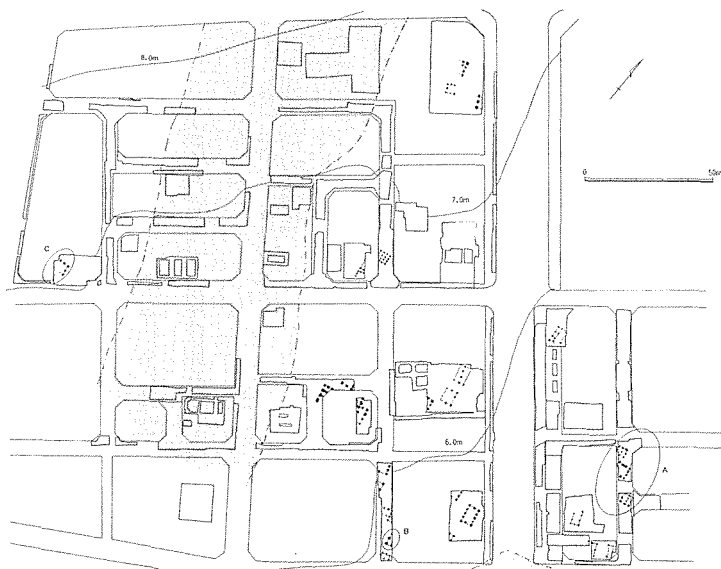


図104 御蔵遺跡主要遺構集成図

神楽遺跡（長田区神楽町）

神楽遺跡は、旧荻藻川（新湊川）の下流右岸に位置し、荻藻川、妙法寺川によって形成された扇状地上の標高約四メートルの微高地に立地している。

この遺跡は、昭和五十四年（一九七九）に市営地下鉄の建設工事に先立って行われた確認調査で発見された。その後、保育所改築工事や小学校改築工事などに伴い、これまでに九次の発掘調査が行われ、弥生時代後期から平安時代中期にいたる遺跡の実態が明らかになりつつある。

平安時代の遺構は、これまでの発掘調査で溝一条と掘立柱建物の柱跡三個が検出されているに過ぎない。

しかしながら、この幅四メートル以上、深さ八〇センチメートルの溝からは、須恵器・土師器・黒色土器のほか、緑釉陶器・灰釉陶器などの施釉陶器や、「東福」と墨書された土器が七点出土するなど多彩な遺物が見られる。この溝の埋没時期は出土遺物から十世紀中葉を前後する時期にもとめられる。

この遺跡を特徴づけるのは、須恵器・土師器などのほか、日常の食器類としての使用は考え難い東海・近江・京都からの搬入品である施釉陶器が見られる点や、墨書された土器が出土したことである。神楽遺跡について文献資料から直接得られるものはないが、八部郡衙との関連も想定される。なお、「東福」の意味については未解明である。

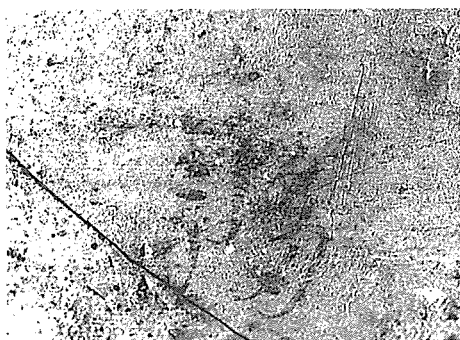


写真238 「東福」の墨書のある土器

二葉町遺跡（長田区腕塚町・久保町・二葉町）

二葉町遺跡は、標高約二丁四メートルの比高差がない平坦な地形に立地している。また、現在の海岸線から約五〇〇メートルに位置しており、海と密接に関連した集落遺跡である。

この遺跡周辺は、南北に大正筋商店街、南端の東西に六間道商店街などの大小の商店街が網目状に広がる商業地区であり、神戸市の市街地形成期から木造家屋が密集する地域である。阪神・淡路大震災により甚大な被害を被ったのち、市街地再開発事業に伴う発掘調査が開始され、縄文時代晩期から鎌倉時代にいたる遺跡の実態が明らかとなった。この遺跡が最も栄えた時代である平安時代末期から鎌倉時代にかけての集落が注目される。これは、平家の台頭に伴う大輪田泊修築や日宋貿易、福原遷都や源平合戦の舞台になった歴史の激動期に連綿と営まれた集落である。

この遺跡を特徴づけるのは、井戸の数が多く、大型の木枠を据えた溜井、同じ場所に集中して検出される建物跡などであり、海岸部における集落のあり方が判る遺跡である。出土遺物としては日常什器のほか、土錘や蛸壺といった漁撈具関連のものや、輸入磁器も出土しているが、注目されるものとして井戸枠に転用された船が出土している。この船は、船首、胴部、船尾の三材材から構成される三材構造船の胴部であり、絵巻物に描かれた船舶から船体構造の検証を強いられてきた船舶研究にとって貴重な発見となった。

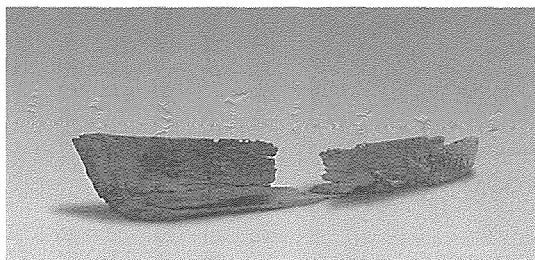


写真239 三材構造船

大田町遺跡（須磨区大田町・戎町）

大田町遺跡は、須磨区大田町六丁目周辺に所在する、弥生時代から鎌倉時代にかけての複合遺跡である。妙法寺川左岸標高一二メートル前後の沖積地に立地する。現在にいたるまでに十数次の調査がおこなわれている。調査で注目されるのは、奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物などの遺構と遺物である。調査成果から古代山陽道に面した駅家の可能性が指摘されている。十数次の調査の主な成果を以下に述べる。

一次調査では円面硯、二次調査では緑釉陶器・灰釉陶器・砥石・刀子・鉾・馬の歯や骨等、また寛平大宝・延喜通宝等が出土している。三次調査では、「荒田郡中富里荒田直」とへら書された円面硯が出土している。五次調査の須恵器甕埋納遺構の甕内からは、種子類と銭貨七枚が検出された。その内訳は和同開珎

二・萬年通宝三・神功通宝一・不明一である。長寿を願った埋納で、当時の人々の精神生活を知る上で貴重な資料である。調査全体で瓦の出土量はわずかで、瓦葺き建物の存在はなかったようである。

写真240 第3次調査出土「荒田郡」銘硯

一〇五次調査地は、主要地方道明石神戸線に面し、この道路が古代山陽道と推定されている。調査地南辺に東西方向の溝が検出され、山陽道北側の側溝と考えられる。山陽道のルートは、当遺跡から西へ海岸線沿いのルートを取る方法と他に多井畑―塩屋ルート、白川峠―伊川谷ルートが考えられているが、海岸線ルート以外のルートは当遺跡を通過するか逆戻りすることとなり、遺跡の位置と性格の解明が重要な意義をもっている。

2 明石川流域とその周辺地域の遺跡

この地域は、六甲山系の西側に連なる標高一五〇メートル前後の丘陵地を水源とし、南流する数本の河川が流域に形成している平地、河岸段丘などを中心に遺跡が分布する地域であり、現在の垂水区・西区が含まれる。旧播磨国明石郡に属し、その郡衙は、西区森友二丁目周辺に広がる吉田南遺跡にあったと思われる。

律令期山陽道は、須磨から海岸線沿いのルートまたは、多井畑から塩屋ルート・白川峠から伊川谷ルート of いずれかのルートを経て明石に入る。明石駅家は、前出の吉田南遺跡、明石市太寺町付近、同市明石武家屋敷下層遺跡などがその推定地とされる。

また、平安時代後期から鎌倉時代前期にかけて、西区神出町の神出古窯址群では、全国的に須恵器生産が衰退傾向にあったにも関わらず、盛んに生産がおこなわれていた。西日本の各地でその製品が出土しており、当時の流通を考える上で、貴重な存在となっている。

近年発見された注目される資料としては、十六世紀に築城されたと考えられる端谷城跡の埴列建物内から出土した甲冑がある。

垂水日向遺跡（垂水区日向一・二丁目・陸ノ町・神田町・天ノ下町に所在し、そのうち日向地区は海岸線にほど近い、

垂水日向遺跡は垂水区日向・陸ノ町・神田町・天ノ下町に所在し、そのうち日向地区は海岸線にほど近い、



写真241 垂水日向遺跡掘立柱建物群

砂堆とその背後に広がるラグーン（潟湖）に堆積した沖積地に立地する。遺跡が存在する時期は縄文時代から中世にかけてであるが、飛鳥時代以降は多くの掘立柱建物跡が見つかっている。特に平安時代から鎌倉時代にかけては、掘立柱建物群や井戸などが見つかっており、当時の集落景観の一部を復元することができる。その掘立柱建物跡群の付近からは在地の蛸壺・漁網に吊した土鍾・製塩土器などが多く出土しており、漁業・製塩業を主に営んだ集落と考えられる。

平安時代、この辺りは東大寺の荘園垂水荘であった。残されている文書中には「塩山」の記載がみられることから、この垂水荘は製塩に関する荘園であったことが判る。先述したように、垂水日向遺跡では製塩土器も出土しており、垂水荘との関連を窺わせる。

二ツ屋遺跡（西区玉津町二ツ屋）

二ツ屋遺跡は、明石川に合流する櫛谷川^{はぎたに}の西岸の沖積地に立地している。遺跡の成立は弥生時代の終末にさかのぼり、古墳時代や奈良時代の遺構も確認されているが、主体は平安時代末～鎌倉時代初頭の邸宅跡であった。

この邸宅跡は、一辺一〇〇メートル程度に復元可能な方形の区画溝に囲まれていたようで、調査区の北と南に区画溝の一部が確認されている。建物は建て替えを含めて七棟確認され、コの字状に配置されていたと推定されている。中心になる建物は四間×六間の建物で、建て替え後も同様の規模を有していた。

この中心建物には地鎮のための土坑が二基確認され、屋敷地内には子供のもの^{こども}と推定される木棺墓も一基検出されている。当時の習俗を知ることのできる好例といえる。建物周囲には溝が巡り、北側には柵列もあることから、他の建物とは異なることが強調されている。この中心建物の前面には、規模の小さい池も配置され、その南側には庭と考えられる遺構の空白地が広がっている。寝殿造を意識したような配置とみるむきもある。

建物群の中で注目されたのは、この池の西側にあった三間四方に復元できる建物跡であった。この建物は、本来は一間四面庇の礎石建物で、軒瓦



写真242 発掘調査で見つかった邸宅跡

片を含む瓦類が出土していることから、屋根の一部に瓦を葺いていたようである。この建物の性格については、池の西側にあたり、東側に入り口が推定できることなどを考慮して、阿弥陀堂のような持仏堂であった可能性が高いと考えられている。

古代末から中世に移行する時期（十二世紀後半）の邸宅跡は、地方の有力者層の実態を解明するにあたり大きな影響を与えるものといえる。しかし、この邸宅が営まれる以前にも廃絶後にも、これに連続するような遺構は少なく、突然邸宅が出現し廃絶している。明石川流域を含めた東播磨という地域社会の中で、平安時代末の複雑な政治状況をも考慮しながら見ていかなければならないであろう。

日輪寺遺跡（西区玉津町二ツ屋）

日輪寺遺跡は櫛谷川右岸に広がる西神丘陵の先端に立地している。これまでの調査では、弥生時代後期の集落跡、平安時代～室町時代の屋敷地跡、中世末期の寺院に伴うと考えられる遺構などが確認されている。

第一次調査で検出された平安時代中期（十一世紀代）の方形土坑は、一辺約七五センチメートル、残存する部分の深さは約四〇センチメートルを測り、ほぼ垂直に掘りこまれている。坑底は平らで拳大の円礫が敷き詰められており、その上に須恵器の壺を中心に据え、鉄鋌（長さ三四・八センチメートル、幅九・七センチメートル、重量一七四グラム）と鉄製U字形鋤先（長さ二八・三センチメートル、幅二二・四センチメートル）各一点が配置されていた。鋤先には、表面に直径約一八ミリメートルの銅銭が一点銹着（しゅうちゃく）している。銭文は腐食のため判然としないが、法量からは承和昌宝（初鋳承和二年（八三五）以降の皇朝銭であると考えられる。また下面にはイネ粃が多数銹着しており、粃を撒いた後に器物を供献した状況がみてとれ、地鎮に伴う祭祀土坑と考えられる。

また、三間×五間の掘立柱建物跡をはじめとする建物群や、土師器・須恵器・鉄製農工具類を副葬した木棺墓なども検出され、平安時代から中世にかけてこの地に連綿と生活が営まれていたことが明らかとなっている。これは二ツ屋遺跡で検出した邸宅の盛衰を視野に入れ、関連を検討する必要があるだろう。

天台宗普光山日輪寺は、奈良時代に行基によって開山されて以後、戦国期に城郭となり、十六世紀中頃に阿波三好氏の焼き討ちによって滅したとされ、本尊を安置する持仏堂が現在に受け継がれていると伝えられている。古代の日輪寺に関わる遺構は未発見であるが、寺域の東へ北東を画する築地状遺構（十五世紀～十六世紀に廃絶／第三次調査）、さらにその外側を南北に走る壕状遺構（十一世紀末～十五世紀末／第七次調査）など、中世日輪寺を推定できる遺構の発見が相次いでいる。これらは中世動乱期における東播地域の動静を明らかにするものとして、さらなる調査成果が期待されるところである。

頭高山遺跡（西区伊川谷町小寺・同前開）

頭高山遺跡は、西区を流れる伊川左岸の比高差六〇メートルほどの丘陵上に位置する。昭和五十三年（一九七八）以降の西神ニュータウン開発に伴い発見された遺跡で、弥生時代中期の高地性集落であることが知られていた。

さらに、平成五年（一九九三）度を実施された大規模な試掘調査によって、中世の山岳寺院跡の存在することが確認された。その後、平成七年から三年次にわたる調査によって、この寺院跡の全容が明らかにされた。寺院跡は、頭高山の頂上から南西方向に馬蹄形に伸びる二本の尾根と、その間の谷を利用して築かれている。また中心伽藍は、山頂付近より中腹までの斜面を切り崩して谷を埋めた平坦面に置かれ、両側の尾根上および斜面に諸施設を配置して谷筋を参道としていたようである。

本堂は、中央の平坦面上で検出された二基の基壇のうち、向かって右側のやや大きい基壇上に建てられていたようで、礎石などから、間口五間、奥行五間の規模で前面と両側面に縁を巡らせる構造であったと考えられる。また礎石には、火を受けた跡が残っており、焼土面も認められることから、焼失したことが判明した。ほかに四つの基壇と斜面を削り込んで整地したと思われる平坦面の区画が数カ所みられ、うち南斜面の平坦面では、二間×五間以上の礎石建物で、庫裏と考えられる施設が確認されたが、ほかは、明確な建物は、検出されなかった。また南側の尾根の付根付近にある五輪塔は、かつては瓦葺きの覆屋が存在したようで、ほぼ現位置を保っており、下から埋葬施設と考えられる備前の大甕が出土した。

この寺院は、出土遺物などから室町時代後期には存在していたと考えられる。やや時期は遡るが、『太山寺文書』^{じょうさい}には、貞永二年（一二三三）に伊川荘に寺領をもつなど一帯に勢力をもっていた中世寺院として「大谷寺」の名がみられる（『県史』二「太山寺文書」〔京都大学〕一二三）。現在、伊川谷町小寺の集落には「頭高山太谷寺」という寺院が存在し、かつて寺は頭高山中にあったという伝承があることなどから、この寺院に比定できる可能性が高い。

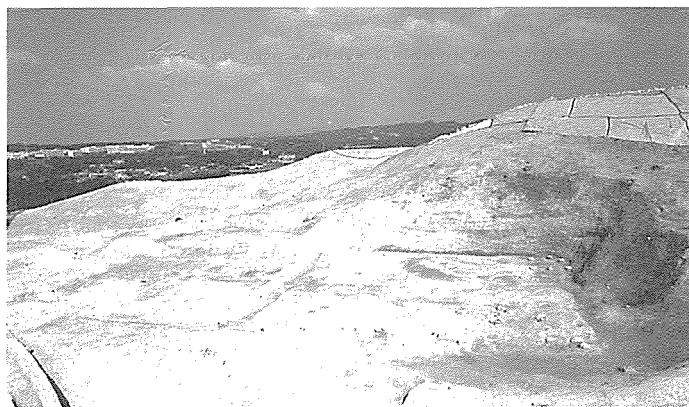


写真243 頭高山遺跡本堂跡周辺

白水遺跡（西区伊川谷町潤和・白水）

白水遺跡は西区伊川谷町潤和^{じょうな}に位置する弥生時代後期末～鎌倉時代の集落遺跡で、特定土地区画整理事業に伴って発掘調査を実施した。調査の結果、丘陵裾部に当たる第四次調査地では、平安時代中期の梵鐘鑄造遺構が確認された。現地の字名は「延命寺」とされ、近接地に寺院の存在が想定できる場所である。隣接する小さな谷地形に当たる部分からは平安時代中期末の須恵器・土師器とともに瓦当を含む瓦も多数出土している。梵鐘鑄造遺構は、直径一・五メートル、深さ五〇センチメートルの円形土坑の底部に据えられた直径五〇センチメートルの白色粘土のドーナツ形の定盤（梵鐘の鑄型を据える台）が良好に遺存しており、鑄型が据えられた上面の被熱が顕著である。「出吹き」による梵鐘鑄造が終了した後は、土坑内に梵鐘の鑄型外型片と溶解炉壁片が大量に破棄されている。出土した鑄型外型から復元すると、直径四六センチメートル、高さ約八〇センチメートルで、池の間に銘文が陽刻された梵鐘が推定できる。

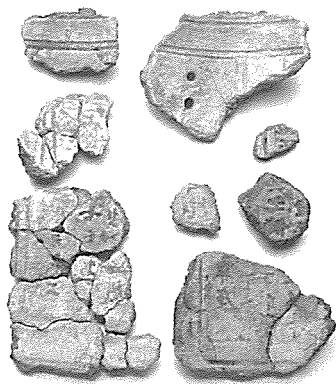


写真245 梵鐘鑄型



写真244 梵鐘の鑄型外型

寒鳳遺跡（西区伊川谷町潤和）

寒鳳遺跡は、明石川と支流である伊川との合流点の北東、伊川により形成された段丘上及び南側斜面地に立地する。平成七年（一九九五）度の共同住宅建設に伴う事前調査により発見された遺跡である。その後、数次の発掘調査が実施され、古墳時代後期及び平安時代後期の遺構・遺物が確認されている。

平安時代の遺構は掘立柱建物、土器溜まり、鍛冶炉、溝などで、広く眺望の良い台地上ではなく、段状に成形された南側斜面地にのみ構築されている。建物は数棟が復元されているが、段状地に立地することから、いずれも規模は大きいものではない。出土遺物は多量の須恵器・土師器の埴・皿類を中心として青磁・白磁、施釉陶器、瓦が出土している。

また、特筆される遺物として石帯・陶硯・青磁合子蓋のほかには描き蓮華文軒平瓦が出土しており、同様の瓦は当遺跡東一キロメートルに位置する明石郡衙の候補地でもある太寺廃寺や、北西二キロメートルに位置する白水遺跡でも類例が確認されている。

平安時代の遺跡は、特異な遺物が出土することにより、通常の集落遺跡とは考えにくく、郡衙などに比定される周辺の同時期の遺跡との関連性が注目される。また、南の谷筋を意識して立地することは、この谷筋が重要な通路として機能したものと推測され、主要な遺跡間を結ぶ要路上に位置した可能性が高く、律令期山陽道を考える上で重要な遺跡として捉えられる。

吉田南遺跡（西区森友）

吉田南遺跡は、明石川下流右岸の標高約七メートルの沖積地に位置する。東は明石川、西は王塚古墳の立地する丘陵の間にあり、海岸線からの距離は約二キロメートルである。

これまでに知られている、この遺跡の集落としての存続期間は、弥生時代後期から室町時代に至り、幾度かの縮小や隔絶があるものの、継続性の点においても、明石川流域で最も重要な遺跡の一つである。

昭和五十一年（一九七六）から行われた発掘調査によって、すでに数万平方メートルが調査されているが、遺跡の範囲については不確定な部分が多い。主な遺構として、掘立柱建物約八〇棟、竪穴住居約一二〇棟、柵列四条、井戸六基、大溝、旧河川などが確認されている。

奈良時代以降の姿を概観すると、遅くとも奈良時代の中頃には、二群の整然とした配置の掘立柱建物群が成立し、平安時代まで継続している。平安時代の後半頃にこれらの建物群は廃絶するが、鎌倉時代から室町時代にかけて規模を縮小して再び集落が形成され、近世以降は水田化している。

奈良時代から平安時代の掘立柱建物は、南流する大溝をはさんで、東西の微高地上に建てられている。建

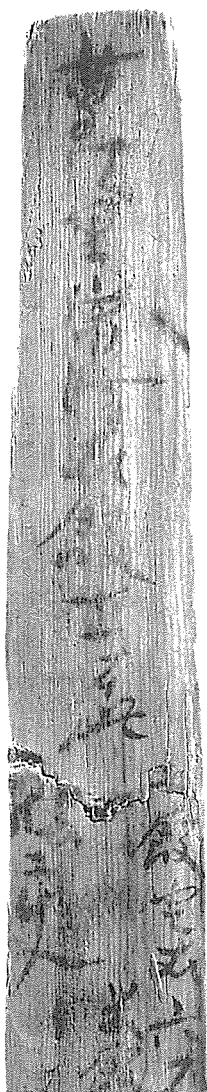


写真246 「葛江里」
木簡

物は真北を軸に整然と配置されている。建物の柱は、スギやヒノキを中心とした針葉樹が用いられ、直径が三〇センチメートルを超えるものもある。柱の下には、同じく針葉樹の厚さ一〇センチメートル以上の礎板が置かれている建物もある。複数の礎板が接合することから、現地で割材し、加工していたことが窺える。

特筆すべき遺物として、木簡、陶硯、墨書土器、木製車輪、銅製帶金具、銅鏡、銅製獣足などが出土している。また、東部掘立柱建物群の北側には、旧河川に架かっていた橋梁遺構が発見されている。

橋梁遺構は、幅約一・四メートル、長さ一三メートル以上の規模で、河床からは最大二メートル以上の高さがあったものと推定されている。主柱は直径三〇センチメートル、他の柱は直径二〇センチメートル程度の丸太杭により、構成されている。

木簡は九点出土している。米飯（干飯）の支給もしくは貯蔵に関する記録の木簡には、「葛江里」とあり、播磨国明石郡葛江郷に比定される地名が記されている。この地名は、現在の明石市藤江と推定されている。米の支給、または請求に関する記録の木簡には、「鴨郡」とあり、これも播磨国鴨郡を示すと考えられる。この地名は、現在の小野市及び加東郡の一部と推定されている。このほかに、出挙すいこに関わる可能性のある木簡、帳簿様の木簡、荷札の形態をした木簡、習書の木簡などがある。習書の中には「播磨国司移撰津職」などの文字があり、官人によって書かれていたことを窺わせている。いずれの内容も、当時の地方行政施設が存在していたことを示唆している。文字資料としては、墨書土器も多数出土している。判読できたものとしては、「主」「葛」「欠」「東」「上東」「仁」「池島」「五房」「大屋」などがある。このうち、「葛」は、木簡と同様に葛江郷に関する可能性がある。

玉津田中遺跡（西区玉津町田中・宮下）

玉津田中遺跡は、明石川中流域左岸の沖積地及び段丘上に立地する、弥生時代から古墳時代、及び平安時代後期から鎌倉時代の拠点的な集落跡である。当遺跡における中世の遺構は十一世紀中葉から認められるが、発達した集落の姿がみられるのは、徳政地区を中心に掘立柱建物の集落が営まれる十一世紀後葉以降である。十二世紀後葉になると、集落の中心は北側の二ノ郷地区や東側の辻ケ内地区へと移動する。辻ケ内地区では、居館跡が検出されている。居館は、存続期間は短かったものと推定されるが、幅五メートル、深さ一・四メートルの堀で囲まれた約七千平方メートルの敷地内において、池、建物跡、井戸、土坑、鍛冶炉などが検出された。池は面積が二千平方メートルを超えるとみられる広大なもので、多量の土器、瓦、木製品などが出土している。建物跡のうちの棟は、柱穴や礎石は確認されなかったものの、隣接する池の中より鬼瓦や軒瓦を含む大量の瓦が出土していることなどから、瓦葺建物と考えられている。

そのほか当該期の遺構は、平野地区の調査においても掘立柱建物跡などが検出されている。建物に隣接する溝から硯や黒漆の付着した須恵器、鉾^{こうさい}などが出土しており、^{しょうかん}荘官クラスの建物や工房の存在も想定されている。

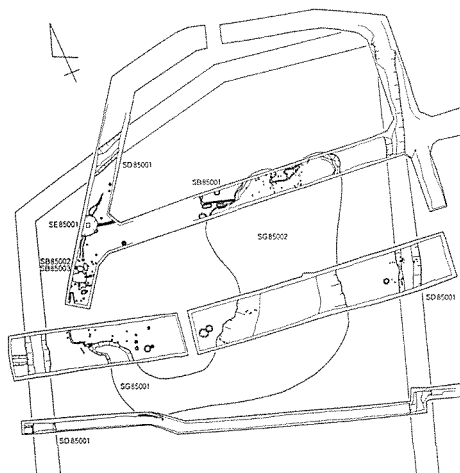


図105 玉津田中遺跡辻ケ内地区居館全体図

端谷城跡（西区榎谷町）

端谷城は明石川の一支流、榎谷川によって形成された東西に広がる榎谷の最奥部にあり、北から南に伸びる丘陵の背後を大規模な堀切によって切り離した先端部に築城された山城である。十六世紀の後半、三木の別所氏に与し、命運を共にした衣笠範景の居城と考えられている。現在「本丸」「二の丸」や「西の壇」などの曲輪が良好な状態で残されている。

平成十三年（二〇〇二）度以降、将来の史跡整備に向けて、城の構造を把握する目的で発掘調査を実施した。平成十三～十六年度の調査では、「二の丸」「西の壇」に礎石建物、掘立柱建物があることが確認されている。平成十七年度の第五次調査では、「本丸」北西隅の「物見台」に近接する埴列建物から甲冑が多量に出土した。

埴列建物は土蔵状の建物で一辺約二九センチメートル、厚さ約二センチメートルの方形埴を地中に埋め、建物の外壁とするものである。東西約六・二メートル、南北約九・二メートルを測る。建物内部の床面は北・西・南側がコの字状に約二〇センチメートル高くなっており、その箇所には拳大の小石が敷き詰められている。甲はこの石敷面の北半部から集中的に検出された。

甲は押付板、脇板などの形状から、当時「胴丸（現在は腹巻）」と呼ばれた背中で引き合わして着用するものと思われる。数量的には、胴丸の背面に一領に付き二枚ある「押付板」が二五枚出土したことから、計一三領分と推定される。ただ現在、小札の下になり確定できないものもあり、増加することも考えられる。出土した部品の大半は胴部（前後の立挙や長側）や草摺などを構成する鉄・革札であるが、胸板、脇板のほか、

八双金具、責^{せめ}鞋^{こはぜ}、笠^{かさ}鞋^{こはぜ}なども見つかった。ただ兜鉢、鍬形や袖と思われるもの、大鎧や腹巻に伴う部品そして武器類などは見られない。

鉄札は現在一四〇〇枚以上確認しており、碁石頭伊予札^{ごいしがしらいよざ}（二山、三山）及び本小札（並札、盛上、三目）などの種類がある。鍛^{くわ}に使われる札もあるが上下を交互に入れ替えた状態で検出しており、鍛の札としては使用していないものと考えられる。このことは出土した甲に様々な札を再利用した「仕返し」系のものが含まれることを示している。

城跡の中心施設と考えられる「物見台」のトレンチから出土した瓦と、この埴列建物に伴うそれとは同文で、かつ西区性海寺鐘楼付近採集瓦及び加古川市鶴林寺護摩堂・常行堂使用瓦とも共通している。鶴林寺の瓦は棟札や瓦刻銘などから永祿六年（一五六三）、同九年とほぼ断定でき、これより端谷城も一五六〇年代に築城されたものと考えられる。

また「物見台」・埴列建物出土瓦には「恵比寿」文や「宝袋」文の鬼板も含まれている。中世に遡る恵比寿像は、木像や墓^{かぶる}股^{また}などの建築部材を含めて希少なもので、福神信仰の具体相を知る上でも注意される。

なお、「西の壇」から出土した瓦の中に、西区如意寺と関係の深い十五世紀代と考えられる軒平瓦や鬼瓦が含まれることは、寺院など、山城築城以前の瓦葺建物の存在を推測させる。



図106 端谷城出土軒瓦



図107 埧列建物平面図



図108 甲 (よろい) 出土状態図 S=1:10 (右が北)



写真247 神出古窯址群釜ノ口支群3号窯

神出古窯址群（西區神出町）

神出古窯址群は雌岡山めおかの西側に広がる印南台地の北東端に位置する神出町一帯に分布する平安時代後期～鎌倉時代前期の窯址群である。窯址は、雌岡山裾の斜面や台地上を流れる小河川によって形成された浸食谷などの傾斜地などに数基から十数基が群を成して分布する。

発掘調査では数十基の窯址が発見されているが、本来は百基以上が存在していたと推定される。

窯址で出土する遺物は、灰原に捨てられた須恵器や瓦などの未製品と、須恵器を焼く際に使用された窯道具などである。須恵器には大型の甕、壺、碗や捏鉢こねばち（摺鉢）などがある。

集落は、台地上にあって、掘立柱建物などが発見されている。特に一般の集落との違いは見当たらない。

この他、集落に近い台地上で製品を作る粘土を採掘した跡が発見されている。採掘した粘土は、地表を覆う黄褐色の粘土ではなく、その下にある灰白色の精良な粘土を採取している。

なお、集落の出土遺物の中に瓦・須恵器の不良品などが発見され、出荷に先立つ選別が行われたものと推定される。

窯址から出土する遺物は、甕・壺・碗や捏鉢などがあり、平安時代後期（十一世紀中頃）から鎌倉時代前期（十三世紀前半）まで

の約二百年間の時期幅があり、時代によって主要な生産品に変化がある。

当窯址群で生産された遺物の多くは、西日本を中心に全国各地の遺跡より出土する。特に捏鉢は当窯址群の特産品という存在で、西日本の当該期の遺跡からは必ず出土し、当時の一大窯業地帯であったと言える。瓦は播磨地域各地の寺院や官衙かんがなどでも発見されるが、その主要な消費地は平安京やその周辺の寺院である。これまでの調査で、神出産の瓦が出土しているのは、鳥羽離宮・東寺・六勝寺ろくしょうのうちの尊勝寺などである。

従来、窯址の調査では、窯址だけが発見され、集落などの状況が不明であった。当窯址群では集落や採掘坑などが発見され、生産の過程を知る上で重要な資料を提供するものと言える。

また、生産品の中に瓦があり、使用された寺院の建立年代からその時代が特定できる。このことは土器の編年を考える上で重要な視点となる。



写真248 神出古窯址群出土遺物

3 六甲山地北部地域の遺跡

六甲山地の北側のこの地域は現在の北区であり、六甲山地北側斜面、帝釈^{たいしやく}山地などの山地がその主な面積を占め、また帝釈山地の北東には三田盆地にかけて丘陵が続いている。一方、河川の流域を中心とした平地や河岸段丘も存在し、遺跡は主にこうした地形に多く分布する。

この地域は旧摂津国有馬郡、同八郡、播磨国美^み囊^{なまき}郡それぞれの一部を含む。中でも現在の八多町、長尾町には、古代の官衙に関連する遺跡と推定される下小^{しもお}名^な田^だ遺跡、宅原^{えいげん}遺跡が存在する。中世には各河川流域に集落が点在し、地方豪族の荘園が存在したと考えられている。

また、『日本書紀』にもその記述の見られる有馬温泉には、安土・桃山時代に豊臣秀吉によって造営された湯殿跡と推定される湯山遺跡が発見され、注目を集めている。

六甲山地では古くから淡河^{わづか}町の石^{いし}峯^{かみ}寺^{でら}経塚や八多町の大松山経塚をはじめいくつかの経塚が知られている。さらに近年発見された勝雄経塚や再確認された有馬温泉寺伝来の銅製経箱など興味深い資料が蓄積されている。

宅原遺跡（北区長尾町宅原）

宅原遺跡は北区長尾町宅原に所在し、武庫川の支流である長尾川によって形成された谷間の沖積地と、南側の右岸から長尾川に向かって伸びる、数本の丘陵先端の段丘上に立地する。その範囲は、東西約二キロメートル、南北約一キロメートルの範囲に広がる。

飛鳥時代の遺構としては、掘立柱建物や大溝が

見つかっている。岡下地区の大溝からは「評」の文字が書かれた墨書土器や円面硯が、宮ノ元地区の大溝からは日本最古の木彫面や人形など様々な木製品と、馬骨などの祭祀に関連する遺物が出土している。

奈良時代から平安時代初めにかけての遺構としては、宮ノ元、豊浦地区を中心に掘立柱建物や溝が、また宮ノ元地区では、谷筋をせき止めた堤と、溜め池が見つかっている。この溜め池は、奈良時代に築かれ鎌倉時代まで改修しながら使用されていた。豊浦地区の溝内や、宮ノ元地区の溜め池付近からは、「五十戸□」「郷長」「山代」「田木」「池邊」などの文字の書かれた墨書土器や、人面墨書土器が出土している。

これらの飛鳥・奈良時代の出土遺物から、律令制下地方官衙がこの地域に置かれていたと考えられる。

平安時代後期から鎌倉時代にかけては宅原遺跡内の各地区に散在的に掘立柱建物がつくられる。それらの建物の付近からは、木棺墓や井戸などが多く見つかっている。岡下地区、豊浦地区で見つかった木棺墓から



写真249 宅原遺跡出土の木彫面

書土器とともに、呪符木簡・下駄・砧・箸などの木製品や鹿角、種子などが多数出土している。

室町時代の掘立柱建物や井戸は豊浦地区で見つかっており、中世末期の石敷の園池や近世の民家に繋がる掘立柱建物が宮ノ元、豊浦地区で見つかっている。

中世この地域は、三鉢寺領の宅原荘として領有されていた。先述した遺構や遺物はその頃のものであり、荘園内での生活や、散村的な荘園の景観が復元される。

宅原遺跡は、一つの限られた地域のなかで古代から現代にいたるまで連綿と集落が営まれている。このことから、農村集落の古代から現代までの変遷を知るうえで貴重なモデルとなる。また宮ノ元地区、豊浦地区付近は全国的に見ても調査例の少ない律令制初期地方官衙と、それに続く地方官衙である可能性が高く、律令制下における地方官衙の変遷を知る上でも重要である。

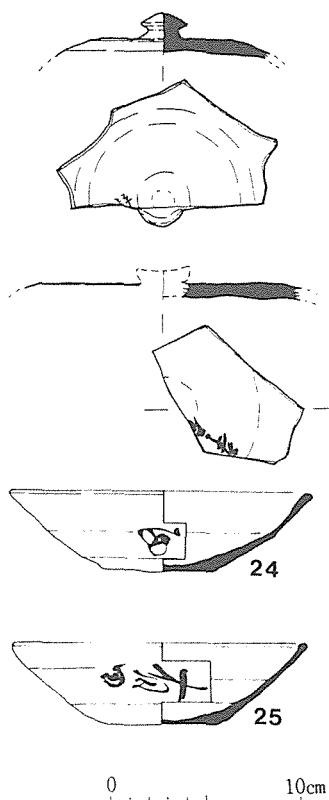


図109 宅原遺跡出土墨書土器

は、土師器や須恵器の小皿とともに青磁や白磁や碗が副葬品として出土しており、当時の葬送の風習を知ることができる。豊浦地区の井戸からは「有田」「中西」など人名を表すと考えられる文字や花押の書かれた墨

下小名田遺跡（北区八多町下小名田）

下小名田遺跡は武庫川の支流である八多川の中流域にあたる八多町下小名田に所在し、中世の大集落遺跡である上小名田遺跡の北側に近接する弥生時代～中世の複合遺跡である。近年の発掘調査では、特に、奈良～平安時代の遺構・遺物が数多く確認され、古代～中世において比較的規模の大きい集落を形成していたものと考えられる。また、出土遺物の中には、墨書土器、銅印、齋串、土馬、石帯なども含まれており、当時としては社会的地位が高く、官衙的要素をもった集落であることが窺える。中でも銅印は、奈良および平安期のものとしては、兵庫県下で六例（出土品四例、伝承品二例）あり、十二～十三世紀の遺物を含む包含層より出土している。印面の文字は漢字であれば「益」と読めるが、今のところ不明である。その他、墨書土器については、判読できたものとして「下」「天」「大南」と記されたものが出土しており、その中でも「下」は、和名類聚抄の郷名に出ている当地の地名「下幡多」を示す可能性もある。

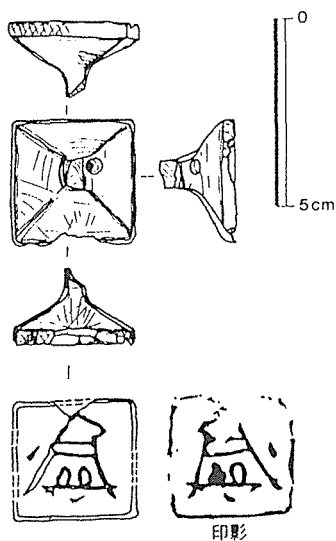


図110 下小名田遺跡出土銅印

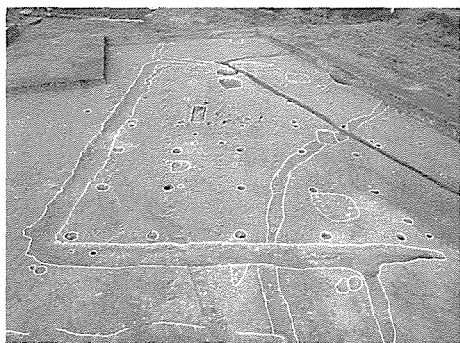


写真250 掘立柱建物

上小名田遺跡（北区八多町上小名田）

上小名田遺跡は、武庫川の支流である八多川の中流域に位置し、標高約一九〇メートルの沖積地および河岸段丘上に立地している。この遺跡は、昭和六十一年（一九八六）に六甲北有料道路の建設に際し発見され、発掘調査が行われた。その後、圃場整備事業や区画整理事業等に伴い、これまでに十数次の発掘調査が行われている。遺跡は、平安時代中頃から鎌倉時代にかけての大規模な集落跡で、特に道路建設及び区画整理に伴う調査では、南北約三〇〇メートル、東西約一〇〇メートルの範囲に掘立柱建物四九棟以上が検出された。

集落のはじまる十世紀後半頃には五〇メートル四方ほどの範囲に五棟の掘立柱建物が建てられ、同時に存在したのは三棟以内であったと考えられる。これらの建物はいずれも廂を持ち、そのうちの二棟は柱間九間×四間の大型の四面廂建物である。また当時では市内最大級の規模を誇る八間×五間の建物には、建築の際、地鎮のために皇朝十二銭のひとつである乾元大宝（初鑄天徳二年（九五八））二二枚が柱穴に納められていた。この時期の出土遺物には、須恵器・土師器・黒色土器の日常雑器のほか、緑釉陶器、灰釉陶器の施釉陶器が見られる。また、特異な遺物として、緑釉陶器の香炉蓋片や当時の貴族・役人の身分を表す帯飾りである石帯が出土している。この建物群はその規模や構造、出土遺物から、当地域の有力者の居館（屋敷地）であった可能性が高い。

続く平安時代末～鎌倉時代（十一～十二世紀）にかけては、飛躍的に集落規模が拡大していく。当遺跡の中でも、前時期の建物群の北東側微高地上や旧河道（十一世紀頃に埋没）の低地を挟んで西および南西側へといくつかの単位で集落が形成されていく。このなかでも、平安時代の建物群の北側に隣接するように形成された建物群には、柱間五間×七間以上の床面積八〇坪を超える当時最大級の掘立柱建物が建てられている。遺物には土器類のほか、溝などから下駄・櫛・箸・鍬や木簡などの木製品が出土している。この時期に八多川流域の上流では附物遺跡・吉尾遺跡、下流域では下小名田遺跡・中遺跡などの集落跡が現れ、広範囲に村落が形成されていく。その中において、上小名田では継続して大規模な建物が建てられるなど、平安時代中頃から鎌倉時代に至るまで、八多川流域におけるこれら集落の中核となっていたことを物語っている。

淡河・萩原城跡（北区淡河町淡河・同萩原）

淡河町の中央を西流する淡河川沿いはかつて京・摂津と播磨を結ぶ主要なルートであった。淡河城、萩原城は一・五キロメートルを隔ててともに街道に面する淡河川左岸の段丘上に立地する。

淡河城は淡河町淡河に位置し、淡河川とその支流とにより形成された段丘の突端に立地する。段丘は南に広く、現在は水田と化している。城の主要部は段丘の北端に位置し、南に矩形の天主台と称される高まりを持つ「本丸」と土塁・水堀・空堀により区画され、本丸の西・南にし字形に取り付く「二の丸」の痕跡が現状で確認できる。「本丸」の東及び北側は垂直に近い崖となり、川面からの比高差は約二〇メートルで天然の要害となる。「本丸」「二の丸」に遺存する土塁は幅、高さとも一・五～三メートルの規模を有し、その外側に堀が廻らされる天主台と「二の丸」を画する空堀は現状で幅一〇メートル、深さ四メートルほどの規模

を有する。「本丸」内で遺構の残存状況を確認するための発掘調査を数次にわたり実施しているが、今のところ顕著な遺構は確認されていない。後世の耕作により大きく削られたものと推測されている。

築城年代は定かではないが、淡河氏の祖は北条一族とされ、鎌倉時代の初めには地頭職として淡河荘に補任、荘名を氏としたとされる。この頃には城が存在したものと推測される。

萩原城は淡河町萩原の淡河川に面する南側の段丘上に築かれた丘城である。城の立地する段丘先端には小開析谷が刻まれ、東縁は独立丘陵状となって淡河川に張り出し、ここに「本丸」（主郭）、「二の丸」（Ⅱ郭）、「南丸」が南北に並ぶ。また谷を隔てた台地の西側には空堀と土塁により防御された「西の丸」や、「出丸」と呼ばれる突出部がある。台地南側には現在、境界を示す痕跡は認められないが、かつては東西に走る空堀と土塁があったと伝えられ、城域は二五〇メートル四方に及ぶものと推定される。台地と平地部の比高差は一六メートルであるが、台地周囲は淡河川とその支流が深く切り込んで急崖となり、自然要害の体をなす。

台地東縁に位置する「本丸」は東西三〇メートル、南北六〇メートルの矩形を体し、現在、雑木が茂る平坦面の周囲には高さ二メートルの土塁が巡り、南側は深さ五メートルに及ぶ堀切により小規模な郭である「南丸」と区画される。

「本丸」の北に位置する「二の丸」は東西一五〇メートル、南北一〇〇メートルの規模を有し、郭中で最も広く、平成五〜七年（一九九三〜九五）度の発掘調査では掘立柱建物・土坑・集石遺構・溝・堀・石垣が確認された。建物などの居住空間は郭北西部にあり、中央部は横矢や堀といった防御機能が備わる。逆L字形の堀は深さ約三メートルで、「本丸」と「二の丸」を画する。城への進入路は谷から直進したこの堀辺りと推定

されるが明確にはなっていない。

萩原城の築城時期については明らかではないが、当初は淡河荘の領主であった淡河氏の築城によるもので、鎌倉時代には存在したと考えられ、調査でも十三世紀の遺物が出土している。

天文二十三年（一五五四）には東の有馬郡から有馬氏が進出したとされ、さらに天正六（一五七八）年（一五七八）の三木合戦の際は羽柴方の城として淡河城攻略に利用された。三木合戦における勝利に伴い有馬氏は淡河城を与えられ、

天正七年萩原城は廃城に至ったとされる。廃城後は堀や谷が埋められ、急速に耕地化が進んだ状況が周辺の発掘調査からも窺える。

両城は三木合戦の前後にそれぞれ重要な役割を果たし、淡河城はその後、有馬氏の居城として一万五千石を領することとなる。かつての本町周辺には城下町が形成され、今でも旧道沿いには江戸時代の本陣跡が残り、往時の雰囲気を残す。淡河城は関ヶ原合戦の後、江戸幕府の一国一城の制により、元和三年（一六二七）に廃城となったとされる。

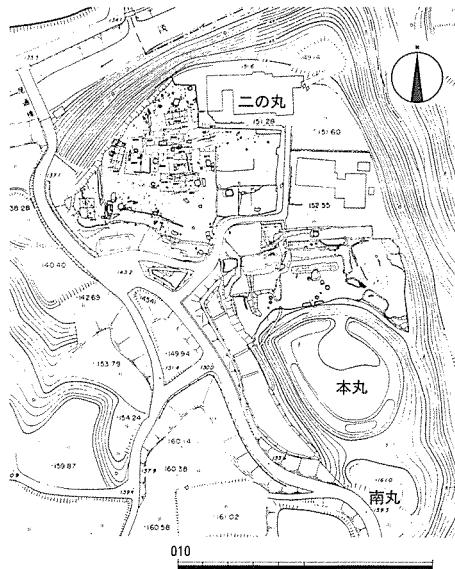


図111 萩原城跡（本丸・二の丸・南丸）

勝雄遺跡（北区淡河町勝雄）

勝雄遺跡は、加古川の支流淡河川の右岸の河岸段丘上の集落遺跡である。平成八年（一九九〇）度から土地改良事業に伴って発掘調査が実施され、弥生時代後期から室町時代の集落遺跡であることが判っている。特に平成九年度に実施した第三次調査では、淡河八幡神社の北側で、竪穴住居一四棟、掘立柱建物八棟、集落を区画していたと考えられる溝二条と奈良時代の掘立柱建物一棟が発見されている。

竪穴住居は、長方形に竪穴を掘り、北辺ないしは西辺に竈を設けている。一部の竪穴住居の竈周辺には、砂岩製の板石が発見され、竈使用時に用いられたと考えられる。また、竈と併せて屋内炉を設けた竪穴住居も発見されている。掘立柱建物は方形掘形を穿ち、二間×三間ないしは四間前後の規模で、束柱を設けない造りである。掘立柱建物の中には、竪穴住居が除却された後に建てられた建物や、竪穴住居が造られる以前に建てられた建物もあることから、竪穴住居と掘立柱建物が同時に併存していた可能性がある。

竪穴住居と掘立柱建物の時期は、七世紀初めから中頃と考えられる。一方、集落を区画する同時期の溝は、埋没後に再度穿たれた後、八世紀後半に埋まっていること、八世紀後半の掘立柱建物も一部見つかっていることから、勝雄遺跡は七世紀から八世紀まで断続的に営まれた集落であったと考えられる。

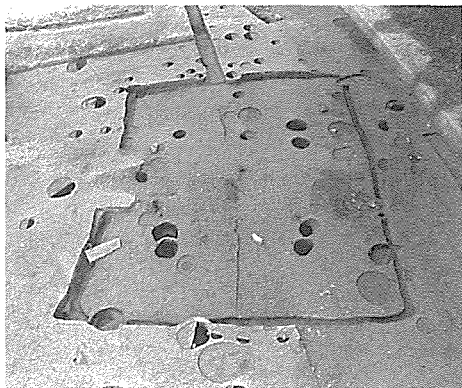


写真251 勝雄遺跡竪穴住居跡

箱木家住宅（千年家）（北区山田町衝原）

箱木家住宅は、吞吐ダム建設による移転に伴い、解体後、主屋の創建時期などを明らかにすることを目的として、床下の発掘調査が実施された。竈、厩は数度にわたる改修の痕跡が発見され、西側石積み下からは礎石、大壁の痕跡なども検出されたが、主屋の全面的な建て替えを示唆するような遺構は発見されなかった。なお、当初柱の礎石は黒褐色の盛土上に据えられていたが、この盛土直下で発見されたピットは主屋創建の

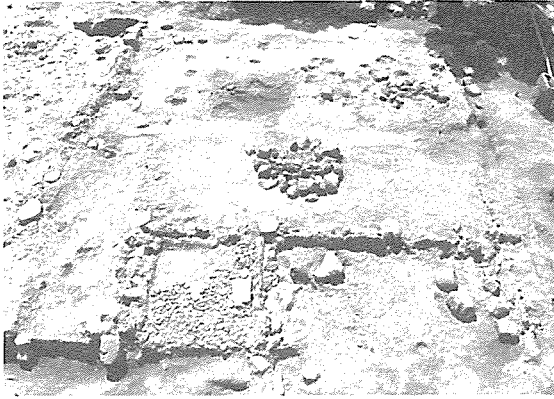


写真252 最下層離れ座敷建物跡（北より）

際の地鎮遺構とも考えられ、中には墨書須恵器が埋納されていた。この土器と西側雨落ち溝から出土した須恵質土器からすれば、主屋の建築時期が鎌倉時代（十三世紀）まで遡る可能性も考えられる。

千年家の新座敷と呼ばれる西側二室は、主屋とは時期を異にする建物であることは従来から指摘されていたが、発掘調査の結果解体前の千年家になるまでに四時期の離れ座敷が建て替えられていたことが明らかになった。最下層の建物跡は、江戸時代初期に廃絶されたと考えられる中世住宅である。礎石、同据え跡、小舞跡、掘立柱跡、壁土等の遺構とともに、囲炉裏跡付近からは、宋銭、陶器片等が出土した。南側に縁を持ち、囲炉裏のある広間を中心とした住宅と考えられる。

湯山遺跡（豊臣秀吉湯山御殿跡）（北区有馬町）

湯山遺跡は豊臣秀吉が自らの領地とした有馬温泉に建立した御殿の遺跡である。有馬温泉では、文禄五年（一五九六）に起きた大地震に伴って新たな地点で温泉が湧き出し、秀吉はそこに新たな湯屋や馬屋等を造らせたという記録が残る。この泉源は後に湯の涌出が止まるが（現在の極楽泉源は戦後新たに掘削されたもの）、その場所は名所となっていたようで、享保二年（一七一七）の『有馬山温泉古由来』にも「大かうのゆ（太閤の湯）」として記載されている。地元では現在までも極楽寺・念仏寺の境内が秀吉の湯山御殿跡であり、極楽寺庫裡（くらり）奥床下にある石組みの壁をもつ地下室が湯殿跡であると言い伝えられてきた。

極楽寺庫裡は平成七年（一九九五）の阪神大震災によって罹災し、その再建に伴って事前の発掘調査が実施された。その結果、湯殿跡と伝えられた石組みの遺構は江戸時代のものであり、これ自体は湯山御殿とは関係ないことが判明した。しかし、江戸時代の二面の火災層が記録に残るとおり確認され、さらにその下層から安土桃山時代の湯屋に関連する遺構、また庭園跡が確認されたのである。湯屋に関連する遺構には、源泉・湯をひくためのパイプ（樋）・蒸し風呂・岩風呂などがある。庭園部分では池・植木の移植跡・小規模な建物の基礎等の遺構がある。池はその構造から茶の湯に使用する水をひき、ここで汲むためのものであると考えられる。また、庭園・湯殿の背後には加工した石材を用いない「野面積み」の石垣が高さ約七メートルにわたって積まれ、その上面は幅約五～一五メートルの平坦面（帯曲輪）となっている。この部分についても試掘調査を行った結果、帯曲輪の周囲では石垣上に巡らされる多聞（たもん）と呼ばれる長屋づくりの城壁の基礎、帯曲輪の北隅では隅櫓状の建物の基礎の存在が確認され、湯山御殿の構造が重層的なものであることが判明

した。

出土した遺物には大量の瓦のほか、陶磁器類・碁石などがある。陶磁器類には花生け・茶壺・天目茶碗・向付・皿・徳利・杯・摺鉢などがあり、唐津・備前・丹波・志野・織部・瀬戸美濃など各地の製品のほか、中国製も確認されている。調査範囲だけでも一・五トン以上と大量に出土している瓦は、豊臣氏おかかえの瓦師の手になることが確認され、このことから、この瓦が葺かれた御殿の主が豊臣氏であることが確認でき、文献史料とあわせ、この御殿が秀吉のものであらうと推定できた。

現在この地に立つ極楽寺・念仏寺はともに徳川氏とかかわりの深い浄土宗で、極楽寺の本堂には徳川綱吉の母である桂昌院の奉納した厨子^{すし}があり、棟には現在も三つ葉葵の御紋が輝く。出土した茶碗類から湯屋関連の遺構が埋められたのは江戸時代の初期と考えられるが、湯山御殿が壊されるのは政治的な理由が考えられる。すなわち、豊臣氏が滅亡し、徳川の世に入ると大坂城・伏見城・豊国神社など豊臣氏にかかわる建築物は徹底的に破却されることが知られている。湯山御殿も同様の運命をたどり、その上に浄土宗の寺院が建てられたものと考えられよう。とはいえ、湯山御殿は建物やその基壇など地上部分が解体された後、埋め立てられたため、考古学的にみると、かえって良好な状態で当時の遺構が保存されていたというのは歴史の皮肉だろう。

なお、これらの庭園及び湯殿関連遺構等はほとんどが調査終了後に埋め戻されているが、再建される庫裏の一階部分が太閤の湯殿館として整備公開されており、岩風呂の実物、蒸し風呂の実物とその復元模型、また出土遺物等が展示され、庭園も復元されている。

石峯寺経塚（北区淡河町神影）

岩嶺山石峯寺は神戸市の北端、京都・大坂から播磨以西に通じる湯山街道近くに位置する。法道仙人の開基伝承を持つが、寺観が整うのは鎌倉初期と見られる。永和元年（一二七五）銘のある木造地藏菩薩半跏趺下像をはじめ、中世に遡る彫刻・絵画・典籍などを有する真言密教の古刹である。

現在、石峯寺経塚と称されるものは、三重塔後方に位置する「龍

ヶ峯」経塚と本堂西側の小山の二カ所である。後者は、同地より出土した東播系須恵器甕・瀬戸灰釉四耳壺・丹波壺等が寺に所蔵されており、経塚造営を契機に形成された納骨墓群の可能性が高い。水輪に金剛界曼荼羅成身会の種子を刻む陶製五輪塔は、小山の南東裾から出土したとされ、納骨墓の供養塔とも考えられる。注目される資料として、中世丹波窯初期の作品とされる瓜蝶鳥刻文壺がある。肩部に、二つの実を持つ二枝の阿古陀瓜が対称に描かれ、その間に鳥を配し、二枝の瓜の下部には一方に枯れた木を、もう一方に蝶を描いている。経筒を収める外容器と考えられていたが、経塚と異なる場所から出土した可能性が高いことや、口縁部を意図的に打ち欠いていることから、蔵骨器として使用されたとも考えられる。この他、墨書法華経を納めた銅板製鍍金経筒が小山付近から出土している。

なお、永久五年（一一一七）の奥書を有する朱書法華経など重要美術品認定の「播磨国石峰寺経塚出土品」は、その後の検証の結果、石峯寺経塚出土資料とは認められないことが明らかになった。

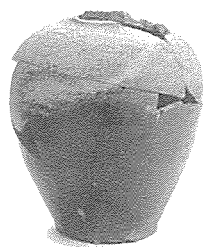


写真253 瓜蝶鳥刻文壺

勝雄経塚（北区淡河町勝雄）

勝雄経塚は、北区淡河町勝雄に所在し、高速道路建設に伴う確認調査で発見された。淡河町は六甲山系の北側に位置し、比較的広い盆地を形成している。縄文時代以降数多くの遺跡が確認されており、安土桃山時代には湯山街道が整備され、それ以降交通の要衝として栄えた。

経塚は、三木市との市境の山上の比較的眺望のよい場所に構築されていた。直径二〇センチメートル、深さ三〇センチメートルの素掘りの穴に、経筒を収納した外容器を立てた状態で埋納されていたと考えられる。経筒は備前焼と考えられる小壺に収められ、木製の蓋がされていた。経筒本体は円筒形で高さ一一・四センチメートル、直径四・七センチメートルを測る。銅製で、外面には薄く鍍金が施されてあった。筒身には、

「十羅刹女 播州住 良円

を

（バク）奉納大乘妙典六十六部

三十番神 享禄三年

吉月」

と刻印されており、播磨国の住人良円という人物が廻国納経のために、享禄三年（二五三〇）に納経したことがわかる。経筒の中には、法華経八巻が収められていた。

室町時代には六十六部聖と呼ばれる宗教者が各国を廻り、寺院などに納経を行っていたことは知られているが、経筒内に経典が残存している例は皆無である。そのような点から勝雄経塚は当時の経塚はもとより廻国納経の実態を示す資料として貴重な発見といえる。

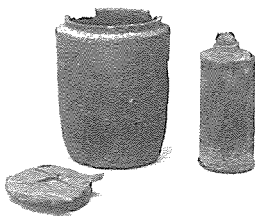


写真254 外容器と経筒